

北見工業大学
人間科学研究

第 2 号

Studies of
Human Science

Vol. 2

平成 18 年 3 月

March 2006

国立大学法人北見工業大学

National University Corporation Kitami Institute of Technology

Koen-Cho, Kitami-Shi
Hokkaido, Japan

北見工業大学

人間科学研究

第 2 号

Studies of
Human Science

Vol. 2

カールゲル著ケート語初等読本 およびドンネル収録音声資料試論

下村 五三夫* 矢萩 悦啓** 伊藤 大介***

Essay on N. K. Karger's primer of the Ket language and K. Donner's
phonogrammic sound recordings

Isao SHIMOMURA*, Etsuhiro YAHAGI** and Daisuke ITO***

Abstract

In this paper we reviewed the first Latin alphabet primer of the Ket language, written by N.K. Karger in 1934, and also looked into the phonogrammic sound recordings of the languages of the Siberian indigenous minorities, made by Kai Donner in 1912-1913 and 1914, from the viewpoints of cultural anthropology and phonetics and proposed a talker identification method.

Ket, genetically still unknown, is a minority language spoken by a population of approximately one thousand persons, who live in the areas along the Yenisey and its numerous tributaries. Before the Revolution Ket had no form of writing. In 1934 the first Latinized primer of Ket, which was replaced by a Cyrillic version in 1938, was published by the then Soviet authority and helped liquidate illiteracy among Ket people. The new writing system consisted of 28 Latin letters, a single Cyrillic one, and two kinds of diacritic symbols, each of which was designed to be easily learned by phonetically naïve Ket speakers. Most of the hand-drawn pictures and the texts portrayed their natural surroundings, costumes, tent-houses, boat-houses, routine work, people, and shamanism. In short, they produced something like a biography of the indigenous people.

In reviewing Ket, we encountered a question concerning how to interpret a glottal stop sound occurring as an allophone in this language. Our answer is that if the sound spectrographic pattern of energy seen in the interval between a glottal stop sound and its

* 北見工業大学教授 Professor, Kitami Institute of Technology

** 日本赤十字北海道看護大学助教授 Associate professor, the Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

*** 北海道大学大学院博士前期課程 Graduate student, Hokkaido University

following consonant is proven to be created by an excessive glottalization, this interval can be interpreted as a trace of the syllable that once might have existed there.

In looking into the phonogrammic sound recordings made by Kai Donner, we made a series of averaged spectral analysis on 28 speech samples from four linguistically different groups, i.e. Ket (Paleo-Yenisey), Samoyedic (Uralic), Kamassian (Uralic), Turkish (Altaic), Tataric (Altaic), and Russian (Indo-European). It was discovered that all of the 28 speech samples showed a very similar acoustic energy pattern in which energy was attenuated around the five frequencies values of 0.2kHz, 1kHz, 2.6 kHz, 3.6kHz, and 5.8kHz, irrespective of their different phonological environments.

The discovery prompted us to propose a method for a talker identification. The method focused on the local peaks in the frequency region between F0 and 0.2-1kHz for vowels. Spectral envelopes of the frequency region between 3.6kHz and 8kHz were used for consonants. If the slopes of the local peaks of vowels and consonants are overlapped at several points in these frequency regions, the talkers of the samples under comparison will be regarded as the same. Using this method, we drew a figure in which Samoyedic speech samples were assorted into four groups and Kamassian ones made a single group.

はじめに

本論文は、ロシア連邦シベリアの少数民族の一つ、ケート族（英名Ket ~ Yenisei-Ostyak, 露名 ~ ~ ~ ~ ~）のラテン文字表記ケート語初等読本¹、および当時唯一の録音装置エヂソン蓄音機により所謂蝟管に録音された音声資料(phonogrammic recording)を、文化人類学と音声学の視点より考察したものである。読本は1934年ソヴィエト連邦で出版されたものであり、蝟管資料はそれより約二十年前の1912 - 1913年と1914年の二度にわたり、オビ河とエニセイ河流域およびその連水地帯、下ってサヤン山地のアバラコヴォ村で収録されたものである。読本を執筆したのはケート語学者カールゲル(. . . , N. L. Karger) 録音記録の方はサモエード語学者カイ・ドンネル(Kai Donner)である。

主として、教科書に登場する挿絵に対する文化人類学的考察は下村と伊藤が行い、ラテン文字表記例文と音声資料の分析と考察は下村と矢萩が担当した。しかし、最終的責任は全て下村にある。

1 Karger N. K. *Bukvar UC PEDGIZ* Moskva-Leningrad 1934.

第一章 ケート語初等読本の読解

1 - 1 ケート民族

ケート民族は西シベリアの大河エニセイ河の中下流域、そのタイガ地帯とトゥンドラ地帯に住み漁労と狩猟を営む少数民族である。ket は‘人’を意味する自称であって、複数形はデング deng ‘人々’という。他にオスティク ostyk とかユグイン jugyn とも言った。今もってその言語系統が不明であり、シベリアの謎の民族とも言われている。この言語はその孤立性と文法構造の特殊性から、古来多くの言語学者の興味をひいていた。ケート語はシベリアの他の言語、例えばサモエード語やトゥングース語、とは著しい違いを見せ、言語学者により、漢・チベット語、北コーカサス語、バスク語 (Basque)、日本語²、ビルマ語、果ては北米インディアン語とまで、その系統関係を比較された経緯をもつものであり、しかもその根拠のいくつは強力であった。

謎の民族とはいえ、シベリア民族学は彼らの成り立ちについて次の様な歴史を再構築している³：祖先は青銅器時代にオビ河とエニセイ河の南の連水地域で、南シベリアのユーロペイドと古代のモンゴロイドとの混血によって成立した。紀元千年紀にチュルク語諸族、サモエード語諸族、ウゴル語諸族と接触をもつようになった。数波の移住によりエニセイ河北方に定着した。ロシア人との出会いは17世紀の初めである。

この南方起源説の成り立つ経過を、民族学者ポポフ (. . . A. A. Popov) とドルギフ (. . . B. O. Dolgikh) の考えをモデルに更に詳しく紹介しておこう⁴。

十七世紀(史料の教えるところ)、ケートと言語的に親縁関係にあったアリン(Arin)、ヤリン(Yarin)、コット(Kott)、およびバイコット(Baykot)は、馬を飼い牧畜を行っていたが、農業も行い、更にはまた鉄鉱石からの鉄の精錬も知っていた。今日のケートは、ガウンに似た開放的な服を着、ショール(Shor) 族の鍛冶技術に近いものをもっており、これらはいずれも南方に起源がある⁵。エニセイ河流域のタイガは農業、牧畜には不向きであり、南方にその適地がある。また鉄鉱石はアルタイ山地がその供給地であり、

2 ケート語の権威クレイノーヴィッチ (. . . , E. A. Kreynovich) 博士は日本語の /χito/ ‘人’ と /ket/ ‘人’ が音的に類似しており、両者になんらかの関連があるかの印象をもっていたという (ロシア連邦科学アカデミー民族学研究所 通称 上級研究員スベヴァコフスキー博士 . . . , A. B. Spevakovski からのご教示)。筆者(下村)は、上代日本語で「ヒト」は両唇音で始まる /pito/ ~ / ito/ であり、むしろ音的距離は遠いと指摘させていただいた。

3189.

« . . . » 1994.

4 Popov A. A. and Dolgikh B. O. The Kets. *The Peoples of Siberia*, edited by M. G. Levin and L. P. Potapov. The University of Chicago Press. Chicago and London 1965.

5 同論文、頁 608。

ここには鍛冶に優れたチュルク語系民族が居住している。これが彼らの故郷が南であるとする根拠である。

民族誌も南方を示唆する。その伝承は、「突破することが困難なほど高い山を越え、自分たちは南方からシベリアへやって来た」と語る。東方にあるウラル山地は千メートル程であり、植生も地勢も踏破には容易であり、伝承の語る山とは考えられない。またケートの人々は決まって、「南に居た頃はトイシタッド Tys'tads ‘山の石人’から攻撃を受け、北へ移住したのはそのせいだ」という話をしている。次に、(エニセイ上流へやって来た)ケートは強いキリキ(Kiliki)の攻撃に遭い、河を更に下らなければならなかった。この伝承の内容は、(ケートの居住しない)エニセイ河上流のある支流につけられた名称の意味がケート語を基にして解釈可能である事実に暗合する⁶。よって歴史資料も民族誌も、彼らが南からエニセイ河上流に入り、その後中流域に下ったことを推測させるのである。

今日のケートの人口は凡そ千人を超えるほどであり、このうち母国語話者は半分以下である。第二次世界大戦では成人男性人口の半数が召集され、狙撃兵として対独戦線に投入され多くは戦死した。これにより戦後は数百人にまで人口が減少したという⁷。現在ほぼ全てのケート人はロシア語との二重言語話者であり、連邦公用語としてのロシア語と母語として各民族語の両方を初等教育の段階で習得させるという、法による言語政策が比較的効率良く行われた民族と言われている。古くは同語と系統を同じくする言語として、アリン語 (the Arin) アサン語 (the Assan ~ Asan) コット語 (the Kott) があったが、周囲の民族との同化が進んだ結果消滅した。

1 - 2 ラテン文字表記初等読本

初等読本はロシア語で ブクワリー、英語で primer プリマーと呼ばれるが、ケート民族のための最初のもは、当時の欧州の殆どの国々で採用されていたラテンアルファベットによって書かれていた。それは *Bukvar* の書名で1934年UCPEDGIZ (学校教育出版) から出版されている。著者は前述のケート語学者カールゲルであり、同年モスクワとレニングラードで計1200部出版された。この部数は当時のケート民族の人口がこれほどの数しかなかったことを物語る。

この初等読本は、その後北方諸民族の初等読本がキリル文字 Cyrillic scripts (所謂ロシア文字のこと) を使ったものにとって代わられる1938年までの短期間、実際に教育現場で使用されたものである。言うまでもなく、スラヴ民族の使用する文字には、ギリシア文字に基づくキリル系とローマアルファベットに基づくラテン系との二種類

6 同論文、同頁。

7 同じく . . . 氏からの教示。

がある。前者はロシア語、白ロシア語、ウクライナ語、およびブルガリア語とセルビア語に於いて使われ、後者はポーランド語、チェク語、スロヴァキア語、スロヴェニア語、クロアチア語、マケドニア語で使用されている。この使い分けは東方正教（ギリシア正教）とローマカトリックの祈祷書 祈祷書もまた英語で primer である の印刷文字の伝統に従ったものだ。

「十月革命」(旧露暦では十月だが、新暦により十一月に祝われる)ロシア帝政を打倒したレーニンは当初より、ツァーリ体制の抑圧的な社会法制度と被抑圧階級にはびこる文盲の象徴的原因とも見えたこのロシア文字を廃止し、英独仏という欧州列強と彼らに親近な文化をもつ西スラヴ民族が使用する文字である、ローマアルファベットを革命後のロシア民族の文字として導入しようと考えていた。彼はまたロシア帝国内の非ロシア系民族がその独自の文化を保存し発展させるためには、教育水準の急速な向上が必須であると考え、彼ら独自の文字をもつことが肝要であるとも確信していた。

新国字としてラテン文字を採用するというアイデアは、スターリンを除く当時のロシア共産党幹部の多くが欧州列強国での生活経験をもち、英独仏語を解するインテリゲンツィア出身であったことによっても受け入れ可能なものであった。また当時のロシア人大衆の間での識字率の極端な低さも、逆に、ラテン文字採用がむしろ容易であるとの考えを彼らに抱かしめる原因の一つであった。ソヴィエト連邦のその後の教育制度を確立した、人民教育委員ルナチャルスキー（ . . . , A. V. Lunacharski 1875 - 1933）も、レーニンのこの考えを推進しようという考えであったが、彼自身も英独仏の外国語に堪能であり、更には人工国際語エスペラントの唱道者であった。

このようなラテン文字導入に肯定的な雰囲気のもと、1933年頃までに言語学者たちは北方諸民族の言語記述のための文字体系を完成させていた。本論文が扱うケート語初等読本もまた、初期ソヴィエト連邦が公認し、立法化までして推進した文字変換政策の下に出版されたものである⁸。しかし、この文字改革運動は数年で挫折する。1938～1940年スターリンはスラヴ民族に対しては勿論のこと、国内非スラヴ語系民族全てに対し、キリル文字に復帰することを命じたからである。

1938年という年は象徴的である。「右翼ブロック・トロツキスト陰謀団事件」の首謀者ということで、政敵ブハーリンが処刑され、あらゆる面での欧州風を嫌悪唾棄し、極端な排外主義を標榜するヨシフ・スターリンの独裁体制が完成した時代であった。彼が嘗ての革命運動同志であった友人たちのみならず、政治に無縁な学者までをも、

8 ソヴィエト連邦に於けるラテン文字初等読本編纂の歴史的背景は、金子 亨「ラテン式書記法始末記」(千葉大学ユーラシア言語文化論講座刊『ユーラシア言語文化論集』第3号、2000年3月30日)に鮮やかに描きだされている。

右翼トロッキスト、ドイツ、ポーランド、および日本帝国主義のスパイ等々の様々な罪名のもとに、次々と肅清処刑していた恐怖の時代であった。カールゲルが著したこの初等読本が刊行された1934年も、ラテン文字表記を採用した教科書編纂者や、それを提唱した言語学者に、自らの行方について何かしらの恐ろしい結末を既に予感させる時代であった。

では、スターリンは何故ラテン文字をロシア文字に復帰させたのか。グルジア人であるスターリンは歴史的に敵対関係にあったトルコ系民族を嫌悪していた。連邦内でトルコ系民族がその連帯を強めて外にまで広がり、国字のラテン文字化を成功させて国力を充実させている新生トルコ共和国と結びつくことを恐れた、これがスターリンのキリル文字復帰政策の理由の一つであると考えられる。

International Azerbaijan(Internet version)⁹に拠るならば、連邦内トルコ系民族でのラテン文字採用の歴史的経緯は次のようなものだった。1924年アゼルバイジャン共和国の首都バクーにボリシェヴィキ政権が樹立され、彼らはアラビア文字を廃し、ラテン文字で公文書を書くことを決定した。1926年第一回トルコ学会議がバクーで開かれ、全世界から集まったトルコ学者たちは、チュルク諸語の音組織の記述にはラテン文字が最適であるとの結論に達した。1928年、トルコ共和国の初代大統領アタチュルク Ataturk は、千年以上続いたアラビア文字による書記法を、修正を加えたラテン文字のものに置き換えた。1928年、モスクワに“Yeni Alif”(New Alphabet)という名の委員会が設けられ、ラテン文字化の問題が討論された。同年連邦内の六つの全トルコ系共和国(Azerbaijan, Turkmenistan, Tajikistan, Kazakhstan, Kyrgyzstan, Uzbekistan)に対してラテン文字が採用された。当時、この文字システムは、これらの民族間での意思疎通を促進している。かような立法措置は、トルコ系民族の文化的一体感を醸成することとなった。

この国語文字改革により、新生トルコ共和国での識字率は急激に上昇している。その明瞭な結果の一例は、召集兵士への兵器操作の教育訓練の効率向上と、彼らの戦闘技術の向上である。オスマントルコ時代の兵士はその殆どが文盲であった。オスマントルコに見られた状況と同様なものが帝政ロシアの軍隊に存在していた。文盲のロシア兵士の戦闘能力と士気の極端な低さは、第一次欧州大戦でのタンネンベルグ戦に如実に現れており、ただ一度の会戦で十万人が戦死している。その一方、ドイツ軍兵士は新兵の時すでに近代兵器の運用と戦技を教える教本を読むことができた。革命とその後の国内戦を戦いぬいたレーニンにとって、オスマントルコのアラビア文字に相当するものがキリル文字であった。ラテン文字採用により国民の識字率を急速に向上さ

9 Azerbaijan International, Summer 1997 [5.2](Internet version). Alphabet Transitions: The Latin Script: A Chronology. *Symbol of a New Azerbaijan*, by Tamam Bayalty.

せ、それによって軍隊と産業の近代化を一気に進めることが可能であると、レーニンは考えていたのである。

再び *Azerbaijan International* に拠れば、1930年代になって、スターリンはトルコ系民族のこの連帯をソ連体制に脅威を与えるものと考えようになったという。彼は1939 - 1940年連邦内全トルコ系民族に Cyrillic scripts を強制している。更には、相互意思疎通を阻害する目的で、各チュルク語方言間に共通の音に異なる文字を割り当てている。それ故に、例えば /ŋ/ は各共和国で別々の文字で表記されることになった。こうして、口語以外での文章語での意思伝達は困難なものにされたという。

1 - 3 初等読本の例文読解と解説



男女二人の児童の顔つきは私たち日本人と変らない。実際ケート人の容貌は、虹彩の色が淡い点を除くならば、日本人と変わらない。絵の犬はサモエド犬である。B5版58頁1200部印刷されたこの教本の表紙には以下のような記述があり、ラテン系文字の採用が共産党中央委員会レベルで決定されたことを示している：

(ソヴィエト連邦中央執行委員会北方諸民族科学協会編)

BUKVAR (初等読本) N. K. KARGER didənuol ət (N. K. KARGERが書いた)

UCPEDGIZ (学校教育出版) MOSKVA 1934 LENINGRAD

更にその裏には、上のケート語にロシア語で次の訳文が付けられている：

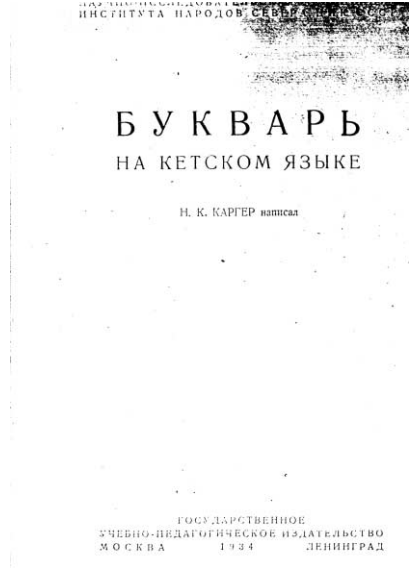
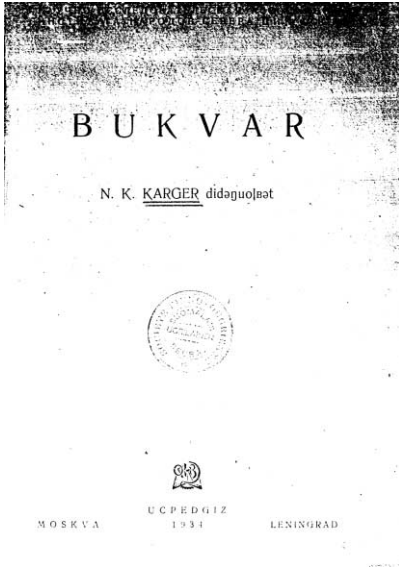
(ケート語初等読本)

N. K. Karger (N. K. KARGER 著)

1934

(国家学校教育出版 1934年、モスクワ・レニングラ

ード刊)





女性教師と児童からなる頁である。ケートではスカーフは女だけの被り物ではなく、男もまた被るものである。極北では毛皮帽子が役に立つと思われるが、実は、それは労働には適さない。毛皮帽は少量の運動でも体温を上昇させ、冷却するには脱がざるを得ず、煩雑となる。体温を調節するには、この絵のように被り物を使う方が容易なのである。日本でも、本州秋田、青森の日本海側、および北海道全域で、漁師の男性はこの絵と同様にスカーフを被り、口をすっぽりとその端で覆う。

黒板の絵は、大鹿が二頭の犬によって逃走を抑制されている場面である。壁の絵の水鳥は水面から飛び立った瞬間であり、右手の方向にはおそらく仕掛けられた網がある。水鳥の捕獲にケートの猟師は散弾銃をあまり使うことをしない。銃猟は水鳥には効率が悪く、その上消耗品である火薬、散弾、薬莖などが高価であるからである。水鳥は湖水から追いたてられると一斉同一方角に飛び立つ習性を持ち、その方面に捕獲網を展開しておくならば、それらを効率的に多数捕獲することが可能となる。水鳥は肉と羽毛を供給し、ともに本読本37頁に登場する kooperativ (co-operative) 「協同組合」に納入される。

読本54頁に、ケート語音素の一覧として次のような字母表が掲載されている。

Alfavit.

<i>Aa</i>	<i>Bb</i>	<i>Cc</i>	<i>Dd</i>	<i>Ee</i>	<i>Əə</i>
<i>Ff</i>	<i>Gg</i>	<i>Hh</i>	<i>Ĥĥ</i>	<i>Ji</i>	<i>Jj</i>
<i>Kk</i>	<i>Ll</i>	<i>Mm</i>	<i>Nn</i>	<i>Ŋŋ</i>	<i>Oo</i>
<i>Pp</i>	<i>Qq</i>	<i>Rr</i>	<i>Ss</i>	<i>Tt</i>	<i>Uu</i>
<i>Vv</i>	<i>Zz</i>	<i>ƷƷ</i>	<i>Ьь</i>	<i>Ææ</i>	
<i>Ĺĺ</i>	<i>Ņņ</i>	<i>Šš</i>			
<i>Īī</i>	<i>Ēē</i>	<i>Īī</i>	<i>Ōō</i>	<i>Ūū</i>	
<i>Āā</i>	<i>Eē</i>	<i>Īī</i>	<i>Ōō</i>	<i>Ūū</i>	

54

23個の一般的なラテンアルファベットとその修正文字4個、下書き /、/、ロシア語軟音記号を転用した、及び *Æ æ* から成っている。先ず最初に注意すべきは三番目の *C c* の文字であるが、これは /*ʃ*/ である。読本の表紙に印刷された UC PEDGIZ の語が、ロシア語の *Ц ц* に対応し、*C* の文字が /*ʃ*/ の書き換えとなっていることから、それがわかる。但し、読本49頁のタイトル *Bolnica* これはロシア語の *Больница* ‘病院’ に対応の表記から推測されるが、*c* は [ʃ] と発音される場合もある。六番目の文字 *Ə ə* は mid-central vowel 中舌中高母音 /ə/ に対応する。九番目の文字 *H h* は velar-fricative voiceless 軟口蓋無声摩擦音 /x/ であり、十番目の *Ĥ ĥ* はその有声音 /ɣ/ である。十二番目は日本語のヂの音ではなくヤユヨの出だし音である approximant 滑脱音（半母音）/j/、即ちロシア語の *Й й* に相当する。十七番目の文字 *Ŋ ŋ* は velar-nasal 軟口蓋鼻音 /ŋ/、二十番目 *Q q* は uvular stop voiceless 口蓋垂閉鎖音 /q/ である。二十七番目のハイフン重ね書き *Z z* 文字は alveolar-affricate voiced 有声齒茎摩擦音 /ʒ/ である。二十八番目の *Ь ь* は母音を表わす文字であり、ロシア語の軟音記号 *ь* とは異なるので注意を要する。これは central-high vowel 中央高母音 /i/ である。

二十九番目の digraph (二字一音文字) Æ æ は英語に於けると同様に front-low vowel 前方低母音を示す。次の六つの文字の真下に書かれたコンマは、その子音が口蓋化されたことを示す。音声記号としては子音 C の右肩に表記される $\text{/C'}/$ に対応する。最後の五母音に被せ書きされた “ $\bar{\quad}$ ” 記号は、その記号の下の母音が長母音であることを示す。読本54頁掲載の子音と母音を、今日の標準的な子音表に示す。自然音類を反映する美しい音韻表になることがわかるであろう。

ケート語子音文字

	唇		歯 茎		硬 口 蓋	軟 口 蓋		口 蓋 垂
閉 鎖 音	p	B	t	d		k	g	q
摩 擦 音	f	v	s	z		h	ʃ	
鼻 音		m		n			ŋ	
流 音				l				
				r				
滑 脱 音						j		
口 蓋 化 音					s'	l'		
						n'		
破 擦 音				z				

注意：この表で $l' n' s'$ は下書きコンマのついた $l n n s s$ に対応するものとし、 z はハイフン重ね書き $z z$ にそれぞれ対応するものとする。項目内の左は無声音、右は対応する有声音である。また読本で、カールゲルは声門閉鎖音を一貫して表記しない。読本54頁のアルファベット一覧にもそれに対応する文字はない、よって、上の表にはそれを表わさない。

ケート語母音文字

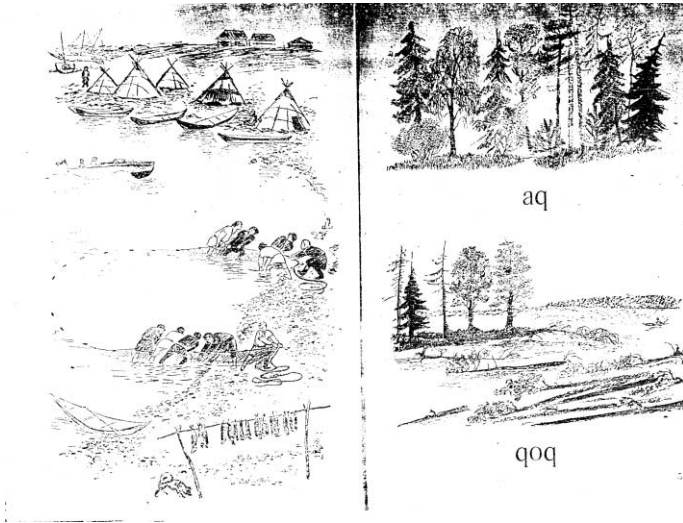
	前 方	中 央	口 奥
高	i ī	b	u ū
中高	ə ē	ə	o ō
低	æ	a ā	

右側の記号は長母音を示す

読本は53の章から成る。巻末にはロシア語の訳文が付されているが、それを参照し更に Aulis J. Joki 著 KETICA (I,II):Helsinki, 1955.¹⁰ を基本文献として使い、各章の文章を読んでゆくことにする。しかし、テーマは伝統的な文化人類学題材に限定した。ソヴィエト連邦共産党の政治宣伝の部分は後の考察に委ねることとし、ここでは割愛した。

先ず絵を示し、その下に語彙の解説を続ける。語彙は斜字体とし KETICA での当該語彙の形を示す。“S. 数字” は頁の数字を意味するものとする。原則として KETICA掲載の見出し例のみを挙げ、随時他の研究をも引用し、適時解説を加える。最後に、ケート語例文の下に逐語的に日本語とロシア語の訳を置いた。

p.4-5



aq (針葉樹、広葉樹ともに) 樹木。KETICA. S.16には *ak... Baum; Holz.* とある。ドゥリゾンの『ケート語』(1968)には、声門閉鎖音をもつ *ʔaʔk* ‘樹木’ とある¹¹。
qoq 流木 KETICA.には「流木」の意味では対応する語を発見できなかった。流木は集めて筏に組まれ、河を製材所まで運ばれる。

左頁の絵はケートの生活の基本が河漁労であることを示すものである。漁労は狩猟に次ぐ、ケートの重要な生業活動であった。挿絵には曳網漁をしている様子が描かれ

10 Donner K. *Ketica*. Materialien aus dem Ketischen oder Jenissei-Ostjakischen/Mémoires de la Société Finno-ougrienne. Vol. 108. Helsinki, 1955.

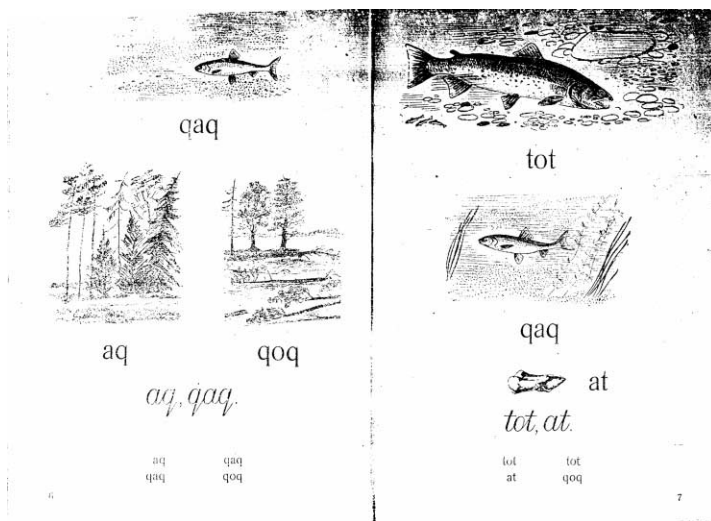
1148.

ているが、曳網はロシア人から取り入れた漁法であった。上左肩にはマストをもつ川舟が描かれているのが微かに見える。これはイリムカと呼ばれる家舟 house-boat である。舟上には寒さを防ぐために小屋が設えられている。

その下のテント群が雪解けの直後から春夏にかけて営まれる宿営地であり、漁場に設営される。ドイツ語ではユルテ Jurte と呼ばれる。この円錐形の幕舎は、まず柳の枝二本を地面に横並びに立て、次にそれらの枝の頂点を固縛して骨組みとする。この骨組みには、ケートの生活に欠かせない、軽量であり耐水性に優れた白樺樹皮が貼り付けられる。その大きさは接地面直径3~4m、高さ1.5mほどである。

その前にあるのは白樺製の平底舟である。タイガの自然水路をこれで航行する。障害物があるときは、川から引き上げ肩に担いで別の水路に入れる。更にその下には、川での曳網漁の様子が描かれている。下の絵は長期保存のため、魚が内蔵を抜かれ、天日に干されている様子である。魚は焼くか、油で揚げて食する。ケートのみならずシベリア諸民族での典型的生活の一場面である。

p.6-7

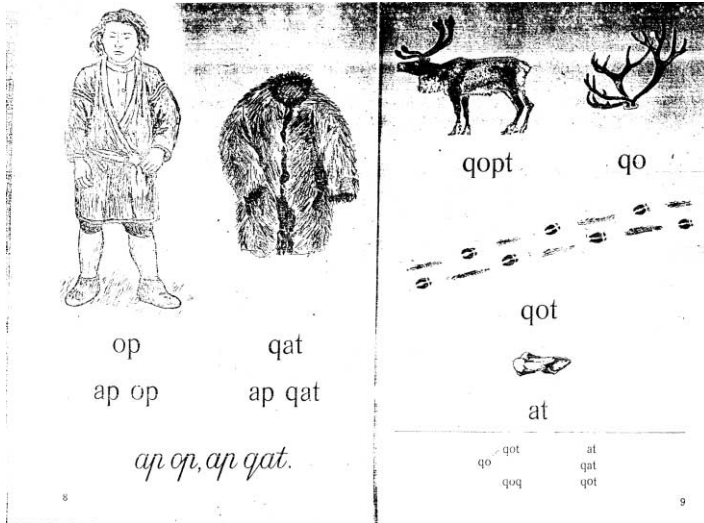


qaq デース(ウグイにちかい鯉科の淡水魚)KETICA. S.63には qak eine Fiscart 「ある魚の種類」とある。ロシア語では .aq 樹木(既出) qoq 流木(既出)。以下既出のものは省略する。

tot イトウ KETICA. S.93 tot Njelma-Fisch, eine Art Lachsforelle, 鮭科の魚、ネリマ(下村: コミ出身の友人はロシア語で '扁平頭の魚' と呼んでいた)。ドゥリゾンの同書には、声門閉鎖音をもつ toʔt ' とある。at

骨 KETICA. S.19には *at* とある。ここで何故骨の断片が描かれているのか。ot と at の母音部の音韻比較を目的としたとも考えられるが、骨の名称を示す目的にしては、挟じ切られた不自然な形態で提示した、編者の意図が不明である。絵の骨はトナカイの脛であり、その内部の骨髓は貴重な食料である。彼らの食生活の一面を紹介したものであるのかも知れない。

p.8-9



op 父 KETICA. S.77, *op*; *ob Vater*. *ap op* 私の父 KETICA. S.18
ap mein 私の。 *qat* (は北シベリアに住む北方諸民族の) 鹿皮製の上着。
 KETICA.S.57には *kaʔt* (?はドンネルの使う声門閉鎖音を示す補助記号) [kaʔt] Pelz 毛
 皮製のオーバー。また、ドゥリゾン同書では、やはり声門閉鎖音を含む *kaʔt* の形が挙
 げられている。 *ap qat* 私の毛皮製上着。ここで再び骨 *at* の断片が描か
 れている。その理由が思い当たらない。上記と同じ理由によるものであろうか。

絵にはケート族特有の衣服が描かれているが、日本の半纏に似たもので、右前裕である。極北の生活には向かない温暖な地域の衣服を思わせるが、この点や伝承内容のもつ特徴から推測して、彼らの原郷が南方であると考えられる民族学者は多い。その一方で、衣服の高度の断熱効率は少ない労働による体温の急上昇をもたらすものであり、むしろ労働効率を低くするとの考えもある。この考え方に抛れば、労働の詳細を考えず、絵の衣服の表面的な構造からのみ判断して、ケートの故郷を南方の暖地とすることは早計ということになる。ロシア科学アカデミー民族学研究所収蔵資料に抛れば、ケートのこの膝までである上着は、裁ち方までも和服に似て、構成部分が全て直線で裁

断されている¹²。これは古くなったものを解して、端切れ同士を縫い付ける際に、無駄に棄てられる部分が少なくなるという大きな利点をもつものである。

p.10-11



qon 熊 KETICA. S.67 *qoj* Bär 熊。ただし、頁68には、¹ *qon* Knorpel 軟骨、² *qon* Glasperle ガラス玉、³ *qon* die Birkhühner クロライチョウ、の三形が挙げられているが、その何れも直接熊を意味するものではない。ただし、軟骨がガラスのように透き通って見える食べ物であることを考えるならば、前二者は関係付けられよう。

ケートは日本のアイヌ民族と同様に熊霊儀礼 bear-cult ~ bear-wake を行う。しかし、アイヌ民族の儀礼イオマンテとは異なる点がある。アイヌでは仔熊を育てた場合は、それが成獣になった時点で殺し、霊を熊の霊の国がある東方の天へ送り返す：イ i それ‘熊’+ オマンテ *omante* 送る。ケートでは母熊の殺された仔熊を人里に連れ帰り、自分の「娘」や「息子」として育て、大きくなると狩猟に伴い、野生の熊の居所を知らせる案内とする。そして三歳になると、様々な装飾を施して山に帰す。この熊の飼い主は決してそれを狩ることをせず、仲間にもこの熊を狩らないようにと頼むのである。また、ケートが儀礼を行うのは狩猟で獲得した熊に対してのみであり、飼育した熊にはすることがない¹³。因みに、朝鮮語ではコム、日本語ではクマであり、音声的にはケートのコンに近いのである。 *tap* 犬 KETICA. S.88 *ta'p* [ta?p] die Hunde 犬たち。単数は *t'ip* ([']は口蓋化記号)。

12

.132.

« ».

1967.

13 大林太良『北方の民族と文化』頁175-176。1991 東京。山川出版社

犬は輸送手段としては使われなかったが、夏季に二、三頭で河岸沿いに家舟 *house-boat* を曳かせるために使役されることがある¹⁴。冬季北部のケートは狩猟行に犬橇を使うが、狩猟者自身は橇には乗らず、スキーを履いて牽き犬に手を貸すのである（読本27頁挿絵）。通常は狩猟者自らが橇を牽く。犬は飼い主が死ぬと殺され、飼い主の墓に伴葬されることがある。

幕舎が描かれているが、冬でも使われる。覆いは白樺の表皮を草糸で綴じ合わせたものである。内部には炉がきつてあり、冬は鉄製ストーブが置かれる。内部はつねに煙っており、そのためか眼疾が多い。

Ap op oon.

私の 父がは でかけた

oon (歩いて)行った KETICA. S.76 *ogət er geht* それは(歩いて)行く; *ogon er ging* それは(歩いて)行った。*oon* という母音の連続した形は過去形の異形 *ouvon* に由来するものであろう。*ətm* 蛙 KETICA. S.43 *əʔl [əʔl]* Frosch 蛙。*ətm* は複数形である。*tə* カワズズキ(淡水魚)(下村・伊藤：緻密な鱗の硬い皮をもつ美味な小魚である)。ドゥリゾンの前掲書には *əʔ* 発音は[チアツ]か という音声学徒にとっても意味不明の表記が与えられ、声門閉鎖音を含むものとして扱われている。KETICA. S.89 *təʔa [təʔa] təʔə [təʔə]* Barsch ペルカ(ズズキに似た淡水魚)、*qon* 熊(既出)、*qot* 足跡(既出)

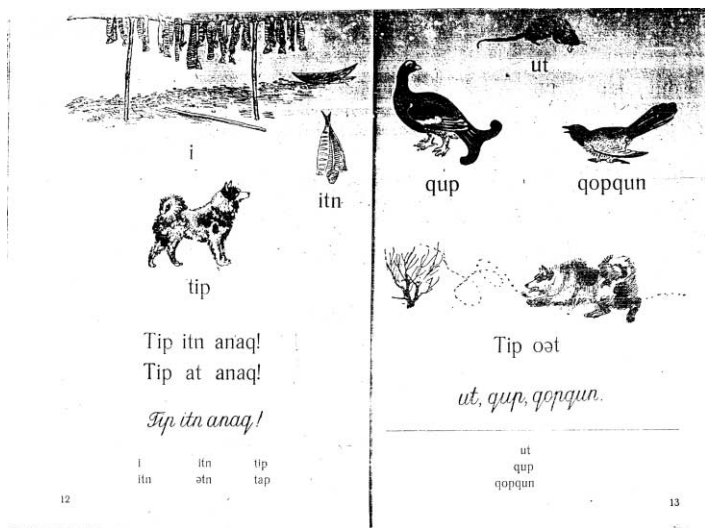
Anə oon? Qopt oon.

誰が 行ったのか? 雄(鹿)が 行った。

?

anə 誰が KETICA. S.18 *ane anə was?, wer?* 何が、誰が。

p.12-13



i . 干し魚製造用木の棧 KETICA. S.54 *ji?* [ji?] Gestell zum Trocknen von Fischen 魚を干すための台架。 *itn* 干し魚 KETICA. S.55 *jitn* getrockneter Fisch 干し魚。 *tip* (一匹の)犬 KETICA. S.95 *t'ip* Hund 犬 (既出) *anaq* KETICA. では発見できなかった。

Tip itn anaq! *Tip at anaq!*
 (その)犬に 干し魚を やれ! (その)犬に 骨を やれ!
 ! !

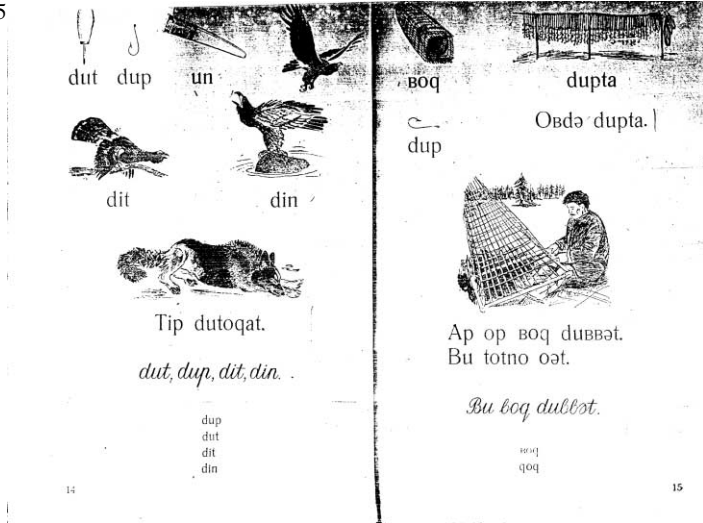
ut クマネズミ KETICA. S.97 *uoty* Ratte. *qup* クロライチョウ KETICA. S.70 *qup* Birkhuhn クロライチョウ (下村・伊藤：シベリアの大型雷鳥で、特有の尾羽は成熟の段階で様々に変化し、それに応じて固有の名称がある) *qopqun*

カッコウ KETICA. では発見できなかった。ケートにはその胞族が特定の動物と関係を維持する信仰、つまりトーテムズムが見出される。例えば、郭公や鷲はあるケートの氏族と抽象的に結合した特別のトーテム動物となっているのだが、その胞族構成員は自分の同胞族のトーテム動物である郭公や鷲を殺してはならない¹⁵。

Tip oot.
 犬が 行く

15 前掲 Popov & Dolgikh 論文。 頁616。

p.14-15



dup 錐 KETICA.には発見できなかった。唐突に錐が登場する理由が不明であるが、幕舎の樹皮覆いを綴じ合わせる針糸を通す孔をあける用具である。*dup* 釣竿 (下村・伊藤：これは誤りであろう。正しくは 釣針) KETICA. S.39 *du'p* [du?p] eiserner Angelhaken 鉄製釣針。 *un* 鞞 KETICA.には発見できなかった。 *dit* KETICA. S.41, *dit* Auerhahn キバシオオライチヨウ。 *qup* KETICA. S.70, *qup*, *kup*, *up* Birkhuhn 複数 *k uon* クロライチヨウ。 *din* 鷲 KETICA. S.40 *d'i'* [d'i?] Adler 鷲。ドウリゾンは前掲書で ? ' ' としている。ケートでは鷲もまたトーテムであり、特定の氏族と結合した特別の鳥であって、これを殺してはならぬとする禁忌が存在する¹⁶。

Tip *dutoqat*.
犬が ねている

()

dutoqat KETICA. S.39 *dutogæt* er schäft それはねている。 *oq* [boq] 魚築 KETICA. S.24 *bok* aus Ruten geflochtene Reuse für Aalen 鰻採りのための柴で編んだ魚築。 *dup* 敷網 (下村・伊藤：この絵は敷網ではなく実は延縄を描いている) KETICA. S.39 *dup* Angelleine, Grundschnur (am Jenissei von den Ketten und Russen verwendet) 「ケートやロシア人がエニセイ河で使う、魚を釣るために地面に敷いて使う紐」とある。*dup* は *dup* ‘釣針’+ *taat* ‘沈網’に由来するように思われる。

16 同論文同頁。

漁労は狩猟に次ぐ重要な生業である。特に北部のケートは狩猟に比べて漁労への依存度が高い。南部では長い縄に三十から四十もの釣針の下がった延縄（読本14頁挿絵）を使うが、他方北部では縦長の網（読本15、33頁挿絵）を使う。これらの漁具は基本的に個人の所有物であったが、個人のほかに所有者の所属する集団によっても使用された。

漁法は季節によって異なる。春季と夏季には、小川の流を塞ぎ止め、自然地形を利用し、葦簾を埋けた誘導水路を作る。魚はそれによって築や網に誘い込まれる。秋季には白樺の樹皮（読本31頁挿絵）を燃やす松明を水面に掲げ、二三人して舟上より鉾で刺し突く。結氷する冬季には氷に孔をあけ、そこから網を入れたり（読本15頁挿絵）釣り竿を使い漁を行う（読本14頁挿絵）。捕獲した魚は串焼きにするか、干し棚で乾燥させて干し魚とし、冬用の保存食とする。その他に、草の葉の間に魚を挟み、それを地面に埋けて醗酵を促し、骨までもが柔らかくなったあとで食する醗酵食品もつくる。

O də *duptə.*

父の 延縄

. (父の 敷網)

ob [S. *op.*] KETICA. S.75 Vater 父

Ap *op* *oq* *du* *ət.*

私の 父は 魚築を つくっている

ap [S. *ab*] KETICA. S.18 mein 私の KETICA. S.38 *dubbet, du* *ət* er macht,
verfertigt 製造する。

Bu *totno* *oət.*

彼は イトウ漁に ゆこうとしている

() . (彼は イトウを 獲りに ゆく)

u KETICA. S.26 *bu* er, sie (彼女) は。 *totno* イトウ漁に。

p.16-17



it [bit] カイツブリ KETICA. S.23 *bjit* Polarraucher, , *Colymbus arcticus*. カイツブリはシャーマン鳥と看做され、その皮から製作した袋物は男性の所有物であった¹⁷⁾. *ən* [bən] 鴨 KETICA. S.22 *bən* Ente 鴨. *oŋtu* [boŋtu] 鱈 KETICA. S.25 *boŋtū* eine Art Lachs, . eine Art Lachs 鮭科とあるが絵は明らかに鮭科の魚ではない。ザリョートカについては不明。似た言葉にセリョートカ‘塩漬鱈’があるが、Lachs‘鮭’という説明と一致しない。

Bən *uta* *oŋət.*
鴨が 上を 飛んでゆく

KETICA. S.98には *ūtə* は nach Süden ‘南へ’という意味しか挙げられていないので、「鴨が 南へ 飛んでゆく」の可能性もある。

ətn *ənnə* *oŋət.*
私たちは 鴨(獵)に ゆく
()

oŋət および *oŋət* はKETICA.では発見できなかった。

教科書欄外の

Bu *oət* *Buŋ* *oŋət*
彼は ゆく 彼らは ゆく

の二文は、主格名詞が複数になると、主語と述語動詞語幹中に *ŋ* が登場するという規則を分かりやすく示している。 *eqquŋ* 集落 KETICA. では発見できず。但し、*quŋ* は‘幕舎’を意味する：KETICA. S.70 *quŋ die Jurten, die Zelte* ‘幕舎、テント’（単数形は *kuos* ）。ケート語で‘集落’とは‘幕舎の集まり’を意味したのかも知れない。ケートの白樺皮製天幕は接地面直径が3～4mあるが、その樹皮覆いは *tiski* といい、縦横1m×3mもある。木材で補強されていることもあるが、軽量であり脂に富む樹皮であるゆえに耐水性に富んでいる。入り口には白樺樹皮製のカーテンが下がり、それには様々な装飾が施されている。内部にはその真ん中に囲炉裏がきられており、その上には三本の枝が交叉して立てられ、頂点から吊り鉤が掛けられ、それに大鍋や湯沸しが吊るされる。夏季には漁場の近くに天幕が設営されることがある。その場合、骨組みの組み方が異なり、更には炊事の火は外で燂される。北部のケートの幕舎は鹿皮で覆われ、内部には鉄製ストーブが設置されている。

de 湖 KETICA. S.30 *dē der See* 海、湖沼
Dediŋə ən onəŋ.
 湖には 鴨が 多い

dediŋə および *digiŋə* の形はKETICA. では見つけれなかった。 *onəŋ* はKETICA. S.77 に *ōn viel* ‘多くの’とある。

Bəndə əŋ.
 鴨の 卵

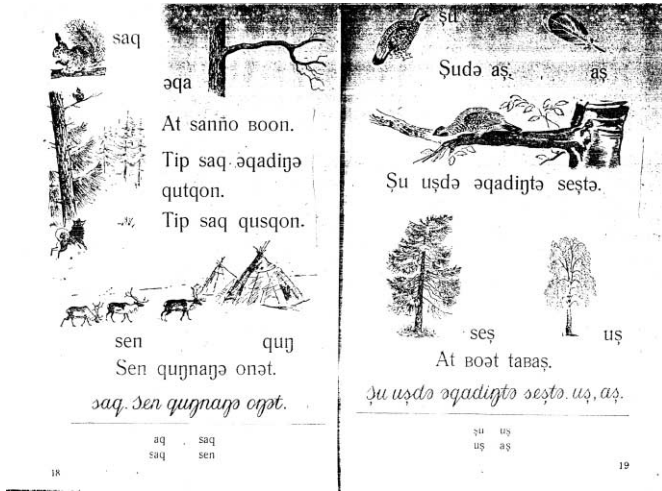
KETICA. S.41 *eʷj [eʷj], jeʷj [jeʷi]* Ei, Vogelei ‘鳥の卵’；S.42 *ēŋ die Eier* ‘複数の卵’。

ətna deŋ ənno oŋət.
 私たちの 人々は 鴨（獵）に ゆく
 ()

deŋ KETICA. S.40 *d'eŋ*, S.36 *djeŋ die Menschen* ‘人々’。なお単数はケートという名前の起こりの *ket* (KETICA. S.36, S.57)である。

Buŋ dediŋə oŋət.
 彼らは 湖へ ゆく
dediŋə の形はKETICA. に発見できなかった。

p.18-19



saq リス KETICA. S.79 *saʔk* [saʔk] Eichhorn リス。但し、ドゥリゾンは前掲書で声門閉鎖音を含むとして *saʔk* と表記している。

リスはケートに於いては、重要な位置をもつ。毛皮のみならずその肉を食用にする。毛皮を傷めないように、打撃のみを与えるべく成型された、太く鈍い木製あるいは角製の鏃を使う。この鏃には側面に複数の孔が彫られ、弓から放たれたとき、独特の音を発する。犬がリスを樹上に追い上げたとき、その矢は放たれる。

捕獲される動物の80%から90%をリスが占める。リスは北にゆくにつれてその重要度を減らす。因みに、東北日本のマタギはリスの肉ではなく、尾の毛を炙り焼きしたものを美味とするが、沿海州のトゥングース系民族も同様である。*əqa* ‘大枝’の意味では KETICA. には見あたらないが、ドゥリゾンには声門閉鎖音を含む *ʔaʔk* ‘木’という語がある。

At *sanno* *oon.*
私は リス(猟に) 出かけた
()

Tip *saq* *əqadiņə* *qutqon.*
犬が リスを 大枝上に いすくめた

qutqon (?) KETICA. S.62 *kuos nehmen, festnehmen* 拘束する、留置する。

Tip *saq* *qusqon.*
犬は リスを 怖がらせた

qusqon (?) KETICA. S.69 *qostət* sich fürchten 怖がる。 *sen* トナカイ (複数
の) KETICA. S.80 *seʔn* [seʔn] die Reintiere トナカイ (複数形) 単数形は *sjel*。トナ
カイは荷運びのための動物である。

トナカイは大切な動物であり、革命前はケートの約40%の世帯がこれを飼育して
いた。トナカイは冬の輸送手段である。しかし人がそれに騎乗することはなく、橇を
牽引するのに使用した。トナカイ飼育の起源はサヤン・アルタイ山地にあると言われ、
馬に騎乗する風習が野生鹿に応用されて始まった。当然、騎乗の方が古い時代の痕跡
であり、その非効率性のゆえに橇牽きに転換されて、シベリア北方に伝播したらし
い。

この動物は、春になって輸送手段としての用途がなくなると、森林内に自由に放た
れた。そして人間の監視を受けない場所では産期を迎え、子供を産んだ。その肉や内
蔵から眼球、骨、皮、角、蹄、腱に至るまで、食用や様々な用途に利用された。

quŋ 幕舎 (既出)
Sen quŋnaŋə onət.
鹿は 幕舎のほうに ゆく

su えぞらいちょう KETICA.には見当たらず。 *as* 羽茎 KETICA.
S.18 *as* Feder, Daune 羽毛。

Su usda əqadiŋtə sestə.
えぞらいちょうは 白樺の 枝に 座っている

usda us KETICA. S. 97 Birke 白樺。 *sestə* KETICA. S.83 *sjest(e)* sitzen うずく
まっている。 *ses* 針葉樹。 *us* 白樺。

At ot ta as.
私は 行く 犬たちとともに

ta as KETICA. S.95, *tip* の複数 *taʔp* [taʔp]か。

p.20-21



loqtaq ‘革手袋’とあるが、絵は‘かんじき’を指している。この雪上歩行用具はその裏が滑り止めの毛皮で覆われており、それ故に‘革手袋’と同義なのであろう。かんじきは冬季の狩猟に履かれるが、柔らかい雪質に応じての幅の広いものと、硬く締まった雪質用の幅の狭いものがある。その接地面には逆滑りを防ぐためのライナーが張られている。KETICA. S.73, *logtak* hölzerner Ski 木のスキー。

At loqtaqas asseno oon.
 私は かんじきをはいて 猟に 出かけた
 ()

獣(猟)に

asseno KETICA. S.19, *asseno* auf die Jagd 猟に。

Tip saq usdiŋə qutqon.
 犬は リスを 白樺の木の上に いすくめた

追い詰めた

Saq usdiŋə dasesta.
 リスは 白樺の木に 座っている

dasesta KETICA. S.38, *dug(j)en* ‘座る’か。

Bu tipdaŋə da uŋsoqot.
 彼女は 犬を 見ている

u 彼女は KETICA. S.26 *er, sie* 彼は、彼女は。 *da uŋsoqot* KETICA. には見当たらず。 *sel* 鹿 KETICA. S.81, *sel* Renntier トナカイ

Oin *oət* *senas.*

オイン(男の名)は 行く 鹿で

oət KETICA. S.76, *ogət ~ ouu t er geht* 彼は行く。 *senas* KETICA. S.81, *seʔn* [seʔn] die Renntiere 鹿たち。トナカイ橇に乗った人物のもつ長い竿は、トナカイの尻を突くもので、これによって走る方向の制御を行うのである。この方法はトナカイ橇をもつシベリア諸民族全てに共通である。

Stepan *oət* *loqtaqas.*

ステパン(人名)は 行く かんじきで

loqtaqas KETICA. S.73, *logtak* hölzerner Ski 木のスキー。今日とは異なり、スキーのストックは一本である。

Sildan *uət* *ta as.*

シリダン(女の名)は 旅に出る 犬で

uət *u ət* KETICA. S.24, *bogut* gehen, wandern, fahren, reisen, 行く、旅をする、乗ってゆく、旅に出る、去る。

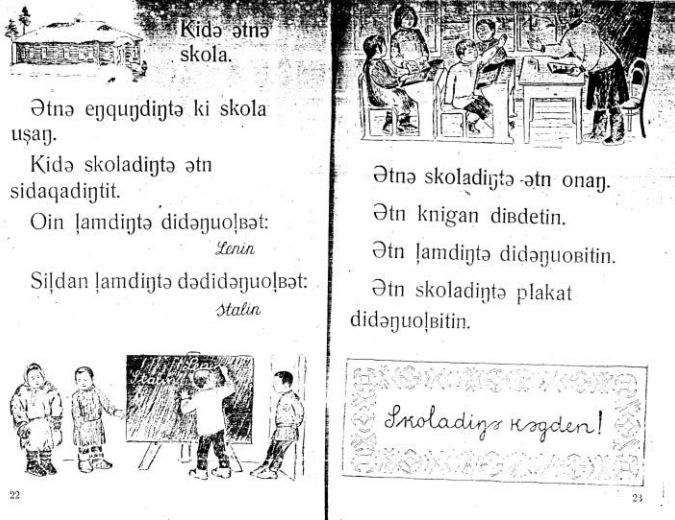
ilas *uŋ* *oŋət.*

どこへ 彼らは 行く

?

ilas KETICA. S.22, *bilas* wohin? どこへ。 *ung* KETICA. S.26, *bu* er, sie 彼は、彼女は ; *buŋ* 彼らは、彼女らは。

p.22-23



kidə KETICA. S.58, *kide* dieser この。 *ətnə* KETICA. S.43, *ət* wir 我々は。 *skola* ‘学校’ という重要な単語はドンネルには存在しない。ドンネルがケート調査に出掛けたのはロシア革命の前1912年のことであった。当時のケートの人々に学校なるものは存在していなかったのである。 *ki* KETICA. S.71, *ke* neu 新しい。 *usaŋ* KETICA. S.98, *usa* ist, wird 在る、～に成る。 *sidaqadiŋtit* KETICA. S.80, *sebbede* lernen werden ‘習得する’か。 *dədidəŋuol ət* KETICA. S. 31, KETICA. *ə* nun ‘さらに’+ *didəŋuol ət* か。 *lamdiŋtə* KETICA. S.72, *lem, lim* Brett 板。 *onaŋ* KETICA. S.77, *on, ony* viel, viele たくさん。 *knigan* ロシア語の *kniga* ‘本’の複数。ドンネル辞書には *kn-* 開始の語彙はない。 *didəŋuol ət* KETICA. S.32, *dideŋ-uksebet* schreiben 書く。 *kəgden* KETICA. S.57, *kəʔj* [kəʔj] gehen 行く。

Kidə *ətnə* *skola.*
この 私たちの 学校

ətnə *enqundiŋtə* *ki* *skola* *usaŋ.*
私たちの 村に 新しい 学校が ある

Kidə *skoladiŋtə* *ətn* *sidaqadiŋtit.*
この 学校で 私たちは 学ぶ

Oin lamdiŋtə didəŋuol ət : Lenin
 オインは 黒板に 書いた：レーニン

Sildan lamdiŋtə dədidəŋuol ət : Stalin
 オインは 黒板に さらに書いた：スターリン

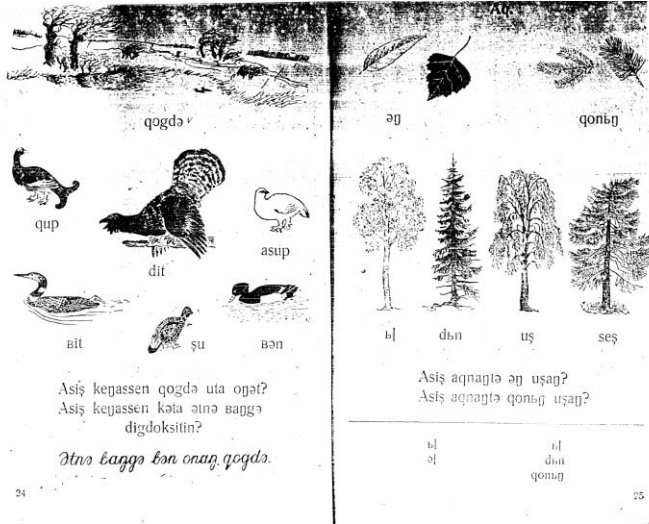
ətnə skoladiŋtə ətn onəŋ.
 わたしたちの 学校に わたしたちは たくさん

ətn knigan di detin.
 わたしたちは 本を 読む

ətn lamdiŋtə didəŋuol itin.
 わたしたちは 黒板に 書く

ətn skoladiŋtə plakat didəŋuol itin.
 わたしたちは 学校で プラカードを 書いた

Skoladiŋtə kəgden!
 学校へ 行きなさい



qogdā KETICA. S.67, *qogdā* Herbst 秋. *asup* KETICA. S. *asəp* Rebhuhn
 複数は *asun* (日本名) シャコ。ここに描かれた鳥は肉と羽毛、様々な
 袋物を作るための皮を提供する。*asis* KETICA. S.19, *assa was?* どんな。*uta* はこの
 教科書には ‘上空’とあるが、ドンネルには *utə* KETICA.S.98, nach Südenとあ
 る。*kəta* KETICA. S.58, *kət* Winter 冬。 *aŋgə* KETICA. S.20, *baŋ* Erde土地。
digdoksitin KETICA. *digədak* wohnen 泊まる、留まる。

<i>Asis</i>	<i>keŋassen</i>	<i>qogdā</i>	<i>uta</i>	<i>oŋət?</i>	
どんな	鳥が	秋に	南に向かって	飛び去るのか	
				?	
<i>Asis</i>	<i>keŋassen</i>	<i>kəta</i>	<i>əmə</i>	<i>aŋgə</i>	<i>digdoksitin?</i>
どんな	鳥が	冬に	わたしたちの	地に	留まるのか
					?
<i>əmə</i>	<i>aŋgə</i>	<i>ən</i>	<i>onaŋ.</i>		
わたしたちの	土地には	鴨が	たくさん		

qogdā o 秋

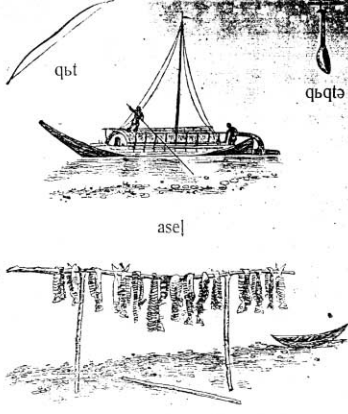
aq KETICA. S.16, *ak* Baum; Holz. 樹木、森。 *əŋ* 広葉樹の葉。 KETICA.で
 は特定できなかった。 *qon ɨŋ* 針葉樹の葉。 KETICA.では特定できなかった。

l (母音記号 はロシア語の母音ウイ に似た音を示す) [il] (ポプラの一

種) やまならし, ハコヤナギ, ユダの木。 KETICA. S.53, *yl* (ドンネルは *y* を [i] の音色の母音に充てている) Espe ハコヤナギ。 *d n* [din] トウヒ, ハリモミ, エゾマツ。 KETICA. S.35, *dyn* Fichte ドイツトウヒ。 ドゥリゾン前掲書では声門閉鎖音をもつ ? ' ' とされている。 *us* 白樺。 KETICA. S.97, *us* Birke 白樺。 *ses* カラマツ。 KETICA. S. 81, *ses* Lärche カラマツ。 *əl* KETICA. S.43, *əl* [əʔl] Frosch 蛙。 KETICA. S.53, *ynčə* [inʧə] Frosch 蛙。 ここで蛙を掲載するカールゲルの意図は何であったのだろうか。 ケートが蛙を食べするのか、筆者等には不明である。

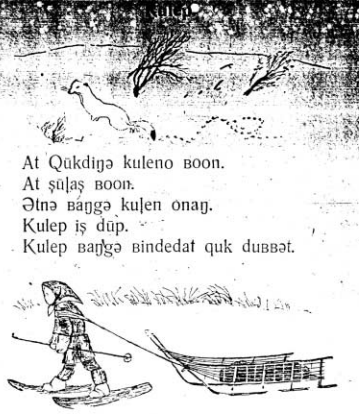
<i>Asis</i>	<i>aqnaŋtə</i>	<i>əŋ</i>	<i>usaŋ?</i>
どんな	木々に	広葉は	あるか(広葉をもつのは どんな木々か)
			?
<i>Asis</i>	<i>aqnaŋtə</i>	<i>qon ŋ</i>	<i>usaŋ?</i>
どんな	木々に	針葉は	あるか(針葉をもつのは どんな木々か)
			?

p.26-27



Okšdiŋeļ dubven qyt, qəqta, ki, i, asel.
Akš okšdiŋeļ nik dubven?

bēdiŋeļ doļto deļ dubbetin.



At Qūkdigə kuleno boon.
At šūlaš boon.
Əlnə bəggə kuļen onəŋ.
Kulep iš dūp.
Kulep bəŋgə binnedat quk dubbət.

*At Qūkdigə kuleno boon.
Kulep iš dūp.*

Qūk — quk ✓
dūp dūp
šūl — šul ✓

q t [qit] 弓 KETICA. S.66, *qyt* Bogen。 但し、ドゥリゾン前掲書は声門閉鎖音をもつ ? ' ' としている。 ケートの弓矢 腐敗した魚の油から製した毒が塗られた はセリクープのそれとともに “オスチャク弓” の名で北エニセイでは有

名であり、唯一ヤクート弓がそれに匹敵したという¹⁸。しかし筆者等には弓よりも矢の方が興味をひくものである。ケートを初めハント、セリクープ等のサモエードは時には鳴鏑を使うからである。これはマンモスの牙から削り出した骨鏑であり、鏑の側面には共鳴孔として働く抉りが複数付いている。矢は弓から放たれると飛翔方向に独特の音を曳きながら飛んでゆく。この鳴り物の仕掛けは獲物を驚かすためと説明されている。狩猟では矢が尽きた時が終わりであり、獲物に当たらなかった矢は苦勞して回収される。筆者等（下村・伊藤）は、これは獲物に矢が当たらなかった場合、貴重な矢が落ちた場所を突き止め易くするためのもの、と考える。また、ケートの矢筒は蓋付きの木製の平らな箱であるが、アイヌの矢筒イカヨップとよく似ている¹⁹。

弓矢は夏季の野鳥の捕獲や、冬季のリス猟に使われた。またリスとヤマシギ猟には犬を使っている。クロテン猟は網によって行われる。毛皮を傷つけないためである。散弾銃の登場により弓矢は狩猟に使われることが殆どなくなった。また男児が誕生したとき、狩猟者としての成功を保証する目的で、その傍らには弓矢が生後間もなく置かれた²⁰。

q qtə [qıqtə] さじ KETICA. S. 66, *qyqty* [qıqti] Löffel. *asel* KETICA. S.18, *asəl* grosses gedecktes Boot 大きい覆いのある舟 楡の舟。絵からも分かるように長さが十数米あり、小屋が設えられている。この家舟はケートの他に、ロシア人も製作する。 *i* KETICA. S.54, *ji*⁷ Gestell zum Trocknen von Fischen. 魚を干すための棧、 *jim*を参照せよ。 棧。 *oksdınel* 木から *oks* KETICA. S.76, *oks* Baum 木 木。
du en つくる *dıbbet* KETICA. S.38, machen, tun, verfertigen 製作する。 *ki* KETICA. S.71, Falle, Dohne zum Fangen von Auerhähnen und Birkhühnern 落とし穴、雷鳥を獲る鳥罾 (方言・狩猟) 捕獲用の罾。 *aks* KETICA. S.17, was? (疑問詞) 何
ik , 他に、他の。 KETICA.に発見できず。

Okسدınel *du en* *q t* *q qtə* *ki* *i* *asel*
 木から つくる 弓と、 さじと、 罾と、 棧と、 舟とを

Aks *oksdınel* *ik* *du en?*
 なにを 木から さらにほかに つくるか

() ?

18 前掲 Popov & Dolgikh 論文。頁609。

19 前掲書。頁56。

20 Thornburg L. P. *The Ker: a contribution to the ethnography of a central Siberian tribe*. Michigan University Microfilms International. Ann Arbor 1967.

p.28-29



atat 顔 *batət* KETICA. S.21, Gesicht. *dulek* 洗う *dulək* KETICA. S.38, waschen. *aqtə* 上手に *aqtə* KETICA. S.17, gut. *selə* 下手に *sel* KETICA. S.80, schlecht. 上の右側の絵では、口に含んだ水を吐き出しながら、少年はそれで手を洗っているのである。 *oŋdu* 健康である。KETICA.には発見できず。少年の手にしている弓は鼯などの小型毛皮獣を捕獲するための仕掛け弓である。 *dest η* [destiŋ] 目 *des* KETICA. S.31, Auge. *adat* 痛む、病む *adat* KETICA. S.15, (es) schmerzt, (es) ist krank. ケートばかりではなく、天幕生活では内部の炉で生木を燃やすことが多く、その内部は始終煙っており、かれらに眼病が多いのはこの居住環境のせいだと言われている。

Oin atat dulek.
オインは 顔を 洗っている

Oin atat aqtə dulek.
オインは 顔を 上手に 洗っている

Koła atat dulek.
コーリヤは 顔を 洗っている

Kola atat selə dulek.
 コーリヤは 顔を 下手に 洗っている

Oin oŋdu.
 オインは 健康である

Koladə dest ŋ adat.
 コーリヤの 目は 病んでいる

Batat aqtə ulelek!
 顔を 上手に 洗いなさい

!

ətn 私たちは *əDn* KETICA. S.15, wir. *ad* 私は KETICA. S.15, ich. *didəŋuol itin*
 書いた *dideŋ*- KETICA. S.32, schreiben. *laŋən* (?) *laʷm* [laʷm] KETICA.
 S.72, Tisch 食卓. *ileŋ* 両手を *yl* KETICA. S.53, Arm. *kupkə* ~の前に
 KETICA. S.62, vor. *tudə* この KETICA. S.93, jener . *lam* 机 *laʷm*
 [laʷm] KETICA. S.72, Tisch. *ditlgə* 近くに (?) *dyl* KETICA. S.35, neben.
daŋqupten 掛けた *daŋquptə* KETICA. S.29, hängen.

ətn skoladiŋə plakat didəŋuol iti.
 私たちは 学校で ポスターを 書きました

Ulelek laŋən ileŋ kupkə!
 洗いなさい 食事 手を の前に

!

Tudə plakat skoladiŋə lam ditlgə daŋqupten.
 この ポスターを 学校で 机の 近くに 掛けておいた

p.30-31



Qoj.

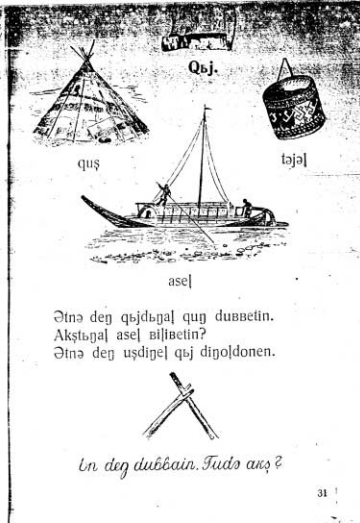
Şujka oon. Bu qojeqo töluj. Şujka uskə
dejsutolat. Sik deŋ oŋonən. Buŋ qasaŋ qoj
daqojaqın. Bılda deŋ qojda kit bilen. Şuj-
kadaŋa qojda iŋolt qıtpitin.



qaj.

Şujka qojeqo töluj.
Sik deŋ qoj daqojaqın.

30



Qoj.

quş

təjəl

asej

Ətnə deŋ qıjdəŋəl quş dıbbetin.
Akştəŋəl asej bılıbetin?
Ətnə deŋ usdıŋəl qıj dıŋoldonen.



En deŋ dıbbəin. Fıdıs anı?

31

qoj

熊 KETICA. S.67, Bär. *qoieqo* koioyə KETICA. S.67, *qoi. ego ogə*巢穴 *ōgə* KETICA. S.75, Höhle; Nest. 同項 *koiō* Bärenloch 熊穴. *u* KETICA.S.26, *bu er, sie* 彼は、彼女は; Plur. *buŋ. töluj* KETICA. S.93, *ich sah* 私は見つけた; KETICA. S.30, *datuŋ ich sehe* 私は見つける。 *uskə uosk* KETICA. S.97,*uosk* nach Hause 家に。 *dei utolət deŋbugāwi* (?) KETICA. S.30, *hinken* 足をひきずる。 *sik* KETICA. S.81, vier 四。 *deŋ* 人々。 *oŋonən ogon*KETICA. S.76, *ogon?* er ging 彼は行く。 *qasaŋ* そこへ KETICA.には発見できず。*daqojaq n* [daqojaqin] 殺した KETICA.には発見できず。 *lda* [bilda] 全ての KETICA.には発見できず。 *kit* KETICA. S.72, *kit* Fleisch 肉。 *ilen* 食ったKETICA.には発見できず。 *iŋolt* KETICA. S.51, *Fell* 毛皮。 *qıtpitin*KETICA. S.65, *qasəbət geben* 与える。 同頁 *qətpət er gab. qaj* KETICA. S.63,Elentier 大鹿。 同頁 *qaje* Elentier, Elch ヘラジカ。 ケートの熊、ヘラジカ、鹿等の大型獣狩りは、ウシ 'us' と呼ばれる槍を使って行われた²¹。

Şujka oon.

シュイカが 歩いていた

Bu *qojeqo* *töluŋ.*
 彼は 熊穴を 見つけた

Sujka *uskə* *dei utolət.*
 シュイカは 家に 走った

Sik *deŋ* *oŋonən.*
 四 人が 出掛けた

uŋ *qasaŋ* *qoj* *daqojaq n.*
 彼らは そこで 熊を 仕留めた

lda *deŋ* *qojdə* *kin* *ilen.*
 全ての 人々は 熊の 肉を 食べた

Sujkadanə *qoidə* *iŋolt* *q tpitin.*
 シュイカに 熊の 皮を 与えた

Sujka *qojeqo* *töluŋ.*
 シュイカは 熊穴を 見つけた

Sik *deŋ* *qoj* *daqojaq n.*
 四 人々が 熊を 仕留めた

q j [qij] 白樺の表皮 KETICA. S.65, *qəʔj* [qəʔj] Birkenrinde. *qus* 幕舎
 KETICA. S.61, Jurte, Zelt. *təʃəl* 容器 KETICA. *tojes* Gefäss aus Birkenrinde
 白樺皮の桶. *asel* 楡の舟 KETICA. S.18, *asəl* grosses gedecktes Boot 天蓋の
 ついた大きな舟; S.19, *aslin* (grosseres) Boot. *dubbət* 製作する KETICA.S.38,
dubbət er macht, verfertigt. *ətnə* 何から、何で *aks* KETICA. S.16, was? (疑問詞)
 何. *ili etin* KETICA. S.22, *bilebət* machen, tun, verfertigen こしらえる、する、製作する。
usdiŋel 白樺から *us* KETICA, S.97, Birke. *n* [in] KETICA. S.53,
yn, in, ine, üne zwei. *du ain*(のロシア語訳から)引つ張り合う(?)KETICA.に
 は発見できず。 *tudə* あの、その、彼方の KETICA. S. 93, *tud* (ə) jener.

ətnə deŋ q jd ŋal quŋ du etin.
 私たちの 人々は 白樺皮から 天幕を つくる

Akst ŋal asel ili etin?
 なにから 舟を つくったか
 ?

ətnə deŋ usdiŋel q j diŋoldonen.
 わたしたちの 人々は 白樺から 表皮を 剥ぎ採る

n deŋ du ain.
 二 人々が 引っ張り合う(?)

Tudə aks?
 これは なに
 ?

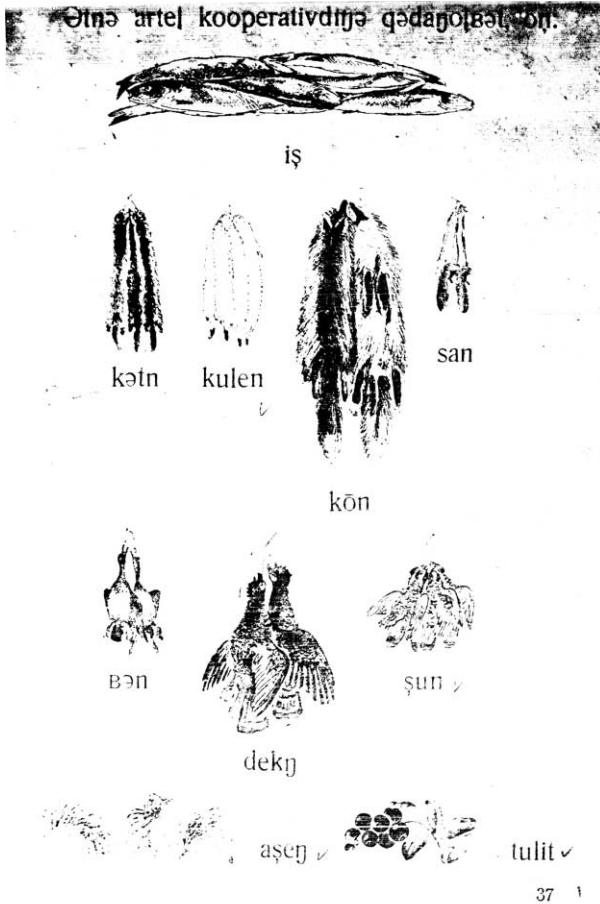
« n deŋ du ain » の文を、頁31の家舟の絵にある、棹をあやつり、舵を操作する二人の動作を表現したものと考え、「二人が引っ張り合う」と訳した。しかし、この訳は舟上の二人のこれらの動作とは整合しない。一人は棹を押し、もう一人は舵をとっているのであって、両者は引き合っていないからである。筆者（伊藤）は、「n deŋ du ain」「二人が引っ張り合う」の文を独立のもののみなし、問題の交叉する二本の棒の絵は、「Tudə aks?」「これはなに」の文と関連すると考える。この絵は天幕の支柱の一部を描いたものなのである。ケートの白樺樹皮天幕は、このような二本組の支柱の交叉部にもう一本柱を組み合わせ、合計三本で支柱とするからである。この三本の支柱の上部三分の一のところに環状の枝を廻し、そこに更に二本の柱を加えて、幕舎の骨格とするのである。しかし、その場合でも、経験的に合理的な三本の支柱ではなく、不安定な二本で示した意図が不明であり、更に、「二人が引っ張り合う」の文が読者に与える一種の唐突さは、どうにも説明のしようがないままである。

別の筆者（下村）は「n deŋ du ain」の文を、読本の編集時に存在していた別の挿絵に対するものであって、その絵では、陸上の人が舟上の人と棹を引き合っていたのではないかと考える。一方、もたれあう二本の木の棒の絵は、家舟の絵の上の二人の人物とは関係をもたず、この頁の最後の文「Tudə aks?」「これはなに」と関係するものであり、漁労者が水路に仕掛けた網の方向と種類を備忘的に記録するため、地上に置いた装置であると考えられる。

p. 32



左は、鈍刃の刃物を使い、鹿皮の裏側の肉片と脂肪をこそぎ落とす場面である。スカーフの人物は男性である。右は女性が白樺の樹皮を草糸と針で縫い合せている場面である。ケートの生活に白樺は欠かすことができない。白樺はカバノキ科の落葉高木であり、その樹皮は蠟質の白粉を帯びており、紙状に剥ぎとることが容易である。ケートはこの樹皮を様々な用途に用いる。例えば、秋冬の夜間の鮭漁では燃やして松明とする。その他、食料保存の梱包材、家屋や舟の材料、籠や容器の材料に利用される。



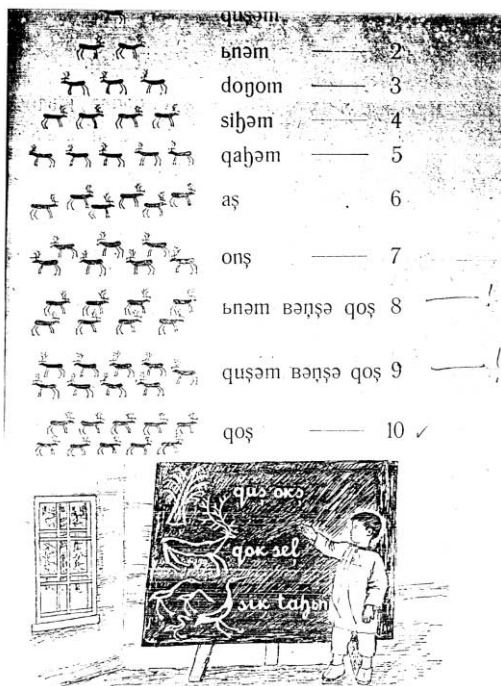
artel (社会主義建設のための)生産協同組合は (社会主義建設のための)流通共同組合とともに、初期ソヴィエト連邦の経済計画担当者が、その整備に最も力を注いだ組織であった。ケートはこの組織を通してのみ漁獲物と肉角毛皮を売ることが強制された。 *qədağot ət* KETICA. S.65, *qəsbət* geben 与える *qətpət er* gəbt. *on* KETICA. S.77, viel, veile 多くの、多くのもの。 *jis* KETICA. S.55, Fisch 魚。 *kətn* KETICA.S.58, *kət* Marder テン。微かに見えるが、読本には書き込みがあり、それによれば *ə* が *t* と *n* に介入するとしている: *kətn*. *kulen* KETICA.には発見できず。 *kon* KETICA.には発見できず。 *san* KETICA. S.80, die Eichhörner リス; *saʔs* [saʔs]. *dekj* KETICA.には発見できず。 *sun* KETICA.には発見できず。 *aşeŋ* KETICA. S.18, *as* Feder, Daune 羽根,羽毛。 *tulit* KETICA. S.94, *tulyt tulit* Beere 漿果。

ətna artel kooperativdinə qədəŋol ət, on:
 私たちの 生産協同組合は 流通協同組合に 出荷した、(その)多くのものは :

is, kətn, kulen, kon, san, ən, dekŋ, sun, aseŋ,
 tulit.

魚、シベリア融、おこじよ、狐、栗鼠、鴨、黄嘴大雷鳥、エゾライチョウ、羽毛、漿果である。

p.40



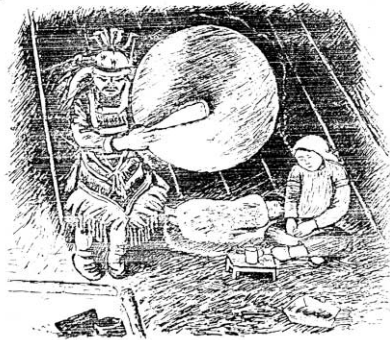
qusəm KETICA. S.70, eins 一。 nəm [inəm] KETICA. S.53, yn zwei 二。 doŋom KETICA. S.37, doŋom drei 三。 sihəm KETICA. S.81, sigəm siyəm sik vier 四。 qahəm KETICA. S.63, qagəm fünf 五。 as KETICA. S.18, sechs 六。 ons KETICA. S.77, onç ontš sieben 七。 nəm [inəm] ənsə qos 八。 qusəm ənsə qos 九。 qos 十。 ənsə KETICA. S.22, bəncəŋ bəntšəŋ: 1. negatives Verb 否定動詞; 2. weniger 引くことの。 bən

を参照せよとあり、同語はKETICA. S.22, nein, nicht; un-とある。八は *nəm* 二を引いた *qos* 十であり、九は *qusəm* 一を引いた *qos* 十の意味である。

p.48

Сеньη. ✓

Кинақоҗә Кіңко skoladiҗә вәһ дінвәс.
 Биҗ әти будә қуҗтыҗә дәһон. Кіңко адоот.
 Будә ор сеньηдаҗә оон. Сеньη дінвәс,
 қутки аһоһәп. Сеньη қутки винуқот. Бу даас-
 һаҗ; „Sej аһын“. Кіңкодә ор оон сеj деҗәсан.
 Бу сеj дақай.
 Кіңко вәһ доқтоқон.



48

sen η [seniη] KETICA. S.81, *senēη* Schaman シャーマン、呪術治療師。KETICA. S.85, *śanəη* Schaman. *dinbəs* KETICA. S.34, ich(od. er)kam 来る。KETICA. S.35, *djeksebes* kommen, ankommen, gehen 来る、行く。*kineqonge* KETICA.に発見できず。*bis* KETICA. S.23, Abend, am Abend 夕方。*budə(?)* KETICA. S.26, sie 彼女を(?)。 *qustiηə* KETICA. S.61, *kuos* 天幕。 *deḡon danngabak(?)* KETICA. S.29, finden 見出す(?)。 *adoot* KETICA. S.15, *adat* 病気である。 *qutki* KETICA. S.71, *qutkij* zaubern schamanieren 魔術を行う、シャーマン行為をする。 *ahohen* KETICA.に発見できず。 *inuqot* 終える KETICA.に発見できず。 *daashans* KETICA. S.30, *daskanē daskans daskants* sprechen 話す。 *anin* KETICA. S.18, *anij töte* 殺せ。 *dejesan* KETICA. S.33, *digij töten* 殺す。 *daqai* KETICA. S.28, *daḡi daḡi er tötete* 彼は殺した。 *doqtoqon* KETICA.に発見できず。

シャーマンの治療者としての実態が描き出されており、大変興味深い。病気を起こしている悪霊への犠牲として父親が殺した鹿はシャーマンへの報酬ともなる。シャーマンは独特の被り物を冠り、ハス [xas] (KETICA. S.45, *ha's* Zaubertrommel 呪術

太鼓)またはケシ [keʃ] (KETICAに見当たらず)という杵太鼓を、ハットブルと呼ばれる撥で叩いて鳴らす。筆者等(下村・伊藤)は、これは古くは *kat* + *bul* ‘皮を巻いた鹿の脛骨’ という形であったと考える KETICA. S.57, *ka't Pelz* 毛皮; S.26, *bul Fuss* 足。撥は鹿脛骨であり、鹿の毛皮が巻かれている。

アイヌ民族の杵太鼓はカチヨ *kacho* [kaʃo] と呼ばれるが、これら[Xas]、[keʃ]、[kaʃo]の三様の発音は音声的に極めて近いものである。太鼓の構造にはシベリアの地域毎に類型があり、何処かに少数の杵太鼓文化のセンターがあったと考えられている。太鼓は鳴らす前に炉の火で炙られ、その膜の張力が高められる。裏側には複数のリボンが結わえられており、子供に病気を起こしている悪霊は太鼓の音色とシャーマンの歌に誘い出され、このリボンに絡めとらる。シャーマンは天幕の外に出て、悪霊を叩き落とす。ケートは撥が太鼓に語らせる、と考える。こうして彼の(彼女の)一治療行程 ロシア語でセアーンズ が終わる²²。

ケートのシャーマンには、その能力の限定された小シャーマンとそうではない大シャーマンの別があった²³。前者は五家族に一家族の割合で存在し、主として物語を語り、予言を行う。後者はケート社会にわずか十数人しかおらず、シャーマン本来の超自然的力を最大限発揮する人物として、尊敬の対象となっていた。男はセニン *senin* と、女はセニム *senim* と呼ばれた。シャーマンは神・精霊・人間という関係に於いては、中立的立場をもっていると考えられていた。なお熊崇拜もシャーマニズムでは重要な位置を占めている。

読本48頁の一連の例文は、子供が病気になり、父親がシャーマンの言うなりに鹿を屠るが、病気は治らなかったという意味のものである。ソヴィエト当局はこの原始宗教と呪術医療行為を駆逐しようと徹底的に弾圧した。

Sen ɲə シャーマン

Kinəqoɲə Kinko skoladiɲə ən dīn əs.

今日 キンコは 学校に 否定詞 来た

Bis ətn udə qust ɲə dəɲon.

夕方 わたしたちは 彼を 幕舎で 見た

22 心理学者の故和田完小樽商科大学教授はシャーマニズムの研究者でもあったが、シャーマン治療には極めて高い治療効果があったと、意外な意見を下村に語ったことがある。

23 エドワード・エヴァンス=ブリチャード総監修、梅棹忠夫日本版総監修『世界の民族14シベリア』125頁。平凡社1979。

Kinko adoot.

キンコは 病気である

Budə op sen ŋdaŋə oon.

彼の お父さんは シャーマンのところへ 行った

Sen ŋ dīn əs, qutki aŋoŋən.

シャーマンが 来て、 呪術行為を はじめた

Sen ŋ qutki inuqot.

シャーマンは 呪術行為を 終えた

Bu daashans: «Sel an in».

彼は 言った「トナカイを 殺せ」と。

: « ».

Kinkod op oon sel dejesan.

キンコの お父さんは 出掛けた トナカイを 殺しに

Bu sel daqaj.

彼は トナカイを 殺した

Kinko ən doqtoqon.

キンコは 否定詞 よくなった

1 - 5 読本と例文の特徴

ケート語の初等読本として書かれたものではあるが、その中身は優れた民族の記録となっている。エニセイ河北部の厳しい自然環境の中での彼らの日常生活が鮮やかに描き出されているのである。項目としてケート民族に特徴的なもの、シベリア諸民族にとって特徴的なもの、ケートの精神世界にとって重要なものが選ばれており、ケートの民族学的研究の資料ともなりうるものである。因みに、1926年でのケートの識字率は、男性で2%、女性で0.3%の低さであった。しかし、この読本の出版された二年後の1936年には、男女共に13.4%と著しく向上している。

読本の構成は、全体を概観すると、大きく分けて三段階に分かれる。読本の導入部

分である4頁から9頁にかけては、挿絵とその挿絵の内容を示す単語が、一対となって掲載されている。中盤部分の10頁から19頁では、導入部に引き続き、一単語に対して一個の挿絵が示され、同時に既出の単語を用いて、短文が示されている。終盤部分の20頁以降は、挿絵を、長文を用いて詳細に解説している。また読本末尾には、読本全体の例文のロシア語による説明が付されている。以上のように、読本は頁を重ねるにつれて、単語数が増加し、文法的にも複雑な文章が登場するようになる。

次に読本の例文について述べてみよう。例文は、肯定、命令、否定が使われたものが登場する。その内容は、狩猟・漁撈、日常生活に関する事項、植物、衛生・医療に関する啓蒙的事項、動植物に関する事項、政治的メッセージに関する事項、宗教活動に関する事項が選ばれている。

読本の例文の音声表記に於いて特徴的なものとして、カールゲルは声門閉鎖音を一貫して表記しない方針を採用している事実を指摘しよう。ケート語では、声門閉鎖音は異音(allophone)である。ある方言にはあるが、他にはない。また同一の単語に対し、声門閉鎖音のあるものと無いものの両方の例が挙げられていることも多い。母国語話者にとっては、それを運用時の発音に入れる入れないかは、彼らの自由にまかされているのであるから、ケート語の音韻字母を創造するに際して、わざわざ字母を増やすことになる声門閉鎖音は自由変異(free variation)として無視することにしたのである。これはケート語学習者の負担を軽減することにも、印刷上の経済性にもつながるものであるから、合理的な決定であった。

一方、ドンネルやドゥリゾンの研究書中では、彼らは声門閉鎖音を忠実に表記している。ドゥリゾンに拠れば、ケート語声門閉鎖音は無声音であり、母音の前にも後にも現れるという²⁴。また、単語中では声門閉鎖音をもつ音節は母音の後ろか子音の前に現れる。母音に後続する場合、右側にある声門閉鎖音は左側の母音に融合する。また、後続子音が無声音であるならば、その前にある声門閉鎖音は内破(implosive)となり、声門閉鎖解除の音色は聞こえない。一方、後続子音が有声音の時、声門閉鎖のもつ無声性が右方に影響を及ぼし、この有声音は「ドゥリゾンの表現に拠るならば「囁き音化」される。

ドゥリゾンの列挙したこの現象は音声学的には自然なものである。 ?V_2 を母音Vとその声帯振動開始相と停止相に現れる声門閉鎖の連鎖とし、ドゥリゾンの説明を次のように簡略に表現してみよう： $(C_1)V_1\text{?V}_2\text{?}C_2(V)$ という連続では、 ? は ? [+vocalic] となる； $C_2[-voiced]$ ならば、 ? は ? [-release] という不明瞭な音となるが、 C_2 の方は明瞭に聞こえる音となる； $C_1[+voiced]$ ならば、 C_2 は $C_2[-voiced]$ となり、声門無

声摩擦音に近い音となる。

本読本に登場する語彙のうち、ドンネルとドゥリゾンがともに声門閉鎖音の存在を認める単語はʔaʔ, toʔt, kaʔt, taʔp, təʔə, jiʔ, duʔp, diʔ, saʔk, seʔn, kəʔi, diʔn, kiʔt, laʔm, qəʔj, saʔs, haʔs であるが、このうちtoʔt, kaʔt, taʔp, duʔp, saʔk, seʔn, diʔn, kiʔt, laʔm, saʔs, haʔs は CVʔ-{p, t, k, s} と CVʔ-{m, n, l} の二類に整理することが可能であろう。{p, t, k, s} は - voice で、{m, n, l} は + sonority でまとめた自然音類である²⁵。ドゥリゾンは前者から生まれる ʔp, ʔt, ʔk, ʔs を{声門内破 + 無声子音}、後者から導きだされる ʔm, ʔn, ʔl を{無声声門破裂音 + 無声 m n l}とし、両声門破裂音を無声としたのである。

ドゥリゾンは声門閉鎖音に無声と有声の別があるとの前提に立っているが、声門閉鎖音に二種類を認める考え方は、ケートの周辺の言語であるネネツ語 (Nenets) に関しても提出されている。ケートより更に北方のロシア連邦極北地域に展開するネネツ族 (別名ユーク・サモエド Yurak-Samoyed) の言語は非常に複雑な音韻組織をもつことで知られる。その声門閉鎖音には、語末で口腔に開放されて無声となるものと、鼻腔に開放されて有声となるものとがあり、両者は弁別的に振舞うと、自らがネネツ族出身の言語学者テレシチェンコ女史 (. N. M. Tereshchenko) は主張している²⁶。ウラリストの間では、特に鼻腔開放声門閉鎖音の実在を軸にして、激しい論争が展開された。本読本の筆者のうち下村はネネツ語の音声資料を入手し、デジタル・ソノグラフで分析を行ったが、単音節語で語末に声門閉鎖音が聴き取られる例は、ことごとく口腔開放か鼻腔開放かを示すソノグラムを与えるものであった²⁷。また、鼻腔開放に相当する反共振フォルマントが描かれる区間は約120msにもなり、その長さは異様に長い。120ms長とは、例えば、英単語 «cotton» のもついくつかの方言形のうち、[t]を[ʔ]で代用する形 [kaʔn] に見られる無音区間40msの三倍にも達するものである。それ以上に、この無音区間内部には発音の経済性に逆行する声門開口度の複雑な制御が見てとれるのである。この長さとも内部構造の複雑さを説明するために、筆者(下村)は、声門閉鎖音に連結した無音区間が、実は、消滅した音節の痕跡ではないかとの考えを提起したことがある。

はたして、上に提示したケート語声門閉鎖単音節 CVʔ-{m, n, l} のソノグラムにも、ある程度長い無音区間が現れ、そこに構造化されたフォルマントが描き出されるのであろうか。ケート語の声門閉鎖音節の問題は、おそらくこの言語の系統にまで関わる

25 土橋善仁北見工業大学助教授からの御教示。

26 Janhunen J. *Glottal Stop in Nenets*. Mémoires de la Société Finno-ougrienne. Vol. 196. Helsinki, 1986.

27 下村五三夫 「デジタル・ソノグラフによるネネツ語声門化音の分析」 日本音声学会編『音声の研究』(第22集) 東京1988

ものに違いないが、この音節の内部構造の解析がその重要な手がかりを提供すると思われる。

第二章 ドンネル録音蠟管資料の分析

2 - 1 ドンネル録音資料

1883年創立の The Finno-Ugrian Society (フィン・ウゴール学会)の基礎を固めた言語学者であり、フィンランド議会上院議員でもあった Otto Donner の息子、カイ・ドンネル(Kai Donner I.IX. 1888 - 12.II. 1935)は、同学会(フィンランド語では Suomalais Ugrilainen Seura)からの要請に基づき、1912 - 13年と1914年の二度ロシア・ウラル地方在住の非ロシア系諸民族の言語を調査したが、その時エヂソン蓄音機によって彼らの音声を30本の蠟管レコード - ロシア語では - に記録している²⁸。ドンネルの専門言語はセリクーブ Selkup (別称オスチャク・サモエード Ostyak-Samoyed)であったが、本論文の初歩読本の言語の話者であるケート Ket の集落と、既に僅少の言語人口になりつつあったカマッシ・サモエード Kamas-Samoyed の集落で調査を行っている。その旅行範囲は広大なものであり、北は北緯70度エニセイ湾の村ドゥチンスコエ (現ドゥチンカ)から南は北緯58度サヤン山地の麓カマッシの村アバラコヴァ に及んでいる。

5kgもあるエヂソン蓄音機と、一本が茶筒ほどもある録音管を数十本携えての、シベリアでの近代的音声調査の魁として、ドンネルの他にアヌーチン(V. I. Anuchin)と初等読本著者のカールゲルその人がいる。アヌーチンはケートのシャーマン歌を20本の蠟管に記録し、カールゲルは48本の蠟管に収めている²⁹。

ドンネル資料の録音管一本あたりの記録時間は最長2分半、中には2分に満たないサンプルもある。収録された資料は、言語名を記載していないもの数例、オスチャク・サモエード語、今日では死語となって久しいカマッシ語 Kamassian、タタール語 Tataric、トルコ語 Turcic、ロシア語である。我々がドンネルのこの音声資料に注目する理由は、九十年前の少数民族の生の声の記録という歴史的稀少性のほか、既に上で指摘したように、目録8番の資料はケート語のものである可能性があるからである。更には、1912~1914年という短い期間での少数民族の共時的口語資料が、同一の記録装置で同一録音時間という一定の条件のもとにある点もまた重要である。全資料の長時間スペクトルを並べ比較するならば、それは記録された諸言語の共時相の一面

28 蠟管とは呼ばれるものの、その素材は植物性蠟ではなく、ラックlac(カイガラムシ)と呼ばれる昆虫の雌が木の枝に分泌する樹脂様物質である。

を見ることと同じになるからである。

ドンネルはわずか四十五歳の若さで結核のため亡くなったが、第二次世界大戦後ヘルシンキ大学教授アウリス・ヨキ(Aulis J. Joki)によって、これら30本の蠟管の目録が作製されている。筆者のうち下村がヘルシンキのフィン・ウゴール学会で同目録を収集した。目録の題名と資料番号28、29、30はフィンランド語で、それ以外はドイツ語で記載されている。なお目録の番号は記録日時の順序とは必ずしも一致していない。

筆者等の目を特に惹いたのは、吹込み者 Aleksej Arbaldaev による目録番号5、6、9である。番号5の資料ではケート語で‘精霊’を意味する *kunč* [kunʃ] KETICA. s.59では *kynč* [kiŋʃ] がしばしば歌われているからである。なお目録番号7と8の吹込み者はFedosej Karpovič である。これら5本の蠟管録音は1912年11月6日オビ河の支流の一つケート川の集落に於いて、ただ一日で収録されたものである。他の蠟管の蓋に書き込まれている”ostjaksamojed”(オスチャク・サモエード)という呼称は、Selkup() ‘タイガに住む人’の意味 に対して使われていた旧称である。また (the Ostyaks)という名称自体はロシア人が二十世紀初頭まで Khanty() ハントを指すのに用いた名称であるが、当時はケートまでをも含むものであった。(語源は« - »(アス・ヤフ As-yah) ‘大河の人々’が考えられるという)³⁰。

ドンネルはケート語の語彙と音声収集を1912年11月中に終えており、その上、音声資料はこの30本の蠟管資料しか存在していないのである。少なくとも、*kunč*を含む資料5とそれを吹き込んだ Aleksej Arbaldaev による資料6と9は、ケート語のものである可能性のあることを指摘しておこう。

論文で使用した初等読本と音声資料は、それぞれ下村が原典からゼロックスコピーとカセットテープへ複写したものである。

Kai Donnerin fonogrammikkoelman luettelo 「Kai Donnerの録音管目録」

第一回目の旅

1912年6月収録資料

1. Anfang eines Schamanengesangs. Tym-Fluss, Jurte Kočjader. Semjon Karlgin.
Tymusk 10.6.1912
「シャーマン歌のはじめ部分」(於)トイミ川コチャヤードルの幕舎
(吹き込み)セミョン・カールギン トイミスク 1912年6月10日

注意：Tym 川とはシベリアの大河 Ob 河の支流であり、下流に向かって右岸にある。

2. Tym-Fluss, Kočjader. Semjon Jeliseič. Tysmsk 24.6.1912
 (於) トイミ川コチャードルの幕舎 (吹き込み) セミヨン・エリセイチ
 トイミスク 1912年6月24日
3. Vasjuganer Lied (ostjaksamojedisch). Ivan Teikin. Tysmsk 20.6.1912
 「(オスチャクサモエード) ワシユーガン川の歌」(吹き込み) イワン・テイキン
 トイミスク 1912年6月20日
 注意：Vasjugan もオビ河の支流の名(Vas'-Yugan)であり、Tym 川とは向かい側になる。
4. Ostjaksamoj. Lied. Tysmsk im Juni 1912. (Undetutlich)
 「オスチャクサモエードの歌」(吹き込み者、日時不明)
 トイミスク 1912年6月
- (27) „Kleiner Vogel“, ostjaksamoj. Lied. Oläska Oldžigin. Tysmsk 25.7.1912
 「オスチャクサモエードの歌“小さな鳥”」(吹き込み) オリヤシュカ・オリジギン
 トイミスク 1912年7月25日
 注意：この歌は番号27であるが、1912年7月収録とあるので、ここに入れた。

1912年11月収録資料

5. „Altes Lied“ vom Ket-Fluss. Aleksej Arbaldaev. Makovskoe 6.11.1912.
 「ケート河の古き歌」(吹き込み) アレクセイ・アルバルダーエフ
 マコフスコエ大村 1912年11月6日
 注意：この歌の後半(1:42-2:00)の部分にはケート語彙 kunc [kunj] ‘精霊’が、繰り返されている。しかし吹き込み者Aleksej Arbaldaevの民族名は記載されていない。ケート河はエニセイ河の支流ではなく、オビ河の支流である。エニセイ河上流の大村マコフスコエはケート他の住民を管轄する。
6. „Altes Lied II“ vom Ket-Fluss, Jurte Metaskina. Aleksej Arbaldaev. Makovskoe 6.11.1912.
 「ケート河の古き歌(二)」(於) メタシュキナの幕舎
 (吹き込み) アレクセイ・アルバルダーエフ
 マコフスコエ大村 1912年11月6日
7. „Zauberlied I“ vom oberen Ket, Jurte Nalimka. Fedosej Karpovič.
 「上ケート河の魔の歌」(於) ナリムカの天幕
 (吹き込み) フェドセイ・カールボヴィッチ(吹込者と日にちの記載無し)

8. „Zauberlied II“ vom oberen Ket, Jurte Nalimka. Fedosej Karpovič. (Gut)
 「上ケート河の魔の歌(二)」(於)ナリムカ为天幕
 (吹き込み)フェドセイ・カールボヴィッチ(良好な録音)
9. „Zauberlied“ vom mittleren Ket, Jurte Metaskina. Aleksej Arabaldaev. Makovskoe
 6.11.1912.
 「中ケート河の魔の歌」(於)メタシュキナ为天幕
 (吹き込み)アレクセイ・アルバルダーエフ マコフスコエ大村 1912年11月6日
 1913年1月収録
10. Ostjaksamojedisches Lied aus Turuchansk, gesungen von Pavel. 21.1.1913
 「パーヴェルが歌ったトゥルハンスクのオスチャク・サモエードの歌」
 1913年1月21日
 注意：Turuchansk はエニセイ河のほぼ下流に位置する大村である。ケートの居住
 圏であり、ドンネルは既に前年の11月23日から25日にかけて、ここを通過してい
 る。資料注釈にはOstjaksamojedischesとあるので今日のSelkup () セリ
 クープかと思われる。
11. Schamanenlied. Tas-Fluss (bei der Kirche). Pan Andreev. 18.1.1913. (Ziemlich gut)
 「シャーマンの歌」(収録地)タズ川の教会の傍
 (吹き込み)パン・アンドレーエフ 1913年1月18日 (おおむね良好な録音)
 注意：ドイツ語でTas はロシア語で “タズ” と呼ばれる川のことであり、
 これはオビ河とエニセイ河の間を流れる独立した河川でオビ湾に注ぐ。東のエ
 ニセイ河の村トゥルハンスクとは連水陸路で繋がっている。
12. Lied vom Tas-Fluss (bei der Kirche). Pan Andreev.
 Turuchan-samojedische Melodie. (Mittelmässig) 18.1.1913.
 「タズ川の歌」(於)教会の傍 (吹き込み)パン・アンドレーエフ
 トウルハンスク・サモエードの旋律 (中程度良好) 1913年1月18日
13. Lied vom Tas-Fluss. Pan Andreev. Melodie vom Vach-Fluss. 18.1.1913. (Schlecht)
 「タズ川の歌」(吹き込み)パン・アンドレーエフ
 ヴァフ川の旋律 1913年1月18日(録音状態不良)
 注意：ヴァフ川はオビ河の支流である。
14. Schamanenlied vom Tas-Fluss. Pan Andreev. Lied des Schamanen Andrej.
 Die gewöhnliche Melodie der Schamanenlieder. Bei der Kirche von Tas 19.1.1913. (Schlecht)
 「タズ川のシャーマン歌」(吹き込み)パン・アンドレーエフ
 シャーマンであるアンドレーエフの歌。シャーマン歌のありふれた旋律。
 (於)タズ川の教会の傍 1913年1月19日(録音状態不良)

15. Lied vom Tas-Fluss. Pan Andreev. 20.1.1913.
「タズ川の歌」 (吹き込み) パン・アンドレーエフ 1913年1月20日
16. Vom Tas-Fluss. 21.1.1913
「タズ川の(歌)」 1913年1月21日
17. Schamanenlied vom Tas-Fluss (der Kirchendiener Ivan). Pan Andreev. 23.1.1913
「タズ川のシャーマン歌」(於)教会の下僕イワン宅
(吹き込み) パン・アンドレーエフ 1913年1月23日
注意：筆者にはIvanとAndreev、もしくはIvanとシャーマンの関係が不明である。
ここでは「教会の下僕イワン宅」と解釈した。
18. Lie vom Tym-Fluss.
「ティム川の歌」
注意：ティム川はオビ河の支流であるが、ヴァフ川の上流に位置する。

第二回目の旅

1914年8月収録

19. Kamassisches Lied. Šamanka. Abalakova 7.8.1914
「カマッシの歌」(吹き込み)女のシャーマン 1914年8月7日
注意：Abalakovaアバラコヴァはサヤン山地にあるカマッシ族の村名である。
20. Kamassisches Lied. Abalakova 7.8.1914
「カマッシの歌」(収録地)アバラコヴァ 1914年8月7日
21. Tatarisches Lied. Abalakova 6.8.1914
「タタールの歌」(収録地)アバラコヴァ 1914年8月6日
22. Tatarisches Lied. Šamanka. Abalakova 7.8.1914 (Sehr gut)
「タタールの歌」(収録地)アバラコヴァ 1914年8月7日(おおむね良好な録音)
23. Lied?
「歌？」
24. Russisches Lied («
»). S. Zavodovolij. Tymsk 15.7.1912
「ロシアの歌」(「夜よ」) S. ザヴォドヴォーリイ トィミスク 1912年7月15日
25. Allgemeine russisches Romanze.
「ふつうのロシア叙情歌」
注意：これは 「赤いサラファン」という歌である。
26. Türkisches Lied aus Konstantinopel. Gesungen von einem alten Griechen in Abalakova.
「コンスタンチノーブル起源のトルコの歌」
アバラコヴァ在住老ギリシア人による

(27) „Kleiner Vogel“, ostjaksamoj. Lied. Oläska Oldzigin. Tysmsk 25.7.1912

「オスチャクサモエードの歌 “小さな鳥”」(吹き込み) オリヤスカ・オリジギン
 トイミスク 1912年7月25日

注意：この資料は上に移動した

1914年8月収録

資料番号27の後 Proosaa (散文)として、フィンランド語で次のような項目が続く：

28. Kamassilainen satu (gud'ur). Šamanka. Abalakova 12.8.1914

「カマッシ人のおとぎ話」(語り手) 女のシャーマン

(収録地) アバラーコヴァ 1914年8月12日

29. Sadun loppu. Šamanka. Abalakova 6.8.1914

「おとぎ話のおしまい」(語り手) 女のシャーマン

(収録地) アバラーコヴァ 1914年8月6日

30. Kertomus metsästä. Abalakova 6.8.1914

「森からの物語」(収録地) アバラコヴァ 1914年8月6日

このうち最後の二つは音声記録が散逸している。筆者たちが分析したのは28までである。

2 - 2 長時間平均スペクトルの比較

およそ90年前に収録された音声記録であるが、各サンプルをその最初から最後まで、長時間平均スペクトルの視点から観察することとする。ある音声のもつ音韻情報と韻律情報の全てはソノグラムに含まれているが、これは各分析時刻の断面スペクトルを時間軸に沿って並べたものである。断面スペクトルの一つ一つは観測時点での倍音構成を示すが、これは大まかに言って、喉頭音源情報が際立って現れる約300Hz以下の低域、口腔のフィルター特性が具現する約300Hz以上4kHzまでの中域、個人の口腔の細部の特徴がよく反映するとされる約4kHz以上8kHzまでの高域、の三つに分けることができる。低域が韻律などの超分節素を載せており、中高域が子音母音などの分節素を載せていると表現してもよいであろう。断面スペクトルを測定時間長で平均したものが長時間平均スペクトルであるが、筆者等は、これには音声の聴取実験の後に被験者が頭脳の中に形成する、漠然とした“音の像”を決めるものが含まれているのではないかと考える。例えば、オスチャク・サモエード語とされる音声を聞いた後にカマッシの音声を聞くと、イントネーション等の韻律の違い以外に、我々に両者が明らかに異なる言語であると感じさせるものがある。筆者等はそれが、分節素に相当するところの周波数・エネルギーの周波数軸上での分布の規則性であり、その測定期間内での繰り返しの規則性に対応するものではないかと考えるのである。また同一人

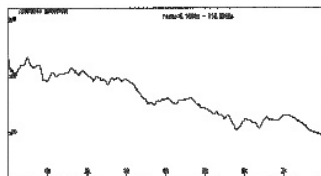
物の音声であることも聞き取りで判定できるが、この手がかりも平均スペクトルのある部分に含まれていると考える。これから資料の長時間平均スペクトルを提示するが、周波数軸・エネルギー軸の座標読み取りスケールとして図1を挙げる。

0dB									
-40dB									
-80dB									
	韻律要素 の具現域	子音・母音などの分節要素 口腔の伝達特性の具現域	子音・母音などの分節要素 口腔の解剖学的差異の具現域						
		0.3k	1k	2k	3k	4k	5k	6k	7k

図1. 断面スペクトル上での音韻情報具現域と周波数軸・エネルギー軸の座標読み取りスケール

音声資料はどれも蠟管レコード特有のシャーという雑音が被さっており、その結果音声成分がその中に埋没している。しかしフィルターを通して雑音を除去した場合の音声は、期待に反し音韻の同定がむしろより難しいものになってしまう。筆者等は、分析ではフィルターを使わずに、原記録をそのまま使用した。以下に、ドンネル目録の順に、録音サンプルに対する長時間スペクトル分析の結果を示す。

民族不明



1. Anfang eines Schamanengesangs.
Semjon Kargin

民族不明

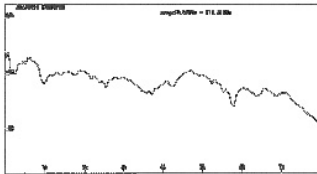


2. Tym-Fluss, Kočijader.
Semjon Jeliseič

資料1は男声の単調な歌、資料2も男声の旋律に乏しい歌である。両者は歌の内容が異なるが、包絡線の形は1.8kHz以下の低域で異なるだけで、それより高域ではよく一致する。200Hz以下が急峻な谷によって分離されているが、これはF0（ゼロ・フォルマント）に相当するものであろう。また3.6kHz付近で急な傾斜が形成されている。ここは母音 [i] の F2（第2フォルマント）が生ずる領域であり、母音帯域の上限である。5.6kHzと6.4kHzにも谷が形成されている。

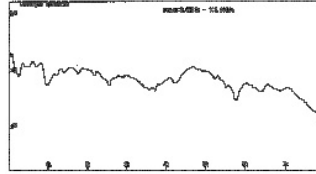
吹き込み者はどちらもSemjonという名であるが、同一人物である証拠がない。1.8kHz以上の包絡線の完全な一致が同一人物であることを示すのであろうか。しかし、吹き込み者が同一人物のものでも、1.8kHz以上の帯域でスペクトルの異なる場合が多々ある。例えば、資料5、6、9は Aleksej Arbaldaeв、資料11、12、13は Pan Andreev によるものであるが、この帯域の各包絡線は相互に微妙に異なる。

オスチャク・サモエード



3. Vasjaganer Lied (ostjaksamojedisch).
Ivan Teikin

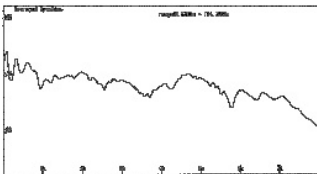
オスチャク・サモエード



4. Ostjaksamoj. Lied.
吹き込み者不明

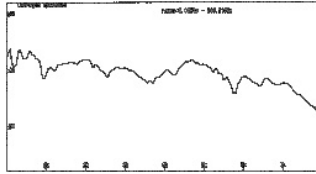
資料3と4は別々の男声の例。1kHz以上で包絡線は一致する。両者で200Hz以下が急峻な谷によって分離されている。ともに、1kHz、2.6kHz、3.6kHz、5.8kHz、6.4kHzで谷が形成されている。4.8kHzにある峰の高さは1.5kHzにあるその高さにほぼ等しいが、これは稀な現象である。

民族不明（ケートの可能性あり）



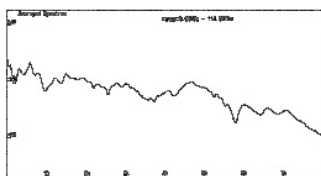
5. „Altes Lied“
Aleskej Arbaldaeв

民族不明（ケートの可能性あり）



6. „Altes Lied II“
Aleskej Arbaldaeв

民族不明（ケートの可能性あり）



9. „Zauberlied“

Aleskej Arbaldæv

これらの吹き込み者は同一人物であるが、1.8kHzより高域を除けば、相互に異なる包絡線をもつ。歌はともにシャーマン歌であるが、旋律の聴覚印象では資料5と6は互いに似ており、9はそれらとは似ていない。この印象に対応するものは、1kHz以下の資料5と6との包絡線の類似、資料9のこれらとの相違を指摘することができよう。また、三例ともに、1kHz、2.6kHz、3.6kHz、5.8kHzに谷をもっている。

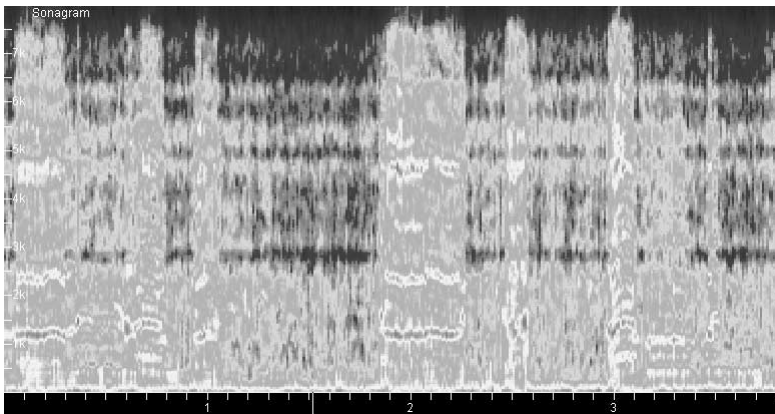
ここで、吹き込み者が同じであることが確認できるこれら三例を使い、吹き込み者が同一人物であるかどうかを確かめる試習的方法を提案したい。この目的での長時間スペクトルの観察に於いて、我われは、F0領域を右に越え、その右方にある峰と、200Hzの谷を右に越え、ここから400Hzまでの間にある峰々に注目する。資料5、6、9のスペクトル包絡線を重ね合わせ、灯火に透かして観察してみよう。同一ピーク周波数をもつ峰の左右の斜面の形状が、複数の比較点で一致することが判るであろう。

目録注釈の日付から分かるように、ドンネルはケート川での録音記録5、6、7、8、9を1912年11月6日一日で収録している。吹き込み者は二人で、アレクセイ・アルバルダーエフ Aleksej Arbaldæv とフェドセイ・カールボヴィッチ Fedosej Karpovič である。当時のオスチャクの呼称にはケートも含まれていたが、この二人がケートであった可能性については、上で既に指摘した。資料5、6、7、8、9の蝸管音声資料には、これがケート語であるとする注釈は付されていない。目録上ケートを暗示する言葉は“Ket”川だけである。フィン・ウゴル学会刊の言語地図『ウラル諸語の地理的分布』（1980）に拠れば、Ket 川にはセリクーブが居住している³¹。前述 Tym 川もセリクーブの居住地域、対岸の Vas-Yugan 川はハントの居住地域である。したがって、ドンネルはケート川ではセリクーブの音声を収録したのではないのかという疑問が生ずる。しかし、ドゥリゾンは「ケート語」（1968）で、「1911年から1913年にかけての西シベ

31 *Geographical Distribution of the Uralic Languages* Finno-Ugrian Society. Helsinki University. Helsinki 1980.

リア調査で、ドンネルはエニセイ・ケート族の言語と民族誌に関する貴重な資料を収集した...』と明言している³²。その上、ドンネルがケートを調査したのはこの11月中であり、録音資料で11月収録のものは資料5、6、7、8、9のみである。また、Aleksiej Arbaldaev 吹込みの音声資料5は、ケート族のシャーマニズム用語クンチ *kunč ~ kinč* ‘精霊’を含む。したがって、間接的証拠からではあるが、同吹き込み者による番号5、6、9の三本の蠟管録音資料はケート語のものである可能性がある。*kunč ~ kinč* ‘精霊’がセリクーブとハントにあるのかどうか、両言語の専門家の意見を待ちたい。

さて、*kunč*という語は1分40秒～2分00秒のあたりで度々聞こえるが、偶然にも、同語の前には声門閉鎖音が見出される。それを含む区間のソノグラムを図1に示そう。

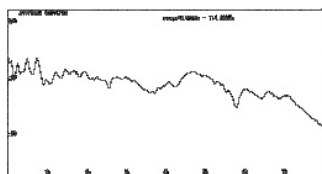


o : o ? ɰ ? a m t a j t o : o t t o ? _ _ ɰ a k k u : k u n ɰ

図1. *kunč ~ kinč* ‘精霊’と声門閉鎖音2箇所を含む音声連鎖のソノグラム。
左側の声門閉鎖区間 [? ɰ ?] は約120ms長、右側の声門閉鎖区間 [? _ _] は
約100ms長である（ドンネル資料目録5番「ケート川起源の魔の歌」
のはじめから1分40秒～2分00秒のあたりに録音されている）

左側の声門閉鎖区間 [? ɰ ?] は、あたかも、内部構造をもつかのように見える。調音運動の流れもまた、「経済性の原則」に逆行するような、より複雑なものとなっている。この声門閉鎖音に挟まれた異様に長い区間は、音節の痕跡を見せているのであろうか。

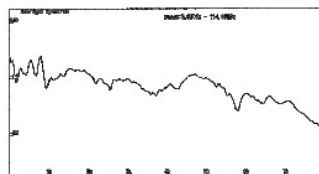
民族不明



7. „Zauberlied I”

Fedosej Karpovic

民族不明



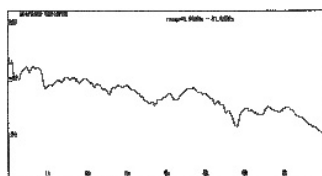
8. „Zauberlied II”

Fedosej Karpovic

資料7と8は男声による呪術の歌。200Hz以下が急な谷によって分離されており、ここから1kHzの帯域で鋭い峰が三つ現れている（250Hz-500Hz-750Hz ***で標示）。2.6kHz以上の包絡線はほぼ一致する。1kHz-2.6kHz-3.6kHz-5.8kHzに谷をもっている。200Hz～1kHzの峰のプロフィールは他の例にない独特のものである。250Hz-500Hz-750Hzという周波数は、この順に母音 i - e - a のF1の領域相当する。

ここで、資料5、6、9に適用した話者同定の方法を、これら7と8に対して行ってみよう。結果は、200Hzの谷の左右で、複数の峰の斜面の形状は、複数の点で同時に重なり合うものとなうであろう。

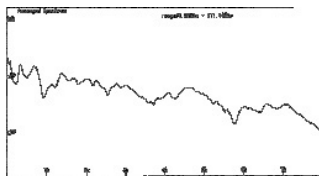
オスチャク・サモエード



10. Ostjaksamojedisches Lied.

Pavel

トゥルハンスク・サモエード

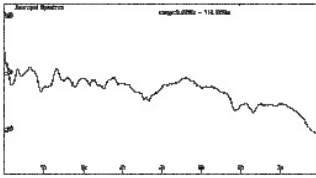


11. Schamanenlied.

Pan Andreev

資料10は針飛びの雑音の多い例である。200Hz以下が急な谷によって分離されている。1kHz-2.6kHz-3.6kHz-5.8kHzに谷をもっている。資料10と11では、吹き込み者が異なるのだが、興味深いことに、包絡線は2.6kHz以上の帯域では完全に重なるのである。2.6kHz以上の帯域の平均スペクトルには、個人差は模様の中に埋没して現れないということなのだろう。

トゥルハンスク・サモエード

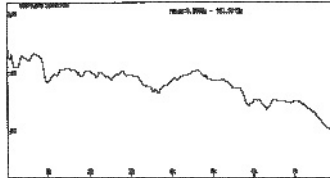


12. Lied vom Tas-Fluss.

Turuchan-samojedische Melodie.

Pan Andreev

トゥルハンスク・サモエード



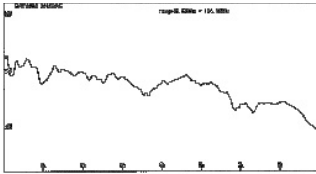
13. Lied vom Tas-Fluss.

Melodie vom Vach-Fluss.

Pan Andreev

上で既に指摘したことと重なるが、資料11、12、13、14、15、17は Pan Andreev 一人の吹き込みであるが、各包絡線は中高域でどれも相互に異なる。また吹き込み者が異なる資料14と15とでは、1.5kHz以上での両者の包絡線は重なるのである。

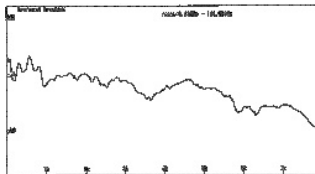
民族不明



14. Schamanenlied vom Tas-Fluss.

Andrej

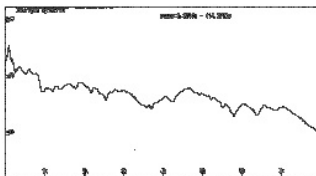
トゥルハンスク・サモエード



15. Lied vom Tas-Fluss.

Pan Andreev

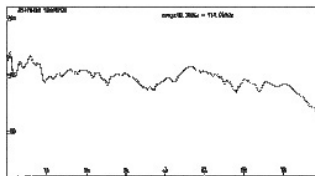
民族不明



16. Vom Tas-Fluss.

吹き込み者不明

トゥルハンスク・サモエード



17. Schamanenlied vom Tas-Fluss.

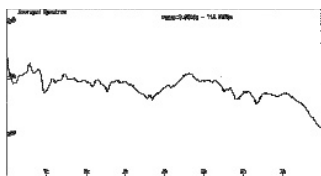
Pan Andreev

資料16と17はともに男声の歌である。一見すると、両者は全く異なっているのだが、SN比が異なるだけである。資料16の包絡線を、1kHz以上の帯域でエネルギー軸

に沿い、上側に移動させると、両者の包絡線は完全に一致する。資料16の包絡線は17のそれより下側に推移しているのだが、通常この有様の方が雑音の少ない録音を示すのである。ただし、資料16の録音は資料17と同じくエヂソン録音機特有のシャーという雑音が被さっている。

ここでもまた、資料5、6、9および資料7と8に適用した話者同定の方法を、資料11、12、13、14、15、17に対して行ってみるならば、200Hzの谷の左右で、峰々の包絡線の斜面は複数の点で同時に重なり合うのである。さらに、話者が別人であることが確認される資料5、6、9（吹き込み手は Fedosej Karpovic）と、資料7と8（吹き込み手は Aleksej Arbaldaeв）とに対して試みるならば、この六例（吹き込み者 Pan Andreev）は前二者とは重なり合わない。また、前二者同士も重なり合わないことが判明する。

民族不明

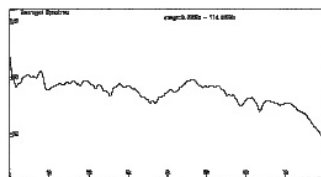


18. Lied vom Tym-Fluss.

吹き込み者不明

資料18は「トィム川の歌」とあり、吹き込み者不明とあるので、資料12と比較すべきものであろう。しかし資料18はこの二例とは、谷の配列では似ているものの、全帯域での包絡線の形はやや異なる。

オスチャク・サモエード

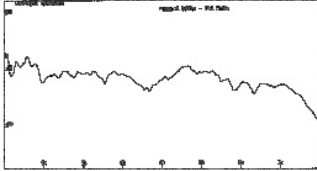


27. „Kleiner Vogel”, ostjaksamoj. Lied.

Oläska Oldzigin

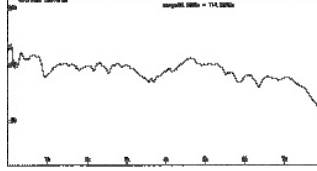
男声の歌。これまでのオスチャク・サモエード音声の分析例と比較すべきもの。200Hz以下が急な谷によって分離されている。3.6kHzを中心に谷が形成されており、これより高域の有様はそれらとよく一致する。

カマッシ



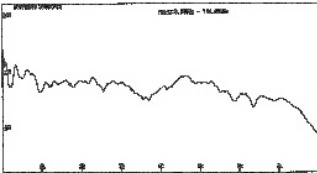
19. Kamassisches Lied.

カマッシ



20. Kamassisches Lied.

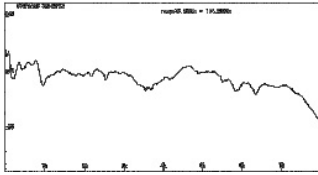
カマッシ



28. Kamassilainen satu (gud'ur).

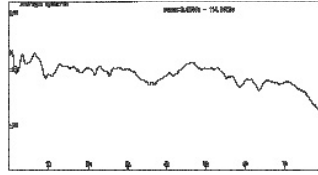
カマッシ語は今日では死語であり、これらは非常に貴重な記録である。資料19と20は女声のシャーマン歌であり、資料28はシャーマン女性の語りである。三例ともに、2.6kHz以上の帯域での包絡線のプロフィールはよく似ている。この帯域で、資料19と20はほぼ重なり、資料28は両者に対してエネルギーレベルの低い方向に位置している。資料19と20はシャーマン歌、資料28は語りであることを合わせ考えると、この現象は歌と語りのもつ音韻上の統計的差異に対応するものなのかも知れない。ただしこまでの例と比べたとき、カマッシの包絡線の形は全帯域に於いて平坦であると言える。

タタール



21. Tatarisches Lied.

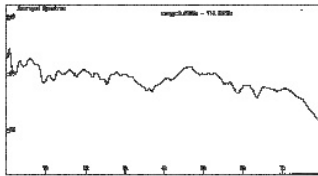
タタール



22. Tatarisches Lied.

資料21と22は同一のタタール女性による歌である。200Hz以下が急な谷によって分離されている。包絡線は2.6kHzより低域では異なるが、これより高域では一致する。また両例に於いて、4.6kHzに峰があり、そのエネルギーは母音域の峰のそれに等しいが、それを超えるものである。これがタタールの歌の特徴に対応するものなのかも知れない。

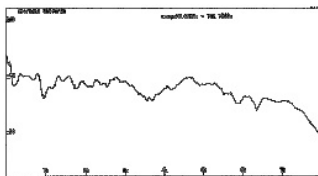
民族不明



23. Lied?

上の資料17の例によく似ている。200Hz以下が急な谷によって分離されている。3.6kHzに深い谷が形成され、4.6kHzの近辺に位置する高い峰のエネルギーは低域の峰のそれを超えている。

トルコ

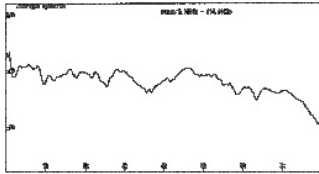


26. Türkisches Lied aus Konstantinopel.

吹き込み者不明

この例は、資料21と22のタタールの例と比べた場合、いくつかの点で大きく異なるものである。3.6kHzより高い帯域では、むしろ資料27のオスチャクサモエードの分析例とほぼ一致する。また、200Hz以下が急な谷によって分離されている。これを含め、ここまでの例の大部分で、1kHz-2.6kHz-3.6kHz-5.8kHzの周波数座標軸に谷が形成されていることが判る。

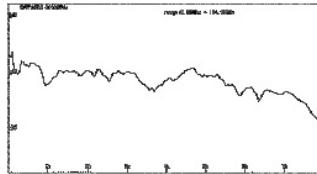
ロシア



24. Russisches Lied.

S. Zavodovolij.

ロシア



25. Allgemeine russisches Romanze.

歌い手不明

資料24は「夜よ」、25は「赤いサラファン」というロシアの民謡である。ドンネル資料の中にある唯一の印欧語話者の音声であり、且つ旋律の上下が大きい点で、歌らしい歌である。「赤いサラファン」は嫁にゆく女の歌うものだが、ここでは資料24とは異なる男性が歌っている。特徴として、200Hz以下が急な谷によって分離されていること、3.6kHzを中心に谷が形成されており、これより低域では様子は異なるものの、高域では一致することが挙げられる。また4.6kHzの近辺に位置する高い峰のエネルギーは低域の峰のそれを超えている。

考 察

目録中28本の蠟管資料を長時間平均スペクトルの視点から比較する。筆者がケート語ではないかと推測する資料5、6、9の音声は、他の例に比べ包絡線全体の形状相互の違いがやや大きく、その上、2kHz以下の周波数領域でのエネルギーの変動がやや大きい。また資料7と8は、母音 i、e、a の F1 周波数に相当する座標上に、鋭い峰をもつものである。これは当該の母音が卓越して使われたことを示すが、他の例には全く見られない独特の現象であるようだ。これらを含む28個の音声資料は、その吹き込み者の民族構成の点から見ると、推定ケート語（言語系統未定）、オスチャク・サモエード語（ウラル語サモエード語群）、トルコ語（アルタイ語チュルク語群）、ロシア語（印欧語スラヴ語派）、カマツシ語（ウラル語サモエード語群）、タタール語（アルタイ語チュルク語派）から成るが、これらに共通する特徴がある。それらは

次の四点であり、図1と対比させ、図2としてまとめる：

- 1) 約200Hzの辺りに急峻な谷が形成されること。
- 2) 200Hz～3.6kHzの領域に包絡線の大きな違いが現れること。
- 3) 1kHz-2.6kHz-3.6kHz-5.8kHzの周波数座標軸に谷が形成されること。
- 4) 3.6kHzより高域では包絡線のプロフィールそのものが似てくること。

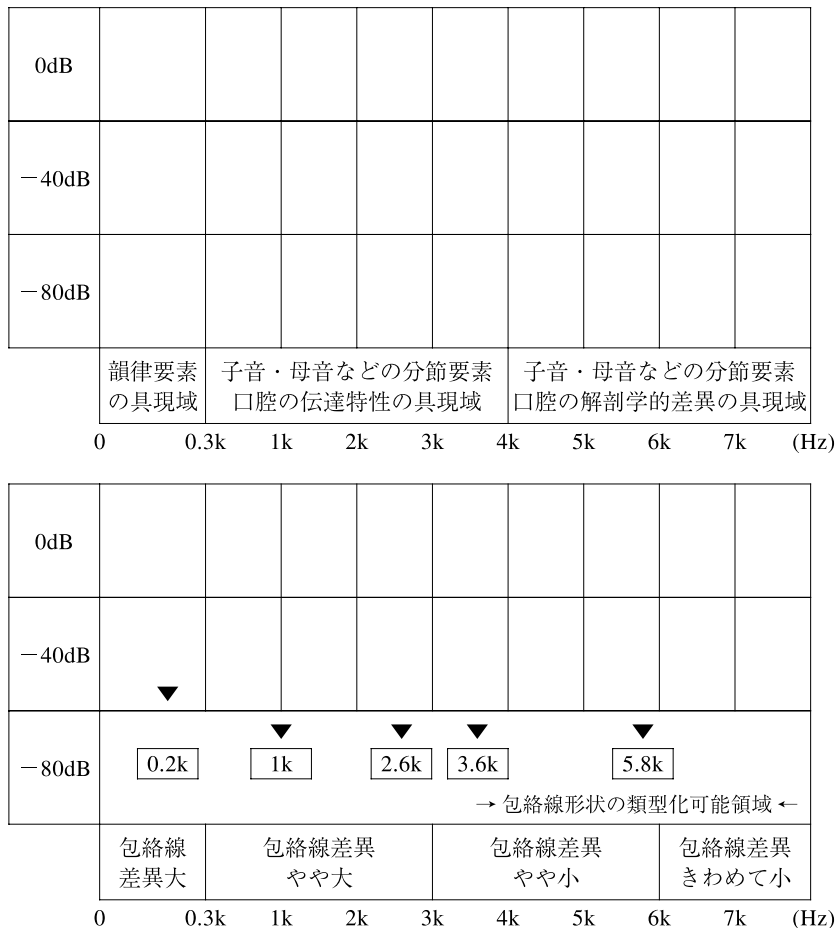


図2. 長時間平均スペクトル上での包絡線の差異の現われ方と音響エネルギーの減衰点を、図1と対比して示した図（▼は減衰点を標示）。
で囲んだ数字は減衰周波数の数値。

周波数軸上でのエネルギーの減衰点の位置は、その殆んどがケート語（推定）オスチャク・サモエード語、トルコ語、カマツシ語、ロシア語、タートル語に於いて通言語的に現れる。言い換えるならば、これらの言語では、周波数軸時上0.2k - 1k - 2.6k - 3.6k - 5.8kの4点で、調音が義務的に制限されているのである。音声の長時間スペクトル分析は、個別言語の音声を統計的に処理する結果、分析結果には超分節音素以外の音韻の生得的差異は極端に薄められた形で現れる。第2章の冒頭で述べたが、筆者はこのスペクトル包絡線の概観が、その言語を聴いたときに感じとる漠然とした聴覚印象に、ある程度対応すると考えている。しかし、音声を平均的に処理した結果に、このような現象が現れる理由については、残念ながら、筆者等には説明ができない。

蠟管録音資料28例（時間にしておよそ60分）を分析する過程で、我われは次のような吹き込み話者同定の方法を提案した：

- 1) F0領域に現れる峰々と、その直近の200Hz位置にある、深い谷の右側に現れる峰々の斜面の形状を比較すること。例えば任意の比較例AとBに於いて、200Hzの谷の左右の峰々の斜面が複数の点で同時に重なりあえば、両者は同一人物の吹き込みによる可能性が高い。吹き込み者が判っている例の大部分で、この方法は有効であることが確かめられた。
- 2) またこの方法に抛れば、資料1と2は吹き込み者の名前は同じでも、二つの斜面は重なり合わない。筆者等はそれぞれ別の吹き込み手であると考える。同様の照合方法により、資料3と4も同一話者によるもの、資料16は Pan Andreev によるもの、資料19、20、21のカマツシ語の例も同一女性話者によるもの、資料24と25も同一歌手によるものと判定される。

平均スペクトルを読み取った部分では、3.6 - 8kHzの帯域での包絡線はお互いがどれも似てくると指摘した。しかし、その似たもの同士に対しても、直感的ではあるが、ある程度の類型化を施すことが可能であるように見える。但し、この領域での包絡線形状の類似が、音声のいかなる特長に対応するのかについて、未だ我われは明確な意見を構築できないでいる。言語名が明記された例に於いて、3.6kHz以上の包絡線を比較検討し、ここで次のように類型化を行い、図3としてまとめてみよう：

- 1) 資料5、6、9が集団A、資料7と8が集団B、資料3と4が集団Cとしてまとめられる。A、B、Cは相互によく似た集団でもある。このうちBに接近するものとして、

資料19、20、28の集団Dがある。このDに対して、資料 21、22、24、25、26、27がまとまって位置している。これをEとする。また、先のBには、Dとは異なる有様で、資料10、11、12、13、14、15、17が接近している。これをFとする。このFには資料1と2が接している。これをGとする。

2) 類似の距離の直感的測定に拠れば、上の有様は次のように表現できるであろう。

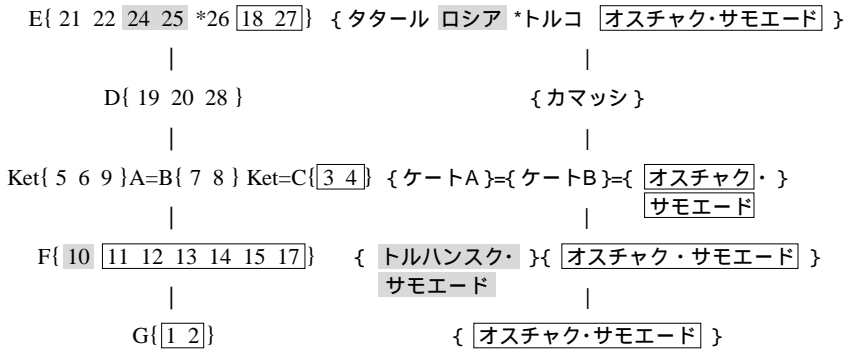


図3. 3.6kHzより高域での包絡線の類似によって音声資料を7集団にまとめた図。=は「大変類似する」を、|は「比較的類似する」を表す。

印欧語のロシア語の例が、タタール語、トルコ語、オスチャク・サモエード語の群に入ること、カマッシ語の例が孤立していること、さらにはオスチャク・サモエードの10例が四つの下位群に分かれことが興味深い。ただし、オスチャク・サモエードのこのまとまりは、地域差によるものではなく、吹き込み者の違いによるものである可能性もある。

よって、我われは、1) 話者個人性は0～200Hzの峰々と200～1kHzの峰々に、2) 歌声の旋律変化の特徴や各種の母音の特徴は1kHz～3.6kHzの帯域に、3) 各種の子音の特徴は3.6kHz～5.8kHzの帯域に、それぞれ集中して現われ、さらに 4) 子音の統計的頻度が濃密に反映する領域である3.6kHz～8kHzの包絡線を比較することにより、ドンネル音声資料は、ある程度、言語系統の面からの類型化が可能であると考えられるものである。

引用文献一覧

1. Karger N. K. *Bukvar UCPEDEGIZ* Moskva-Leningrad 1934.
2. 1934.
3. Popov A. A. and Dolgikh B. O. *The Kets*. The Peoples of Siberia, edited by M. G. Levin and L. P. Potapov. The University of Chicago Press. Chicago and London 1965.
4. Azerbaijan International, Summer 1997 [5.2](Internet version). Alphabet Transitions: The Latin Script: A Chronology. *Symbol of a New Azerbaijan*, by Tamam Bayalty.
5. Donner K. *Ketica*. Materialien aus dem Ketischen oder Jenissei-Ostjakischen // Mémoires de la Société Finno-ougrienne. Vol. 108. Helsinki, 1955.
6. 48.
7. 1968.
8. Janhunen J. Glottal Stop in Nenets. Mémoires de la Société Finno-ougrienne. Vol. 196. Helsinki, 1986.
9. *Geographical Distribution of the Uralic Languages*. Finno-Ugrian Society. Helsinki University. Helsinki 1980.
10. 大林太良 『北方の民族と文化』 頁175-176。 山川出版社 1991
11. エドワード・エヴァンス＝プリチャード総監修 梅棹忠夫日本版総監修 『世界の民族14 シベリア』 125頁。 平凡社1979。
12. 下村五三夫 「デジタル・ソノグラフによるネネツ語声門化音の分析」 日本音声学会編 『音声の研究』(第22集) 東京1988

Cyclic Spell-Out, Phonological Phrasing and Focus

Yoshihito DOBASHI

Abstract

In this paper, I argue that phonological phrasing reflects syntactic cycle, by examining cross-linguistic data on focus and its effect on phonological phrasing. I show that the focus affects the phonological phrasing so that it may delete phonological phrase boundaries to the end of the sentence, but not to the beginning. I argue that those effects of focus receive a principled account in terms of Multiple Spell-Out that applies in a cyclic manner within a bottom-up derivational approach to narrow syntax (Chomsky 2000, 2001a,b, Collins 2002, Uriagereka 1999, Epstein et al 1998).

1. Introduction

In recent literature on minimalist syntax (Chomsky 2000, 2001a,b, Collins 2001, Uriagereka 1999, Epstein et al 1998), it is argued that Spell-Out (S-O) applies in a cyclic manner. Since S-O is an operation that maps a derivation of narrow syntax to the phonological component, it is predicted that there are phonological phenomena that reflect syntactic cycle.

In this paper, I argue that phonological phrasing reflects syntactic cycle (also see Dobashi 2003). More specifically, I show that restructuring of phonological phrases that is triggered by the presence of focus may affect the phonological phrases (p-phrases) that exist at the point of S-O of the focus. In other words, “forthcoming” p-phrases that will be created later cannot be affected by the presence of focus.

In this paper, I do not argue for or against any specific proposal about cyclic S-O, but rather argue for a general idea about cyclic S-O. This paper is organized as follows. In section 2, I introduce data and give a descriptive generalization. In section 3, I give an account for the generalization. In section 4, I briefly discuss some theoretical issues and conclude the discussion.

2. Data and Generalization

It is well known that focus causes the restructuring of phonological phrases. To the best of my knowledge, the three types of restructuring shown in (1) are attested while the one shown in (2)

is not:

- (1) a. (... A ...) (... B ...) (... C ...) (... D ...) (... E ...)
 (... A ...) (... B ...) (... C D ...) (... E ...)
- b. (... A ...) (... B ...) (... C ...) (... D ...) (... E ...)
 (... A ...) (... B ...) (... C D E ...)
- c. (... A ...) (... B ...) (... C ...) (... D ...) (... E ...)
 (... A ...) (... B C ...) (... D ...) (... E ...)
- (2) (... A ...) (... B ...) (... C ...) (... D ...) (... E ...)
 (... A B C ...) (... D ...) (... E ...)

I have underlined the focused constituents and have inserted parentheses to indicate p-phrases. In (1a), the focus deletes one p-phrase boundary on its right. In (1b), it deletes all the p-phrase boundaries to the end of the sentence. In (1c), it deletes one p-phrase boundary on its left. However, as far as I know, there is no language where the focus deletes all the p-phrase boundaries to the beginning of the sentence. In what follows, I show some examples for each type shown in (1).

First of all, let us consider the (1a)-type examples, where a focus deletes a p-phrase boundary on its right. Sandawe (Dalgish 1979, Dempwolff 1916, Eaton 2002, Elderkin 1989, Kagaya 1990) has a downstep between words:

- (3) (Sándá) (sóbá ' thímé-sù)
 sanda fish cook-3f.sg.future
 'Sanda will cook the fish' (Elderkin 1989: (3.64))

Here, the pitch levels of the high tones of *Sándá* and *sóbá* 'fish' are the same, but the pitch level of *thímé-sù* is lower. Assuming that the downstep applies within a p-phrase but not across a phonological boundary, there is a p-phrase boundary between *Sándá* and *sóbá*, but not between *sóbá* and *thímé-sù*.

If the subject is focused, then we have a sequence of downsteps to the end of the sentence:

- (4) (?útè) (sándá-á ' sóbá ' thímé)
 yesterday Sanda-Nom fish cooked
 'Yesterday she cooked the fish' (Elderkin 1989:96)

Here, *sóbá* has a lower pitch level than *sándá-á*, and *thímé* has a lower pitch level than *sóbá*. Note that it is not clear at this point whether all the p-phrase boundaries are deleted after the focused subject, since there is no phonological boundary between object and verb even in normal

phrasing (3). Note also that in (4), restructuring does not affect the phonological phrasing before the focus.

If *?útè* ‘yesterday,’ instead of *sándá* ‘Sanda,’ is focused, then the following phonological phrasing shows up:

- (5) (*?útè*-sà ! sándá) (sóbá ! thíímé)
 yesterday-3f.sg Sanda fish cooked
 ‘Sanda cooked the fish yesterday’ (Elderkin 1989:96)

Here, the downstep is observed between *?útè-sà* and *sándá*, and between *sóbá* and *thíímé*, but not between *sándá* and *sóbá*. That is, only one p-phrase boundary that is on the right of the focused constituent is deleted. The restructuring pattern in Sandawe conforms to the pattern in (1a).

One of the other languages that conform to the pattern in (1a) is KiYaka, discussed by Kidima (1990, 1991).

Let us next consider the (1b)-type of examples, where a focus deletes all the p-phrase boundaries to the end of the sentence. One of the languages that fall within this type is Hungarian. A diagnostics of phonological phrasing is *l*-palatalization:

- (6) *l*-palatalization (Kenesei and Vogel 1989: 157)

$l \rightarrow j / __ j$

This rule applies between a base and suffix within a word as in (7a) and within a compound as in (7b):

- (7) a. tol-ja \rightarrow to[**j**]ja ‘he pushes it’ (Kenesei and Vogel 1989: 157)
 b. szél-jegyzet \rightarrow szél[**j**]jegyzet ‘margin note’

This rule also applies between words:

- (8) jó**l** jár (Kenesei and Vogel 1989: 158)
 well walks ‘he fares well’ (lit. ‘he walks well’)

Here and below, the italicized *l* is palatalized and the bold-faced **l** is not.

Now, let us consider the following example.

- (9) Mari beszélgetett olaszul Jánossal (Kenesei and Vogel 1989:159)
 Mary spoke Italian John-with
 ‘Mary spoke in Italian with John.’

Here, the bold-faced **l** is not palatalized even though it is followed by *j*, indicating that there is a p-phrase boundary that blocks *l*-palatalization. However, consider the following example with a

focus in the preverbal position:

- (10) Mari a kastélyban beszélgetett olaszul Jánossal (Kenesei and Vogel 1989:158)
 Mary the castle-in spoke Italian John-with
 ‘In the castle Mary spoke Italian with John’

Here, the underlined *a kastélyban* ‘the castle-in’ is focused, and the italicized *l* undergoes palatalization because of the following *j*. Given that *olaszul* and *Jánossal* are in the same positions in (9) and (10), the emergence of *l*-palatalization in (10) indicates that the phonological phrasing is restructured due to the presence of the focus and the p-phrase boundary is deleted. The following data shows that the focus affects the phonological phrasing to the end of the sentence:

- (11) a. tegnap Péter a parkban kérdezte az angol játékról Jánost
 yesterday Peter the park-in asked the English toy-about John-acc.
 ‘Yesterday Peter asked John about the English toy in the park.’
 (Kenesei and Vogel 1989:165)

Here, the underlined *a parkban* ‘the park-in’ is focused, and the *l* of *angol* ‘English’ as well as that of *játékról* ‘toy-about’ undergoes palatalization, indicating that the focus eliminates all the p-phrase boundaries to the end of the sentence.

Even though p-phrases that follow the focus are restructured, those that precede a focus do not undergo restructuring:

- (12) a. Jásossal Júlia a parkban játszott tegnap egy meccset
 John-with Julia the park-in played yesterday a match-acc
 ‘Julia played a match with John in the park yesterday’ (Kenesei and Vogel 1989:165)
 b. a parkban Pál játékból verte nyakon Pétert
 the park-in Paul playfully hit neck-on Peter-acc.
 ‘Paul playfully hit Peter on the neck in the park.’ (Kenesei and Vogel 1989:165)

In (11a), *a parkban* ‘the park-in’ is focused, and in (b), *játékból* ‘playfully’ is focused. And the boldfaced *l*’s which are located before the focus do not undergo *l*-palatalization even though they immediately precede *j*. Therefore, restructuring in Hungarian conforms to the pattern in (1b).

One of the other languages that conform to type (1b) is Japanese, as discussed by Nagahara 1994.

Let us finally consider type (1c). One of the languages that fall within this type is Italian. The

relevant phonological rule that applies within a p-phrase is *Raddoppiamento Sintattico* (RS). Nespor and Vogel's (1986:166) formulation of RS is as follows: RS applies in a sequence of two words (w1 and w2) to lengthen the initial consonant of w2 if a) the consonant in question is followed by a sonorant, specifically a vowel or other nonnasal sonorant, and b) if w1 ends in a vowel which is the main stressed syllable of w.

Now, let us consider the following example, where there is no focus:

- (13) (porteró) (tre caffè) (Frascarelli 2000: 26)
 bring-FUT-1sg three coffees
 'I will bring three cups of coffee.'

Here, the initial consonant of *tre* 'three' is not lengthened even though it is preceded by a vowel because a p-phrase boundary intervenes between them. However, if *tre* is focused, the initial consonant *t*, which is italicized below, is lengthened, indicating that the p-phrase boundary is deleted:

- (14) (porteró) (*tre* caffè) (Frascarelli 2000: 26)
 bring-FUT-1sg three coffees
 'I will bring three cups of coffee.'

And crucially, the deletion of the p-phrase boundary does not extend to the beginning of the sentence, as the following contrast shows:

- (15) a. Normal: (non so) (quello che faró) (dopo la lezione)
 b. Focus: (non so) (quello che faró) (dopo la lezione)
 not know-1sg what that do-FUT-1sg after the lesson
 'I don't know what I will do after the lesson.' (Frascarelli 2000: 26)

In (15b), *dopo* 'after' is focused, and the preceding phonological boundary is deleted. Therefore, the initial consonant of *dopo* is not lengthened in (15a), but it is lengthened in (15b). However, the initial consonant of *quello* 'what' is not lengthened in either case, indicating that focus deletes only one phonological boundary that precedes it, but does not delete all the boundaries to the beginning of the sentence.

English (Frascarelli 2000:42), European Portuguese (Frota 2000), and Chichewa (Kanerva 1990) also conform to the pattern of (1c).

As I mentioned at the beginning of this section, the pattern where the focus affects phonological phrasing to the beginning of the sentence does not seem to exist. If so, we have the following symmetry and asymmetry:

- (16) a. Symmetry: The restructuring triggered by F may have an effect on a left or right phonological boundary of a phonological phrase that contains F.
 b. Asymmetry: The restructuring triggered by F may have an effect to the end of the sentence, but not to the beginning of the sentence.

In the next section, I give a principled account for (16) in terms of Multiple Spell-Out.

3. Analyses

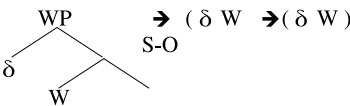
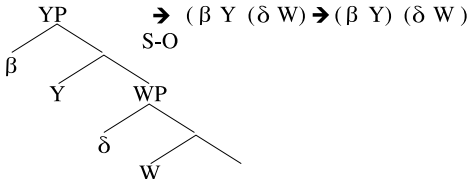
I adopt the following basic assumptions:

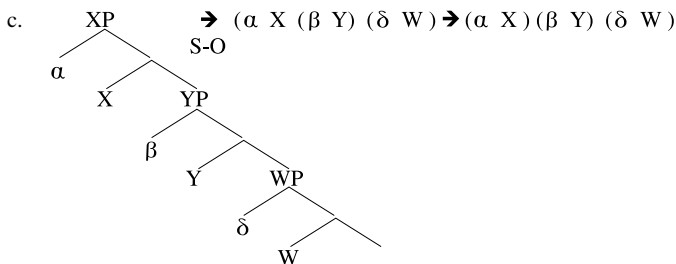
- (17) a. Syntactic derivations proceed in a bottom-up fashion.
 b. Linear order is defined in terms of asymmetric c-command. (Kayne 1994, Chomsky 1995)
 c. Spell-Out applies in a cyclic manner. (Uriagereka 1999, Chomsky 2000, 2001a,b.)
 d. A phonological phrase is created at each Spell-Out. (Dobashi 2003)

I make the following specific assumptions concerning the creation of p-phrases:

- (18) a. When Spell-Out applies, a left boundary “(” of a p-phrase is created. (Seidl 2001, cf. Halle and Idsardi 1995)
 b. A constraint EXHAUSTIVITY requires that a right boundary be created in accordance with the Strict Layer Hypothesis. (Truckenbrodt 1995, 1999)

In order to see how (17) and (18) work, let us consider the following derivation:

- (19) a. 
- b. 



In (19a), S-O applies to WP. Then a left boundary is created, resulting in “(δ W”, and EXHAUSTIVITY requires to create a right boundary, resulting in a p-phrase “(δ W).” Similarly, p-phrases (β Y) and (α X) are created at the point of S-O in (19b) and in (19c), respectively.

As we have seen in the previous section, focus triggers restructuring of p-phrases. I assume that such restructuring applies when a focused element F is contained in a spelled-out phonological string:

(20) F triggers restructuring of phonological phrasing when it is spelled-out.

Focus gives an instruction to PF so that the existing phonological phrasing is modified.

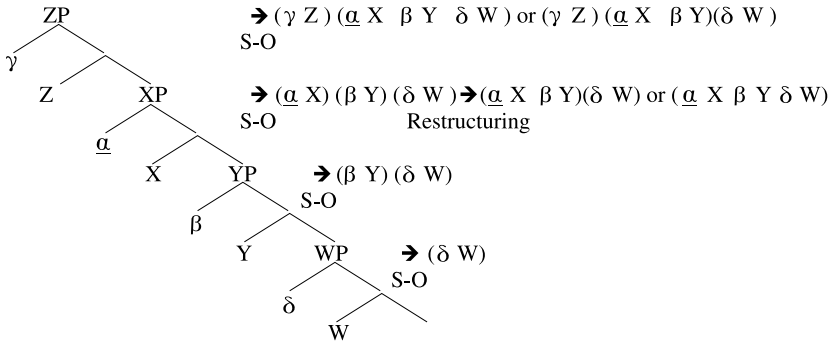
I assume that the restructuring occurs in one of the following three ways when F is spelled-out:

(21) *P-Phrase Restructuring at the spell-out of F:*

- a. A p-phrase boundary that would be created on the right of the spelled-out string is deleted.
- b. All the p-phrase boundaries that have already been created are deleted.
- c. The left bracket is deleted.

Let us first consider (21a) and (21b). Suppose that α is focused in (22) (I have underlined the focused element):

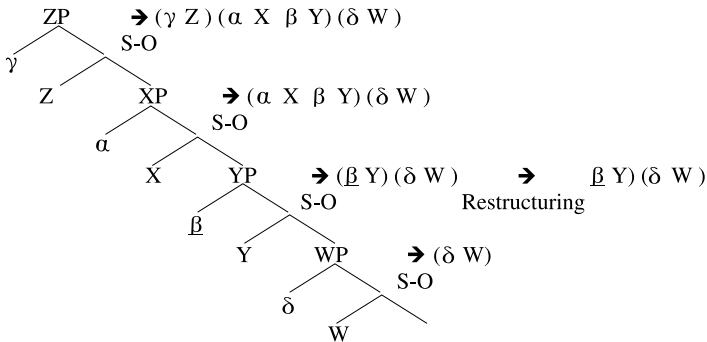
(22) *Spell-Out of F deletes the bracket(s) on its right.*



First, WP is spelled-out and a p-phrase (δ W) is created. Second, YP is spelled-out, and a p-phrase (β Y) is created. Third, XP, which contains a focused α , is spelled-out, resulting in a p-phrase (α X). At this point, the existing p-phrase boundaries undergo restructuring because of the focused α . If the restructuring applies in accordance with (21a), we obtain (α X β Y) (δ W). If it applies in accordance with (21b), we obtain (α X β Y δ W). Fourth, ZP is spelled-out, resulting in a p-phrase (γ Z). Note that at this point, the focused α cannot affect the p-phrasing that results from S-O of ZP because restructuring induced by α has already taken place in the earlier stage.

Let us next consider (21c). Suppose that β is focused in (23):

(23) *Spell-Out of F deletes the left boundary.*



The derivation of (23) proceeds as follows: First, WP is spelled-out and a p-phrase (δ W) is formed. Second, YP is spelled-out and (β Y) is formed. Since β is focused, the left

boundary is deleted at this point.¹ Third, XP is spelled-out and the left boundary is created. Then, a p-phrase (α X β Y) results. I assume that it does not result in two p-phrases (α X) and (β Y) because of a certain economy condition that prevents an unmotivated insertion of a p-phrase boundary.² That is, we can get a legitimate phonological phrasing that satisfies EXHAUSTIVITY without inserting an additional p-phrase boundary. Fourth, ZP is spelled-out, resulting in a p-phrase (γ Z). Note that since the p-phrases are created and modified as S-O applies, it is impossible for F in β to affect the p-phrasing that results from S-O of ZP which has not taken place when F is spelled-out.

As we have seen in the previous section, the restructuring (21a) is exemplified by Sandawe, (21b) by Hungarian, and (21c) by Italian.

4. Some Theoretical Implications and Conclusion

If the analysis presented so far is correct, the symmetry and asymmetry in (16), repeated below, are not just a coincidence.

(16) a. Symmetry: The restructuring triggered by F may have an effect on a left or right phonological boundary of a phonological phrase that contains F.

b. Asymmetry: The restructuring triggered by F may have an effect to the end of the sentence, but not to the beginning of the sentence.

(16a) and (16b) receive a principled account in terms of syntactic derivation and cyclic application of Spell-Out. Especially important is the asymmetry in (16b), or the non-existence of the restructuring to the beginning of the sentence. If phonological phrasing were formulated on the basis of syntactic representation, it would be surprising to have such asymmetry since the syntactic structure of a whole sentence, from the beginning to the end, should be available on a representation when the restructuring applies. That is, it would be equally possible to formulate the restructuring to the beginning as well as to the end in a representational approach. Also, if syntactic derivation goes from top to bottom, it would be predicted that the opposite of (16b) is correct since Spell-Out would apply from the top of the sentence: The phonological string that has been spelled-out before a focus F includes F and what precedes F, but not what follows F. Therefore, the asymmetry in (16b) argues for a bottom-up derivational approach to syntax.

1 Here, I assume that the effect of focus overrides the EXHAUSTIVITY requirement.

2 *P-PHRASE in the sense of Truckenbrodt(1999 228): Avoid p-phrases

*Acknowledgement

I would like to thank Chris Collins for discussing earlier ideas with me. I would also like to thank Ken Hiraiwa and two anonymous reviewers for valuable comments. I would also like to thank Christopher Bozek for suggesting stylistic improvements. All remaining errors are my own.

References

- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist Inquiries: the Framework. In Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka eds., *Step by Step*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001a. Derivation by Phase. In Michael Kenstowicz ed. *Ken Hale: a Life in Language*. pp.1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001b. Beyond Explanatory Adequacy. *MITOPL 20*. MIT.
- Collins, Chris. 2002. Eliminating labels. In Samuel David Epstein and T. Daniel Seely eds., *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*. pp.42-64.
- Dalgish, Gerard M. 1979. Subject Identification Strategies and Free Word Order: The Case of Sandawe. *Studies in African Linguistics* 10(3), pp.273-310
- Dempwolff, Otto. 1916. *Die Sandawe: Linguistisches und ethnographisches Material aus Deutsch-Ostafrika*. L. Friederichsen & CO.
- Dobashi, Yoshihito. 2003. *Phonological Phrasing and Syntactic Derivation*. Ph.D. Dissertation. Cornell University.
- Eaton, Helen Catherine. 2002. *The Grammar of Focus in Sandawe*. Ph.D. Dissertation. The University of Reading.
- Elderkin, Edward D. 1989. *The Significance and Origin of the Use of Pitch in Sandawe*. Ph.D. Dissertation. University of York.
- Epstein, Samuel David, Erich M. Groat, Ruriko Kawashima, and Hisatsugu Kitahara. 1998. *A Derivational Approach to Syntactic Relations*. New York and Oxford: Oxford University Press.
- Frascarelli, Mara. 2000. *The Syntax-Phonology Interface in Focus and Topic Constructions in Italian*. Dordrecht: Kluwer.
- Frota, Sónia. 2000. *Prosody and Focus in European Portuguese: Phonological Phrasing and Intonation*. Garland.
- Halle, Morris and William Idsardi 1995. General Properties of Stress and Metrical Structure. In John A. Goldsmith ed., *The Handbook of Phonological Theory*. pp.403-443. Blackwell

- Inkelas, Sharon, and Draga Zec, eds. 1990. *The Phonology-Syntax Connection*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kagaya, Ryohei. 1990. Jiyuu Gojun Gengo deno Gojun Seegen --Sandawe-go no Baai. *Ajia-Afurika Gengo Bunka Genkyuu* 40. pp.1-12. (Restriction on Word Order of Free Word Order Language --The Case of The Sandawe Language--. *Journal of Asian and African Studies* 40)
- Kanerva, Jonni M. 1990. Focusing on Phonological Phrases in Chichewa. In Inkelas and Zec eds. (1990). pp.145-161.
- Kayne, Richard. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kenesei, István and Irene Vogel. 1989. Prosodic Phonology in Hungarian. *Acta Linguistica Hungarica*, 39(1-4), pp.149-193.
- Kidima, Lukowa. 1990. Tone and Syntax in Kiyaka. In Inkelas and Zec eds. (1990). 195-216.
- Kidima, Lukowa. 1991. *Tone and Accent in KiYaka*. Ph.D. Dissertation. UCLA.
- Nagahara, Hiroyuki. 1994. *Phonological Phrasing in Japanese*. Doctoral dissertation, University of California, Los Angeles.
- Nespor, Marina, and Irene Vogel. 1986. *Prosodic Phonology*. Dordrecht: Foris.
- Seidl, Amanda. 2001. *Minimal Indirect Reference: A Theory of the Syntax-Phonology Interface*. New York and London: Routledge.
- Truckenbrodt, Hubert 1995. Phonological Phrases: their Relation to Syntax, Focus, and Prominence. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Truckenbrodt, Hubert 1999. On the Relation between Syntactic Phrases and Phonological Phrases. *Linguistic Inquiry* 30, pp.219-255.
- Uriagereka, Juan. 1999. Multiple Spell-Out. *Working Minimalism*. eds. Samuel Epstein and Norbert Hornstein. 251-282. Cambridge, Mass. MIT Press.

サムユエル・ダニエルの *Delia* と <目> のイメージ

鳴島 史之

Samuel Daniel's *Delia* and the Imagery of Eyes

Fumiyuki NARUSHIMA

Abstract

This paper compares Samuel Daniel's sonnet sequence, *Delia*, to Shakespeare's *Sonnets*. Petrarch's influence is remarkable in Daniel's works, but it is not developed well enough to dominate the whole sequence. Instead, the association of sound governs Daniel's poetry, to the extent that it makes the visualization of his poems difficult. This characteristic greatly distinguishes his poetry from that of Shakespeare's or Rimbaud's.

*Delia*のテキストには冒頭のソネットからeyesという語が散在するが、特に3番では、一連のエリザベス朝特有のイメージ群が連なっている。なお、論文を通じて、引用部分の下線はすべて筆者のものである。

If so it hap this of-spring of my care,
These fatall Antheames, sad and mornefull Songes:
Come to their view, who like afflicted are;
Let them yet sigh their owne, and mone my wrongs.

But vntouch'd harts, with vnaffected eye,
Approch not to behold so great distresse:
Cleer-sighted you, soone note what is awry,
Whilst blinded ones mine errours neuer gesse.
You blinded soules whom youth and errours lead,
You outcast Eglets, dazled with your sunne:
Ah you, and none but you my sorrowes read,
You best can iudge the wrongs that she hath dunne.

That she hath doone, the motiue of my paine;

Who whilst I loue, doth kill me with disdaine.¹

ここでの ‘vnaffected eye’ (5) とは、恋に取り憑かれていない<目>という意味であろう。そして、その<炯眼> (‘Clear-sighted’ (7)) の持ち主の「読者」は、別の種類の「読者」(‘blinded ones’ (8) または‘You blinded soules’ (9)) と対置される。この「別の読者」はCupidの矢の影響で<盲目>である。また、当時の迷信で<太陽>を直視できるとされた<驚>の力を未だ持つことができない子供 ‘Eglets’ (9) であり、自身の<太陽> (すなわち、愛する女性という存在) の力で幻惑されている。

‘harts’ (5) は、ダニエルのスプリングで、当然『十二夜』(一幕一場)のhart-heartのようなpunを前提にしている。後述するように、5番のソネットに至ると、Dianaのエピソードが導入されるわけで、「鹿」は重要なイメージである。そう考えると、ここには引用しなかったが、1番、2番のソネットの両方に、deere (意味は「高価な、いとしい」) という語が、eyesの周辺に出現するが、deer-dearのpunに触発されて出てきたと考えられる。

‘of-spring’ (1) は、直前の2番のソネットでミネルバが母親を介さず誕生したことへの言及があるので、(‘Goe wailing verse, the infants of my loue, / *Minerua*-like, brought foorth without a Mother’(1-2,)) その関連でいくと「子孫」の意であるが、Dianaが湯浴するのが森の泉であってみれば、springという語の持つ「泉」と「発生源」さらには「芽吹く」や「若枝」の意義も、詩の生成に関わったと思われ興味深い。

結論的には、3番のソネットでは、つれない恋人は詩人を<殺す>のであるが、シェイクスピアの場合と違って、この詩では、直接的に<目>が殺すというイメージには至らない。

4番のソネットにおいて、‘No Bayes I seeke to deck my mourning brow, / O cleer-eyde Rector of the holie Hill’ (9-10) とある。ここでは、Bayの意味は、直接には「月桂樹」であるが、「赤茶色」すなわち「鹿毛」の意味もあることに気付けば、連想のつながり

*本論考は、本来、「シェイクスピアの<目>のイメージに関する研究(8)」として、筆者の連載論文の継続部分を成すはずであったが、掲載紙が廃止され、別名称でリニューアルされたことを機に、新たな論文名を付け、新規の出発点とする。

継続中の論文の全体の構成は、第一章で、Shakespeareの*Sonnets*に現れるeyesという語に関するイメージの諸問題を提示し、第二章で、Shakespeareと他のエリザベス朝の*Sonnets*作家との比較を行い、第三章において、Shakespeareの他の劇作品を扱う、となっている。

本稿では、Samuel Danielのソネット連作*Delia*における<目>のイメージを、シェイクスピア作品のそれと比較しつつ分析する。連載ではペトラルカ、フィリップ・シドニーに続いて、第2章第3節となる部分であった。なお、継続している部分に関しては、あえてそれを訂正せずに提出している。

1 Danielからの引用は、*Poems and A Defence of Ryme*, ed. Arthur Colby Sprague (Chicago and London: University of Chicago Press, 1972) による。

は明らかだ。さらに、「獵犬が獲物を追うほえ声」に「窮地」に立たされるアクタイオンの運命を予感させる。また、「山ふところ」や「平坦地」の意も生きてはいる。

5番のソネットに至ると、

Whilst youth and error led my wandring minde,
 And set my thoughts in heedeles waies to range:
 All vnawares a Goddessse chaste I finde,
Diana-like, to worke my suddaine change.
 For her no sooner had my view bewrayd,
 But with disdaine to see me in that place:
 With fairest hand, the sweet vnkindest maide,
 Castes water-cold disdaine vpon my face.
 Which turn'd my sport into a Harts dispaire,
 Which still is chac'd, whilst I haue any breath,
 By mine owne thoughts: set on me by my faire,
 My thoughts like houndes, pursue me to my death.
 Those that I fostred of mine owne accord,
 Are made by her to murder thus their Lord.

Diana (4) という語から明らかなように、hartはActaeonのイメージを持ち始める。‘Harts’ (9) は大文字になっていて、punが強く意識されていたことが窺える。ここでのように、ダニエルにとって<死>とは八つ裂きにされるhart (heart)であって、その場合、バジリスクのイメージのように、<目>が直接に殺すわけではない。このようにダニエルの抱く<死>のイメージは、シェイクスピアのそれとは多少異なるようである。少なくとも、この冒頭の数篇の詩に限ってみれば。

ソネット6番において、‘although her eyes are sunny’ (2) とeyes = sunが成立する。また、‘Her Smiles are lightning’ (3) であるから、世界は彼女を見つめる<驚きの目>である(‘The wonder of all eyes that looke vpon her’ (7))。7番では、世間の<目>は検閲の目となってダニエルを監視し、作者の恋愛が拒絶される様は犯罪者のそれである。

Then had no Censors eye these lines suruaide,
 Nor grauer browes haue iudg'd my Muse so vaine;
 No sunne my blush and errour had bewraide,
 Nor yet the world had heard of such disdaine. (7. 5-8)

8 番でも 9 番でも eyes = hart で ('And you mine eyes the agent of my hart' (8. 5), 'Teares in my eyes, and sorrowe at my hart. / If this be loue, to liue a liuing death' (9. 12-13))、<鹿>の意味はない。後者では、<死>は<目>の近くにあらわれるが、直接に結びつくことはない。

10 番では恋人の目に死の宣告を読む。'For her the cruell faire, within whose brow / I written finde the sentence of my death' (2-3). harte は eyes のそばに現れるが (10-11)、「鹿」の意味はない。

12 番で、詩人は高揚し、空を求めるが、実際は恋人の手の内に閉じ込められる。

My spotles loue houuers with white wings,
About the temple of the proudest frame:
Where blaze those lights fayrest of earthly things,
Which cleere our clouded world with brightest flame.
M'ambitious thoughts confined in her face,
Affect no honour, but what she can giue mee:
My hopes doe rest in limits of her grace,
I weygh no comfort vnlesse she releuee mee.
For she that can my hart imparadize,
Holdes in her fairest hand what deerest is:
My fortunes wheele, the circle of her eyes,
Whose rowling grace deigne once a turne of blis.
All my liues sweete consists in her alone,
So much I loue the most vnloving one.

'hart' (9) が現れ、それは 'deere' (10) の近辺にあり、punの影響が窺える。そして恋人の<目>は運命の轍となる (11)。これはとてもユニークなダニエル特有の表現である。13 番では、詩人は自らをピュグマリオンに譬える。

Behold what happe *Pigmaleon* had to frame,
And carue his proper grieffe vpon a stone:
My heauie fortune is much like the same,
I worke on Flint, and that's the cause I mone.
For haples loe euen with mine owne desires,
I figured on the table of my harte,

The fayrest forme, the worldes eye admires,
 And so did perish by my proper arte.
 And still I toile, to chaunge the marble brest
 Of her, whose sweetest grace I doe adore:
 Yet cannot finde her breathe vnto my rest,
 Hard is her hart and woe is me therefore.
 O happie he that ioy'd his stone and arte,
 Vnhappy I to loue a stony harte.

世界の<目>が賞賛する美しき型 'fayrest forme' (7) を心中に宿らせることのみを希求する。石を手にしたピュグマリオンは幸福であったが、石の心を愛する自分は悲しい。14番。詩人は女の髪に絡め取られ、恋の炎に焼かれ、瞳が放つ矢に射られる。

Those amber locks, are those same nets my deere,
 Wherewith my libertie thou didst surprize:
 Loue was the flame, that fired me so neere,
 The darte transpearsing, were those Christall eyes. (1-4)

dart = eyesは、言うまでもなく、ペトラルカ的イメージである。そして、このイメージをシェイクスピアはあまり多用せず、そこに伝統に対して異端としてあり続けたシェイクスピアの存在があることを、拙稿「シェイクスピアの<目>のイメージに関する研究(4)」の中で指摘した。²

ペトラルカ的イメージに関して詳しくは、上記拙稿で詳述したが、ここでは明確にするために、『カンツォニエーレ』より例示する。

Per fare una leggiadra sua vendetta
 et punire in un dí ben mille offese,
 celatamente Amor l'arco riprese,
 come huom ch'a nocer luogo et tempo aspetta.

Era la mia virtute al cor ristretta
 per far ivi et ne gli occhi sue difese,

2 『北見工業大学研究報告』 第23巻 第一号、1991。

quando 'l colpo mortal là giú discese
ove solea spuntarsi ogni saetta:

(Francesco Petrarca, *Rerum Vulgarium Fragmenta*, sonetto 2. 1-8)³

「美しき復讐のため、そして一日で千の無礼を罰しようと、密かにアモールは弓を再び取り、傷つける所と時を待つ人のように。わたしの勇気を小さな胸に集め、彼女の目にここここで抗おうと、瀕死の深手はそこに既に下り、すべての矢先を折るのを常とす。」(拙訳)となる。ここに現れるアモール(キューピッド)、弓、矢、心臓、目、痛手、死といった一連のイメージ群を、便宜的にペトルカ力的と称しているのである。

15番のソネットにおいて、eyesはlyesと押韻する。ダニエルのソネット集中、eyesはlyesと押韻することが一番多く(22. 10-12, 38. 5-7, 44. 1-3, 46. 5-7)、それ以外は、-iseか-ize語尾の語との韻が次ぐ。diesとの韻に至っては、ソネット集の末尾に置かれたOdeがeyesとdiesで押韻して終了する以外は行末に現れない。シェイクスピアのソネットにおいて、eyeとdieは押韻した(9.1-3, 25. 6-8)。この*Delia*の例は、音韻的側面からいうと、ダニエルにとっては例外的な事象である。

それはつまり、拙稿「シェイクスピアの<目>のイメージに関する研究(1)」で展開した通り、⁴詩人の精神が音声面に奪われていると同時に、やはり言葉の持つ意味はしぶとくその語にしがみつき、単なる音の羅列に統制をかけて結びつける。その音声・意義の両方の意味で、シェイクスピアにとって、<目>と<死>はどうしてもなく<近い>のである。きっかけは音声によって与えられる。しかし、語がむすびついて一定のまとまりを形成するのは、意味を介してなのである。

17番では、再びeyesはhartと接近するが('Her eyes exact it, though her hart disdaines mee'(6))、もう<鹿>の意味はない。従って、Dianaにまわりついてきたような<視姦>のイメージも失せた。つまり、イメジャリーまたは視覚的なアレゴリーによる結びつきは薄くなったようだ。その結果、残るのは<見た目>と<実体>の葛藤である。愛すべき者の実体を描ききれない詩人の歯がゆさは、phallicなイメージを持つ次の2行に集約される。'Still must I whet my younge desires abated, / Vppon the Flint of such a hart rebelling'(9-10)。男性の力と精力の象徴である剣は、女の頑なな心で矯められ、impotentになる。

イメージの貧困に窮していたのは、詩人本人であつたらしく、次の18番になって、ダニエルは突然、さまざまな固有名詞を提出し、単調に沈みそうな詩編を今一度盛り

3 ペトルカルのテキストは、Webからダウンロードした(<http://www.italica.it/canzoniere.html>)。因みに、『カンツォニエーレ』の翻訳(池田廉訳、名古屋大学出版会、1992)を参考にした。

4 『北見工業大学研究報告』第19巻 第2号、1988。

上げようと試みる。

Restore thy tresses to the golden Ore,
 Yeelde *Cithereas* sonne those Arkes of loue;
 Bequeath the heauens the starres that I adore,
 And to th' Orient do thy Pearles remoue.
 Yeelde thy hands pride vnto th' yuory whight,
 T' *Arabian* odors giue thy breathing sweete:
 Restore thy blush vnto *Aurora* bright,
 To *Thetis* giue the honour of thy feete.
 Let *Venus* haue thy graces, her resign'd,
 And thy sweete voyce giue backe vnto the Spheares:
 But yet restore thy feare and cruell minde,
 To *Hyrcean* Tygers, and to ruthles Beares.
 Yeelde to the Marble thy hard hart againe;
 So shalt thou cease to plague, and I to paine.

ミルトンの描く地獄の様にわれわれが恐怖する一因が、彼が用いる固有名詞の数々であってみれば、こういった方法は、われわれにそれほど馴染みのないものではない。

*Cithereas*と*Hyrcean*以外は見当が付く。このうち、後者は、『マクベス』3幕4場に現れる。マクベスは*Hyrcean tiger*すらも直視できるが、バンクオーの亡霊には耐えられないと言うのだ。⁵ オーロラにしてもアラビアにしても、その属性が話題になる。(それにしても、視覚・聴覚・嗅覚・触覚に訴える詩題は見事だ。)他の作家の例では、Thomas Goffeの*The Courageous Turk*に '*Hyrceanian Beares*' (4. 3. 3)⁶がある。

問題は*Cithereas*だ。*Cytherea*はAphroditeすなわち*Venus*のことであり、その息子とはCupidのことであり、この*Cytherea*という語は、Ben Jonsonも*Cynthia's Revels*の中で使っている。'Cup. No, but a straight shaft in his bosom, I'll promise him, if I am *Cytherea's* son' (2. 3. 139-40.)⁷ *Cytherea*は『じゃじゃ馬馴らし』にも出る。'And *Cytherea* all in sedges hid' (Induction 2. 50.)⁸ アドニスとの邂逅のコンテキストである。Chaucerは*Knight's*

5 シェイクスピアからの例は、他に、"tigers of Hyrcania" (3H6, 1. 4. 156), "the Hyrcanian beast" (*Hamlet*, 2. 2. 452)などがある。

6 Thomas Goffe, *The Courageous Turk and the Raging Turk*, ed. David Carnegie (Malone Society Reprints, 1974).

7 *The Complete Plays of Ben Jonson*, eds. C.H. Herford and Percy Simpson, (Clarendon Press, 1986; v. 4).

8 シェイクスピアの引用は、*William Shakespeare, The Complete Works*, eds. Stanley Wells and Gary Taylor (Oxford UP, 1986) による。

*Tale*で数カ所 (ll. 1936, 2215, & 2223)⁹ この語を使い、Spenserは*Faerie Queene*の第3巻第6 Canto 20 節 1 行で使っている。¹⁰

以上のように、CythereaがVenusであり、その息子Cupidの属性が今話題となっているとすれば、‘those Arkes of loue’ (2) とはarcつまり弓のことであり、ここで再びペトルカ的イメージが出てくる。

決定的な事実としてのイメージの貧困。これはシェイクスピア以外の詩人・作家なら誰も悩んだことであろう。ダニエルもまた、詩句を容易に視覚化できていない。つまり彼の言葉はイメージを喚起する力が希薄だ。われわれが他の作家の詩を読むとき、何とはなしに感じる詩の力の弱さ、詩人のイメージを展開する弱さは、イメージの喚起力の不足に依るところが大きい。シェイクスピアほどのイメージの喚起力をもつ詩人として、筆者は他には象徴主義の詩人Arthur Rimbaud以外には知らない。特に、「母音」あるいは「大洪水後」における言葉の視覚化である。逆の言い方をすると、ダダイズムまたはシュルレアリズムには至らないまでも、イメージ同士がバラバラに出てくるときがあったとしても、それぞれの語のイメージ喚起力が非常に強力であるが故、イメージ同士は溶解し、融合し、固定し、定着する。

例えば、『マクベス』に出てくる疾風にまたがる天使を見てみよう。

... that his virtues
 Will plead like angels, trumpet-tongued against
 The deep damnation of his taking-off;
 And pity, like a naked new-born babe,
 Striding the blast, or heaven's cherubin, horsed
 Upon the sightless couriers of the air,
 Shall blow the horrid deed in every eye
 That tears shall drown the wind. . . . (1. 7. 18-25)

陰惨な場面に天使の姿は本来、似つかわしくはない。しかし、それでも、この子供あるいは天使のイメージは、『マクベス』という芝居全体を支配する重要なイメージとなっている。それは、あるいはマクベス夫人の発する赤ん坊殺しに関する決意がそう

9 *The Riverside Chaucer*, ed. Larry D. Benson (Boston: Houghton Mifflin, 1987).

10 *The Works of Edmund Spenser*, eds. E. Greenlaw, C. G. Osgood, F. M. Padelford, & R. Heffner, 11 vols. (Baltimore: The Johns Hopkins Pr., 1932-57), iii. 因みに、commentaryにおいて、Lotspeichを根拠に、語源をCythera島またはCytheron山に探っている。(p.254)

させるのかもしれない。あるいは、マクベスに子供が居ないから、あるいは魔女たちの予言の中に出る赤ん坊のイメージそのもののせいかもしれない。または、フリーアンズが逃げのびて、国王の系図がバンクォーに繋がる赤ん坊の列で示されることにながしかの実証性が存在するからかもしれない。とにかく、赤ん坊はこの芝居では重要である。¹¹

その重要なイメージは、この場面でうまく定着している。それは、イメージャリーの力が強いが故である。まず、視覚化されるのはvirtuesである。この、君主殺しを告げる天使たちの姿が、黙示録第8章における7つのラッパに言及しているのは、明白である。黙示録には、世界の3分の1の人類を滅ぼすために7つのラッパが鳴らされるのだが、それでも人類は悪事を改めなかったとある。

‘virtues’ (18) という抽象語が ‘angels’ (19) に喩えられているのは、擬人法ということに納得できる。しかし、本来は視覚的な手法である比喩あるいは擬人化が、ここでは ‘plead’ (19) という動詞の選択により、聴覚的な定着を起こすのだ。ラッパ (‘trumpet’) がイメージとして目に見えることは、一向に構わない。それは通例の比喩の手法だ。しかし、シェイクスピアの偉大なところは、その比喩が音を発することだ。

同様に、赤ん坊に擬人化された ‘pity’ (21) を支配する述部は、 ‘blow the horrid deed in every eye’ (24) であり、 ‘blow’ は、この語が「乱打」という名詞、あるいは「花咲く」という意味を持つ関連から、ここでは「突然現前させる」という視覚のイメージも持つが、ラッパのイメージの直後に現れることで、本来の意味の「吹き付ける、音を鳴らす」という意味は拭い去れない。このように、ランボーが目指した共感覚・五感の混乱は、マクベスの一場面のみごとに成功していると考えられる。このように、大詩人たちにあってみれば、音は視覚化できるのである。

ダニエルに戻ろう。18番の冒頭で、Restoreと奮い立たせるのは、もちろんDeliaに対する恋心である。しかし、ここではメタ的な視点に立って、詩人自身の詩心を奮い立たせると、とりたい。

続く19番。

If Beautie thus be clouded with a frowne,
That pittie shines no comfort to my blis:
And vapors of disdaine so ouergrowne,

11 この部分の議論に関しては、Cleanth Brooks, ‘The Naked Babe and the Cloak of Manliness’ in *The Well Wrought Urn* (New York: Harcourt, 1947), 22-49 参照。

That my liues light thus wholly darkened is.

Why should I more molest the world with cryes?

The ayre with sighes, the earth belowe with teares?

Since I liue hatefull to those ruthlesse eyes,

Vexing with vntun'd moane, her daintie eaes.

If I haue lou'd her deerer then my breath,

My breath that calls the heauens so witnes it:

And still must holde her deere till after death.

And if that all this cannot moue a whit;

Yet let her say that she hath doone me wrong,

To vse me thus and knowe I lou'd so long.

まず、'cryes' (5) は「泣く、嘆く」という意味によって、また音によって 'sighes' (6) と結びつく。その韻は 'eyes' (7) まで下る。'teares' (6) と 'eaes' (8) は韻により呼応すると同時に、'cryes' と 'sighes' の意味である「嘆き」が収束する場としての位置（結果としての「流れ出る涙」「ため息の届く耳元」）という場を占める。ここに見えるのは、原初的には四大元素あるいは四つの体液の乱れ、混乱である。四大元素の各要素

涙の「水」、ため息あるいは 'breath' (9) も含めた「空気」 ('ayre' (6))、そして「火」自体は存在していないが 'shines' (2) から前提される太陽の光 'light' (4) が、そして 'earth' (6) または「土塊」となった「屍」 'death' (11) が登場する。

乱れ、と呼んだが、実はそれほど混乱はなく、整然としている。そう、不可解に整然と。それは詩を活性化させない凶凶のようなものの故である。breathがdeathと押韻するのはいい。問題は、'deere' (9, 11) なのだ。あいかわらず鹿なのだ。約20の詩編を経由しても、まだhartに回帰してしまうのだ。イメージの貧困は決定的である。詩人の格闘も虚しく。詩人にとって新鮮と思われた対比（生と死、breathとdeath、後述するtombとwomb）は、結局、通り一遍の詩想、単なる言い古された言い回しに過ぎないのか。

しかし、詩編全体の転機は訪れる。その際、Deliaには新たな人格が要請される。それは残酷な人格、暴君のものである。21番で、Deliaは詩人には「暴君」と映る。ここで、詩集のこのあたりに出てくる[ai]という音の響きを迎ってみたい。

それは20番から続いている。

Whilst I did builde my fortune in her eyes,

And laide my liues rest on so faire a face;

That rest I lost, my loue, my life and all,
So high attempts to lowe disgraces fall. (11-14)

そして 21 番。

These sorrowing sighes, the smoakes of mine annoy;
These teares, which heate of sacred flame distils;
Are these due tributes that faith dooth pay
Vnto the tyrant; whose vnkindnes kills.
I sacrifize my youth, and blooming yeares,
At her proud feete, and she respects not it:
My flower vn timers's withred with my teares,
And winter woes, for spring of youth vnfit. (1-8)

詩人は、自分の安堵、‘my liues rest’ (20. 12) を彼女の ‘eyes’ (11) に賭けるのだが、その ‘high’ (14) な試みは地に落ちる。なぜなら、こうした溜息 ‘sighes’ (21. 1) は暴君 ‘tyrant’ (4) に向けられているのであり、その ‘vnkindnes’ (4) は私を ‘sacrifize’ (5) し、私の花は ‘untimely’ (7) に枯れる。ほとんどの重要な語に[ai]という音が現れる。こうした音のつながりは、ただ偶然に起こっているわけではない。あるいは無意識的にもかもしれないが、これはDanielが音のつながりに支配されている瞬間なのである。こういったことが詩に与える影響の重要性を述べているのである。なぜなら、詩とは文字通りの言語芸術であり、各言語ごとにその成り立ちを異にするのである。今、英語で書かれているこの詩は、他言語に翻訳した時に正しく機能しない。それは、この詩の創作過程にあった言語間のつながりが捨て去られるからであり、そうした翻訳を鑑賞しても、その魅力の大半は失っているからだ。

さらに、音韻が結びつけるイメージの羅列に着目しよう。暴君、犠牲、時至らず散る花は、それぞれ個別には存在できない。バラバラである。それらをつなぎ止めるのが、音韻であり、それが故に、単純に言えば、安心して読める。

その後の詩群でも、eyeの周りには、sun, hart, tyrantなどの既出のイメージが頻出する。sunneは23. 6, 27. 8, 44. 5に出る。いずれの場合も、前後5行以内にはeyeが現れる。27番では、イカロスのイメージが出るが、それからあまり発展しないで終わる。

hartに関しては、23番から4編続けて(23. 12, 24. 2, 6, 12, 25. 2, 26. 1)登場し、これらに詩にはeyeが存在する。逆に、31番から34番の同じく4編の連続した詩において、hartはいっさい出てこないし、eyeも使われない。これはeyeとhartがダニエルの意識の

中で密接に結びついていることの、ひとつの証左であると考えられる。

tyrantに関しては、24. 10, 26. 10, 30. 7に出る。30 番の詩以外には、eyeが登場する。しかし、この詩が重要であると考えられるのは、以下の理由からである。

28 番の詩の最後は、‘Her sight contented thus to see me spill, / Fram’d my desires fit for her eyes to kill’ (13-14) と終わる。ここへ来て、殺人者Deliaが確立するわけである。次の29 番も4 行目に‘murdering eyes’とある。冒頭の詩から、秘められ続けてきた、恋人のバジリスク化、メドゥーサへの変容は、ここに完成する。そして、30 番では

Then beautie, now the burthen of my song,
Whose glorious blaze the world dooth so admire;
Must yeeld vp all to tyrant Times desire:
Then fade those flowres which deckt her pride so long. (30. 5-8)

シェイクスピアの『ソネット集』の冒頭の詩群のテーマであった<時>の残酷な仕打ちが、ここでも取りあげられる。そして注目すべきは、この下線部の音韻を要にした語の結びつきである。この詩にはeyeという語は登場しないのだが、それでも、ここに至るまでにeyeと密接に関わってきたtyrantとtimeという単語同士が結びつくことによって、その登場しない<目>の特性を暗示し、引き出すという効果を持っていると考えられる。<美>がその徳を失うのは、<目>による評価を受けることによってである。それこそが、Father Timeの影響下にある人間存在すべての弱点なのだ。

ナルキッソスのように鏡に見入るDelia (29.10-14)は、ある意味でメドゥーサの一瞥も持っている。しかし、彼女が詩人を殺すと同時に、彼女自身もFather Timeによる変容を受け、自らが朽ちていく存在である。その対抗策として、自分の詩の永遠性を認めて、自分を省みて欲しい(子孫という不死鳥を生むというニュアンスもある)というのが、詩人の願いである。

前述したように、31 番から34 番までeyeもhartも姿を消す。そして、続く35 番にはeyeは登場しないのだが、hartは代わりにdieとともに現れるのだ。‘Thou canst not dye whilst any zeale abounde / In feeling harts, that can conceiue these lines’ (35. 1-2). <目>は、その座を<死>に明け渡したかのように、あるいは<死>との共存を望むかのように、その後の詩編には<死>の特性がeyeの周囲に現れる。実はこの‘Thou canst not dye’というフレーズは、直前の詩の最後の行のリフレインである。あたかもそのような希望が虚しいかのように、詩人の願いはただうつろに響くだけである。

36 番には‘intombe those eyes’ (11) という語句が使われ、次の詩ではさらに発展する。

Delia these eyes that so admireth thine,
 Haue seene those walles the which ambition reared,
 To checke the world, how they intombd haue lyen
 Within themselues; and on them ploughes haue eared. (37. 1-4)

この詩以降、eyesとlies (lyes)の関係が成立し、韻として使われる (38. 5-8, 44. 1-3, 46. 5-8)。そしてシェイクスピアも『ソネット集』冒頭で多用した、このeye-lieの韻が、ダニエルの*Delia*においても、以下に述べるような重要な意味をもつことになるのである。

45番のソネットにおいて、(一般的な、しかし一義的には詩人の)<目>は「眠り = <死>の兄弟」または<夜>と対比され、夢の後の醒めた理性を表すもの、闇の不正に惑わされない物として定義される。従って、この<目>は容易に「太陽」と結びつくのだ。

Care-charmer sleepe, sonne of the Sable night,
 Brother to death, in silent darknes borne:
 Relieue my languish, and restore the light,
With darke forgetting of my cares returne.
 And let the day be time enough to morne,
 The shipwrack of my ill-aduentred youth:
 Let waking eyes suffice to wayle theyr scorne,
 Without the torment of the nights vntruth.
 Cease dreames, th'ymagery of our day desires,
 To model forth the passions of the morrow:
 Neuer let rysing Sunne approue you lyers,
 To adde more grieffe to aggrauat my sorrow.
 Still let me sleepe, imbracing clowdes in vaine;
 And neuer wake, to feele the dayes disdayne.

4行目は、‘With darke, forgetting ...’と読むのか、それとも‘With darke-forgetting ...’と読むべきか、すぐには解らないが、ともかくも「闇により憂いの再来を忘れた」私の魂なり、「憂いの再来を暗闇へ忘れ去った」私の魂は、その現況の対照物である「醒めた目」の冷静を希求する。

そこに至る、第二連までの、おおかたの詩想を手繰れば、次のようになろうか。「眠り」、つまり<夜>の代弁者が、<昼>の対照物であることは、すでに一行目で示される。ハムレットを持ち出すまでもなく、正字法が確立する以前の英語において、son = sunであり、‘Sunne’ (11) は‘sonne’ (1) の「含意？」として先取りされている。

さらに、おなじくマクベスを出すまでもなく‘sleepe’ (1) は‘death’ (2) を連想させ、さらに、もっとも重要なことは、‘night’ (1) は‘light’ (3) と押韻している。この韻において何が重要かという点、そこに含まれている[ai]という響きの故である。前掲の拙稿¹²において、シェイクスピアのソネットの冒頭約 20 編ほどの詩群において、この[ai]の響きの多いことを論じ、それが結果としてeye, die, lie等の語の多用に至っていることを証明した。同じような詩作の状況が、今のダニエルに見受けられる。エリザベス朝の詩人たちは総じて、例えば、ロミオとジュリエットのような、lightとnightの押韻に弱い、つまり抗うことができない。

‘light’ (3) の音は、‘time’ (5) を經由し、(因みにtimeという語の重要性は、拙稿参照。¹³) ‘eyes’ (7) に至る。「日中は我が不幸なる若気の難破を咽び、醒めた目には存分に輕蔑を持ち嘆かせよ、夜の不実の苦しみなしに。」夜の苦しみとは、性愛の機縁、性欲の高ぶりであろう。‘nights’ (8) は再来する。韻の音を携えながら。

9 行目。日中の欲望(すなわち理性的なプラトニックな愛)の空想物にすぎない「夢」には、理性そのものの情熱を真に表すことはできない。「目覚めて、恋人にノーと言わせるな。」(11) 偽っている主体(‘you’(11))は、ここでDeliaなのか、「夢」なのか、わからないが、(実は両者は一致しているが、)「悲しみを増すのはやめにしてくれ。」(12)

さて、そこまで韻がついて来る。9 行目で、韻は消滅したかに見えて、文末の‘desires’に潜んでいる。その「欲望」とは、nightのlightすなわち「絶望の最中の希望」を求めるということであり、重要度はさらに増す。詩人は‘rysing Sunne’ (11) を希求し、‘lyers’ (11) を糾弾する。かくて、lyers「偽り人」は、Deliaあるいは「夢」つまりは出発点となった‘sleepe’ (1) の実体? と一体化する。

ここではひとつだけ、おかしいことが起こっている。あれほど追い求めた理性としての太陽、Deliaの実体である‘rysing Sunne’は、すなわち、夜の欲望の対象物であるDelia、つまり「夢」の中の登場人物と同一なのである。だから、‘rysing Sunne’は‘lyers’を糾弾しながら、実体の半分を夜の欲望によってかすめ取られている。‘Sunne’も理性としてのDeliaの実体、‘lyers’も魔性としてのDeliaの夢中の実体であれば、両者は引き離されるのではなく、結合する。そして、音韻はその接着剤の役目を果たす。Delia

12 「シェイクスピアの<目>のイメージに関する研究(1)」

13 同上

の光と闇は、‘rysing Sunne’=‘lyers’の一行において完成する。

eyesとlyesはこの詩の前後の詩（44番と46番）において押韻している。

Drawne with th’attractiue vertue of her eyes,
My toucht hart turns it to that happie cost:
My ioyfull North, where all my fortune lyes, ... (44. 1-3)

But I must sing of thee and those faire eyes,
Autentique shall my verse in time to come,
When yet th’vnborne shall say, loe where she lyes, ... (46. 5-7)

両者とも、一見、何の変哲もないただの押韻に聞こえるが、45番に関する筆者の分析の後で、これらの韻の重要性が解ってもらえると思う。韻は特性として独り立ちできない。韻は互いにもたれ掛かる。だから、そこに謎を解くヒントがある。韻は表面的には意味を顕わにしてくれない。だが、韻は周囲にもたれ、ヒントを残している。解くカギは、研ぎ澄まされた詩心があれば足りる。

だから、例えば、今の46番で、‘where she lyes’ (46. 7) とあるのを、通り一遍に「そこに存在する」と訳するのは、なるほど正しい。だが、直前の45番を読んできた者は、これを「そこで嘘をついている」と解釈する方が理にかなっていることだろう。だが、それだけではまだ足りない。45番（まで）で、‘Sunne’=‘eye’と定着された詩想をもってすれば、そして、‘death’に犯された‘night’の‘sonne’という45番の詩を読んだ後なら、なぜ‘th’vnborne’ (46. 7) が突然登場したのか、すぐに理解できなければ、読者の詩心が十分に熟成していることにはならない。さきほどの『マクベス』の天使を再び引用すれば、‘... The deep damnation of his taking-off. / And pity, like a naked newborn babe ...’ (*Macbeth*, 1. 7. 20-21) というように、エリザベス朝の精神には誕生と死はかくのごとく近い。まさにtombとwombは韻を踏むのである。エリザベス朝における死と誕生の近接については前出の拙稿参照。¹⁴

それにしても、やはりダニエルのイメージ化する力は弱い。彼の言葉は非常に観念的で、具象性に欠ける。誰も夜を、闇を、太陽を、眼前に思い浮かべることができない。絵が伴わなくて、映像性に欠ける。シェイクスピアはそれと違い、pityという抽象語が、風に跨って空を行くのをイメージ化する。マクベスが心に描く短剣すら、舞台上で目に見えるように演出される場合もある。シェイクスピアの詩学とは、具象的

14 「シェイクスピアの<目>のイメージに関する研究(1)」

で映像的なのだ。それはおそらくは彼が演劇界に居たからだろうが、それだけとも限らない。具象性を持つ詩と、抽象的に語る詩の、どちらが優れるという議論は愚かだろう。ただ、具象的なイメージを現前化させる詩学はわれわれを圧倒する。ランボアの「白い冰山」は、「笑う唇」は、具体的にわれわれに迫る。イメージ化の強い詩と、そうでない詩は、はっきりと別に存在する。

次の47番の具象性の欠如は、以上のことから当然のことのようである。ここでは楽器が出てきて、Deliaがつま弾く様が語られるが、一向にその姿が具象化できないのである。

Like as the Lute that ioyes or els dislikes,
 As is his arte that playes vpon the same:
 So sounds my Muse as she strikes,
 On my hart strings high tun'd vnto her fame.
 Her touch doth cause the warble of the sound,
 Which heere I yeeld in lamentable wise,
 A wailing deskant on the sweetest ground,
 Whose due reports giue honor to her eyes. (1-8)

シェイクスピアは違う。彼の詩には顔がある。顔が見えなくても、絵が現前する。

Mark how one string, sweet husband to another,
Strikes each in each by mutual ordering,
 Resembling sire and child and happy mother,
 Who all in one one pleasing note do sing; (Sonnet 8, 9-12)

私たちは、家族の団らんを目にするだろう。いわば、音楽は、絵柄を伴って、響いてくるだろう。使っている道具、つまり絵の具である単語そのものは、ダニエルとシェイクスピアは、そんなに変わりはない。‘sweet’であり、‘string’であり、‘strike’である。しかし、絵は異なる。しかたがない。絵描きの技量が異なるのだ。

最終詩 50 番。

My ioyes abortiue, perisht at their byrth,
 My cares long liu'de, and will not dye without mee.

This is my state, and *Delias* hart is such;

I say no more, I feare I said too much. (11-14)

誕生の瞬間に死に逝く恋心とは、まさにイギリスのエリザベス詩想の典型であろう。しかし、まだなお‘hart’(13)である。ダニエル自身の詩想は尽きている。したがって、「もう何も言うまい。」とは、「もうこれ以上書けない。」という詩人の詩作の限界の吐露であり、「多く言い過ぎたと恐れる。」とは、その逆の詩作の枯渇を歌ったものだと読める。確かに、50番という区切れはいい。しかし、区切れが良すぎないか？つまり、形だけ整えたお決まりの仕事に見える。(因みにこのソネット自体は、ダニエルが*Delia*を出版する前年、1591年に不正に刊行されたNewman版では、25番になっている。いずれにしても区切れが良すぎる。)「もう言い過ぎた」はもう策が尽きたという詩人の書斎での呟きと取れば、それなりに面白く読めると思われるのだが。

恋人 = 詩そのもの、という等式が成り立つソネット詩人たちのルールにあってみれば、「もう終わり」という宣言は、おそらく恋の終わり、詩の終わりを意味するだろう。なぜ、そうも早く詩を見限ったのか。このことは、ダニエルにとってのダークレディ探しにも通じる話題である。これらの*Delia*詩編が投げかけられた相手の女性は誰であろう？明確に答えられる者は居ないようだ。唯一の候補はこのソネット集が捧げられたペンブルック伯爵夫人メアリーであろうが、このような高位の、しかも先行するソネティアであるシドニーの妹に、本気で恋をするだろうか。これは一切を作り事と見なすに限る。

そうしてみると、ダニエルの*Delia*詩編とは、かなりその場限りの作品集で、結果として完成度が高くないことも、ある程度はやむを得ない。確かに、一時の煌めきを秘めた詩も見られるが、詩集として、統一されて居ず、繰り返しが多いのも事実である。人気作家ダニエルの多忙さから言っても、作品の不首尾はある程度予測できたことながら、一応、エリザベス朝ソネットの変遷を辿る本論においては避けては通れない作家であったことを申し添えて、小論は終わる。

追補

その1 Russ McDonaldによるOxford Shakespeare Topicsへの一巻*Shakespeare and the Art of Language*¹⁵の中に、なかなか重要な指摘がある。‘... almost no two people will agree on exactly what an image is and how it works in the word.’つまり、誰も「イメージ」

15 Oxford UP, 2001, 53.

という言葉に関して共通の認識がないと指摘しているわけだが、果たして、筆者が表題にも取り入れ、追求しているテーマに関して共通の理解が得られているだろうか、という疑念が湧く。

その2 Christopher Pyeの*The Vanishing*.¹⁶ 生皮を剥がれた画家の骸を手にする聖パーソロミューが描かれたMichelangeloの*Last Judgment*を表紙にし、各種Annunciation絵画の詳細な読みを提示するこの本の中で、Pyeは*King Lear*のDover Sceneに隠された、当時の〈視点〉と〈主体(subject)〉の関係に着目する。ドーヴァーから飛び降りたグロスターに対して、エドガーが語る〈巨眼のモンスター〉とはいったい誰なのか？ 崖の上にいたときには自分のことであったそのモンスターの主体はどこに消えたのか？ そしてモンスターの巨大な目で見ている先には何があるのか？ それはきっと時空を超えて四次元に存在している己の姿なのか？ 自らを省みる〈視点〉とは、かくのごとく恐ろしく、謎を秘めている。

16 Christopher Pye, *The Vanishing: Shakespeare, the Subject, and Early Modern Culture* (Durham: Duke UP, 2000), 93.

Melville's Quest for Art in *Typee*

Harumi HIRANO

Abstract

The rudiments of the *Typee* plot are two escapes: the narrator's flight from a whaling ship, and his running away from the native valley where he has sojourned, to another whaling ship. What furnish the tension of the story are the contradictory images of the native people: the Typees as noble savages and the Typees as ignoble fearsome cannibals. Most modern *Typee* interpretations are still on the lines of D. H. Lawrence, who expounds that the book shows Melville's aspiration for a primitive Eden and his final repudiation of it, for, Lawrence says, he finds the return to the past impossible and unbearable. But Melville does not intend such either-or reading, and under the disguise of an autobiography or a travelogue *Typee* has a more carefully worked out fictional construct than has been thought. Melville's description of the conflicting images is from the early 19th century American popular philosophical ideas which he incorporates into his fictional creation in the book. The characterization of the narrator is based on the symbolical use of Christian mythology. The ambiguity of the objects and their complex interaction with characters are Melville's characteristics, which are also found in his later works as well. We can see the genesis of this art in his first novel.

The distinct difference of the modern reading of Herman Melville's *Typee* from the contemporary one is its additional interest in understanding the book as having a thematic construct, that is, *Typee* is a book of art rather than a real travelogue. The biggest problem then is the constant wavering of the narrator as to the images of the native people: Are they noble savages or ignoble cannibals? Why does the narrator run away from the valley he zealously admires?' These questions lead to another controversial issue: Is the narrator pro-primitivism or pro-civilization?

At the time of publication the issue was its authenticity. A few reviewers did not hide their doubt about the author's being a common sailor, and particularly the English publisher Murray could not eradicate his suspicion of the fictitiousness of the book for a long time. So that Melville's brother Gansevoort who was acting on behalf of Herman in London had to assure Murray that "the

adventurer and the author were one and the same.”²

We know, however, from this vantage point that the narrator, the adventurer, and Melville, the author, are not one and the same. The former stays in Typee valley for nearly four months and the latter’s sojourn is four weeks. Yet the narrator is a character through which Melville experiences a series of adventures and examines their meanings, putting them in a literary form. He is Melville’s alter ego. It is through this narrator that readers can see Melville’s artistic development in his first novel

When Melville was revived in the early twentieth century after some decades of neglect, *Typee* was cited as a reliable source of anthropological studies by E.C. Craighill Handy. He was a member of the Marquesas party of the Bayard Dominick Expedition made to Polynesia in 1920-1921.³ Around the same time of Handy’s expedition, critical essays by D. H. Lawrence were published. His essay on *Typee* interpreted the inconsistency in the narrative as Melville’s strong desire for seeking an ideal paradise, his discovery of it and then his disappointment in it followed by his desertion from the paradise.⁴ Lawrence served as a precursor for *Typee* interpretation in the modern criticism and many critical essays have been written in variations on this theme.⁵

The publication of these works at the earliest stage of Melville’s revival symbolizes the ways *Typee* is studied in the twentieth century. I agree with John Samson that criticism of *Typee* tends to be either scholarship or interpretation, lacking the integration of the two: in other words, the integration of history and fiction.⁶ This tendency, however, is not without reason. The book is the amalgam of history and imagination but it refuses to create a unified image of a people and does not allow the kind of coherent explanation that the modern literary criticism tends to give. We must look at this novel from a different direction: its purpose is not unity but dividing and differentiation. If we examine the narrator’s wavering as not a fault of an immature writer but as a vital constituent of thematic construct, and if we can prove Melville is not altogether lost or random in pursuing the plot, we can get closer to what Melville intends in this book.

The question of primitivism is the basic subject. Since all of the authorized editions bear “A Peep at Polynesian Life” as a part of their sub-titles, the book is about the life of primitive and pagan people observed by a hasty traveler from the viewpoint of the civilized world.⁷ Peculiarities are most important. The narrator mentions two books that he thinks are worthy of notice: David Porter’s *Journal of a Cruise Made to the Pacific Ocean* and Charles S. Stewart’s *Journal of a Residence in the Sandwich Islands*. It is evident from his reading that Melville was well aware of the popular philosophical ideas of early nineteenth century America on South Sea

Islanders.⁸ They fall into distinctly different viewpoints on primitive people. Porter holds the belief in the tradition of Captain Cook and other explorers that Polynesians are honest and noble savages. Stewart, who speaks for missionaries, considers the Polynesians are sinners who should be saved by the light of God.⁹

Primitivism as a philosophy of history and a theory of values is one of the oldest and most tenacious ideas of western thinking.¹⁰ This is the belief that the condition of man and of society at the earliest stage of history was the best. Nature had the highest energies and was capable of producing better things. Men were innocent and perfect in their morality. History since then is the succession of degeneration from this remotest ideal model. Although primitivism of necessity induces one to look back to the past with nostalgia and acknowledge the present degenerated and weakened mankind and society, it also urges one to look forward into the future as well. If man and society had once been perfect, we can recover the same ideal state by returning to this original way of life and society. Thus past ideal conditions can be turned into a future goal.

The kind of primitivism that reached a climax in the eighteenth century comes from a strong sense that there is something wrong with civilized life: too much complexity, rivalry, desire, more art and less nature. A primitive man, on the other hand, acts according to a natural law which is based upon benevolence and compassion. Rousseau glorified with eloquence the goodness and happiness of the original state of man and his simple life. If modern man has been so degenerated due to vile practices and customs that he is no longer able to find goodness in himself, then an ideal model of man and life can be found among the contemporary "savage" people: they are innocent, good and benevolent and their life is filled with affection toward each other. Captain James Cook's three voyages which were carried out in the latter half of the eighteenth century had great influence upon later accounts of voyages and helped form the stereotype of the Polynesians as noble savages and children of nature in the minds of the nineteenth century American reading public.¹¹

The protestant missionaries who went to the South Seas with evangelical zeal reported a different image of the Polynesian. They did not hide their New England background in their appraisal of the islanders. To them Polynesia was not Eden but a sinful wilderness, and the natives existed in a deplorable sunken state. A derogatory description of Hawaiians by Reverend Hiram Bingham, the leader of the American Board of Missionaries, is cited by Strauss as follows: "The heathen are reckless of life, extremely poor from mere degradation of intellect; stupid to all that is lovely, grand, and awful in the works of God; low, naked, filthy, vile, and sensual; covered with every abomination and stained with blood."¹² More than anything else the missionaries considered cannibalism as a prime example of cruelty and immorality. They believed that

Polynesians must be encouraged to be elevated to a high standard of living, and that depended upon their spiritual transformation by the power of God. Evangelizing the pagans meant almost the same as civilizing them.¹³

The Polynesians in the minds of early nineteenth century America are the composite of two visions: the noble savages who live in an idyllic Eden and “depraved and polluted cannibals.”¹⁴ These are the contexts available for Melville to put a singular culture he witnesses into a recognizable terms to the reading public, specifically to the “fire-side people” who are interested in something “strange and romantic.”¹⁵ Melville highlights both of these visions, employing Christian myths when necessary, although he is sharply critical of Christian civilization and the work of missionaries.

I hereby suggest Melville’s strategy for dealing with the framework of the novel. He writes in the preface that “the author lost all knowledge of the days of the week” (xiv), inviting his readers not to be meticulous about specifying dates of the events he is to narrate. But close reading reveals that he is meticulous in his sequencing of events, change of phases in the course of narrator’s adventure and his altering frames of mind.

There are three main events that comprise the beginning, middle and the last parts: the first is the narrator’s plan of flight from the whaling ship *Dolly* and its execution, the second is a day in the middle of his stay in Typee valley on which he has a pleasurable excursion on the pond with Fayaway and soon after he meets Marnoo and is reminded of his frightful apprehensions of his fate, and the third event is the narrator’s escape from the valley to another whaler, *Julia*. Between the first and second there are three phases through which the narrator proceeds in chronological order: his wandering in the mountains for six days, his first month in the valley in an unhappy mood, and another month in a happy mood. Between the second and the third events there are two phases: his happy sojourn again for another month and then another unhappy sojourn for a month and ten days. It is very obvious that the narrator’s four and a half month stay on the island is segmented and arranged almost symmetrically. I must add that the narrator fears the natives during the days of his unhappy sojourn, and considers them noble and idle savage when he is in a happy mood, which lasts for two months, interrupted only for a short time on a day in the middle of his stay.¹⁶

The whole adventure is a round-trip not only because the narrator comes back to the almost identical place where he left: the sea and a whaler. He also returns to what he was: one who is fearful of the cannibalistic Typees. In chapter 4, the word, “Typee”, is introduced for the first time and we know that it signifies “a lover of human flesh” (24) and that of all the cannibal tribes the Typee alone is particularly connected with some revolting stories of its practice. The narrator

shudders at the mere thought of going ashore at their bay. The last month of his stay sees the verification of the rumors among the sailors. Horrified that he might someday be a victim, he seeks escape from this deadly valley. He is, at the end, what he previously was without any sign of development. Yet a deep and lasting impression we are left with after the first reading is not the negation but the affirmation of the almost physical reality of a happy innocent primitive people in an Eden-like valley.

The opening chapter, although its style is conversational, laconic and light, is the elaborate outline of perspectives Melville plans to reach in the following chapters: the ironical criticism of Christian civilization and the longing for the idyllic Polynesian world. The narrator is certainly Melville's alter ego but we should not forget that he is only a part of the writer. Melville as an author illustrates a world for the narrator to go through the real nature of which he does not fully understand.

Six months at sea! Yes, reader, as I live, six months out of sight of land; cruising after the sperm-whale beneath the scorching sun of the Line, and tossed on the billows of the wide-rolling Pacific—the sky above, the sea around, and nothing else! Weeks and weeks ago our fresh provisions were all exhausted. There is not a sweet potatoe left; not a single yam....

Oh! for a refreshing glimpse of one blade of grass—for a snuff at the fragrance of a handful of the loamy earth! Is there nothing fresh around us? Is there no green thing to be seen? Yes, the inside of our bulwarks is painted green; but what a vile and sickly hue it is, as if nothing bearing even the semblance of verdure could flourish this weary way from land. Even the bark that once clung to the wood we use for fuel has been gnawed off and devoured by the captain's pig; and so long ago, too, that the pig himself has in turn been devoured.(3)

Associated biblical episodes are conjured up in satirical and contradictory treatments. Noah's ark saves his family and the lives of every species of animal from the flood, while the members of this ship are exposed to the danger to their lives and its purpose is to catch and kill a particular type of animal. The sailors are deprived of all sorts of life-giving nature. The only green that comes in view is artificially painted green which looks abominable. Even an implicit cannibalism on the ship is jocularly related.

The narrator deplores the present situation rather light heartedly; but Melville presents the

dominating air of forlornness, want, desolation and loss of life in the society on board the ship. Here are a tyrannical captain and the sailors who are “a parcel of dastardly and mean-spirited wretches” (21). The captain is called “Lord of the plank” (21), and the contract the “Lord” closed with his men is no longer valid because it is He who fails to fulfill his share of the compact. All his men yearn to get to an island, and this is possible on the condition that the “Lord” devours the only living animal left, a cock that bears a biblical name Pedro, at a mock religious rite of the Last Supper.

Diametrically opposed and standing in sharp contrast to the ship which represents civilized society, the Marquesan island is meant as a place of abundance, verdure, and life, and also a place notorious for the practice of dreadful cannibalism—the devouring of human life. The sensational revitalizing experience the narrator has under the shade of “cocoa-nut trees” on his first landing makes him feel he is “floating in some new element” (28). The division of two worlds is furnished: one is the enlightened Christian world now in darkness, and the other is a dark savage world that seems to be bright and promising.

The much-discussed two images of Polynesians and the narrator’s wavering between them are introduced from the beginning, although they are not clear cut at first. When he is informed that the course of the ship is directed to the Marquesas, the image of the place springs up in his mind as follows.

"The Marquesas! What strange visions of outlandish things does the very name spirit up!
Naked houris cannibal banquets groves of cocoa-nut coal reefs tattooed chiefs
and bamboo temples; sunny valleys planted with bread-fruit-trees carved canoes
dancing on the flashing blue waters savage woodlands guarded by horrible idols
heathenish rites and human sacrifices.(5)

These are the initial ideas of the Marquesas embraced by the narrator. The mixed images of the islanders haunt him during the sea passage to the island, and in a way all the while he is on the island as well. But Melville carefully modulates the extent and depth of the images from vague and "jumbled anticipations"(5) at the outset, to more specific and material depictions with the development of the story. At this stage islanders and their culture are inseparably expressed in a cluster of words without any specific concomitant just as the narrator is no more than one of the unsatisfied sailors without an articulated name. We can, however, hear out of these jumbled anticipations a high note of longing for a strange, exotic, and romantic world.

The real adventures of the narrator start after his flight from the ship. According to Charles

Anderson, Typee valley is less than five miles from the bay of Nukuheva, which was then a last outpost of civilization, and it takes about four hours if one takes the same route the narrator and his associate Toby do.¹⁷ Melville extends the four hour walk to their six day wanderings, devoting four chapters to it, from six to nine. When he is on the Dolly, the narrator is an irresponsible meditator. His philosophy on primitive and civilized people which arises in his mind when he witnesses the ceremonial parley between a naked native king and a uniformed French admiral was not seriously mentioned. From the chapters set in the mountains, the relations of his thoughts and actions become strained.

After crossing a brook the narrator finds his flight altogether contrary to his expectations. His will and plan are no longer realized and only disappointments await him. Soon after their flight from the bay to a nearby mountain ridge through woods, the narrator and his associate Toby find their way blocked by tall yellow reeds. It seems they are confined in a prison with "so many rods of steel" (37). If the reference here is Dante's *Divine Comedy*, the brook they cross at the entrance is nothing more than the Acheron.¹⁸ The narrator and Toby take the same path as Dante and Virgil do. In fact Toby roars this is "an infernal place" (47). Fruit is nowhere to be found. The narrator flees from the dearth of wholesome food at sea to the prospective abundance of nature's bounty but ironically he ends up in real starvation. He suffers not only hunger but also bad weather: it is either cloudy or rainy and nights are freezing cold. Darkness hangs over the mountains. The two runaways scale many ridges which lead nowhere. This is a sphere where the narrator can not control himself or rather he is controlled by some unknown force. They lose sense of direction and think they are "fairly snared" (38).

While the pilgrims in *Divine Comedy* travel the world of the after-life, Melville's characters travel the before-life. Six day wandering corresponds to the time of creation in Genesis. Melville's application of Christian mythology serves to suggest that the narrator and Toby are running away not only from civilization but also from their present historical time. The heart of the mountains severs them from their former selves as well. Melville takes every opportunity to invest the narrator and Toby with the attributes of snakes that are about to crawl into Eden. Getting through a prison-like thicket, they climb up the mountain gliding through the grass like "a couple of serpents" (39) so that they are not observed by anyone. They are somehow deprived of their human nature: the cold, dark and dismal first night makes the narrator feel he is "unmanned" (46). To cap the metamorphosis the narrator suffers a strange pain in his leg which he suspects he has been bitten by "some venomous reptile," although he adds that "all the islands of Polynesia enjoy the reputation...of being free from the presence of any vipers" (48). Right after, the narrator, in a feverish condition chances to push aside a branch and finds himself looking on a beautiful valley

which can be likened to “the garden of Paradise”(49).

The narrator and Toby are given peculiar personalities and roles. The former, a man of knowledge and full of curiosity and proposer of the flight, plans it in detail, speculates about matters, makes decisions, and first glimpses the Eden-like valley, while the latter plays the role of the “body” of the former’s “brain,” taking actions according to his instructions. In representing Toby, Melville deliberately uses similes of animal behavior. Toby clears a brook “like a young roe” (37), he jumps down a cliff “with the activity of a squirrel” (45), and he awakens in the morning “as blithe and joyous as a young bird” (55) while the narrator suffers under unbearable pain. The distinction of the two is strikingly symbolical when the narrator reluctantly agrees to descend to the valley they have espied. They are desperately desirous of getting food and shelter from the natives while fearful of being eaten by the same cannibal tribe. The narrator recognizes his impotence in this paradoxical condition and, filled with apprehension, can no longer give instructions, as though robbed of his cleverness. For the first time Toby takes the initiative not as a result of deliberate intention but out of animal instinct.

“What’s to be done?” inquired I, rather dolefully.

“Descend into the same valley we descried yesterday,” rejoined Toby, with rapidity and loudness of utterance that almost led me to suspect that he had been slyly devouring the broad-side of an ox in some of the adjoining thickets. (56)

The dilemma the narrator faces here is whether the natives are “Happas” or “Typees,” meaning friends or enemies. It is a peculiar tradition in western seafaring history to classify islanders by this simple dichotomy. Since the age of global circumnavigation, the navigators, just as the narrator, needed to know, at their first encounter with unfamiliar islanders, whether the natives were friends or adversaries. Long term cruises far away from home countries compelled them to deprive the natives of their fresh water, vegetables and meat during their journey. If the natives accommodated the invaders with their requirements they were praised and called “friends.” The navigators’ final goal of declaring the island their possession may also have been well under way. A group was classified as being “hostile” when westerners were not welcomed to an island and their visit incurred a violent confrontation. The book Melville calls “a small volume entitled ‘Circumnavigation of the Globe’ ” provides us with ample examples of this peculiarity in the tradition of sea voyages in the past.¹⁹ It is, therefore, a twist of irony that the narrator decides to descend into the notorious enemy of sailors for food and shelter.

The parts of the story dealing with the mountains bear a heavy load of symbolism. The two

runaways decide, on the sixth day, to descend into an Eden-like valley they had descried on the previous day. The two are God-like in the way they behold the village and think it is very good, but at the same time they are Milton's Satan-like characters in hell plotting the opportunity to invade a newly-created world. This is still a lifeless place soon after the Creation: dark clouds brood over the interior of the island and the sun appears not once to light on the gloominess. In truth the narrator says, "The whole landscape seemed one unbroken solitude, the interior of the island having apparently been untenanted since the morning of creation" (44). No wonder they cannot find any fruit trees to sustain them. The creation is not yet completed. They are some strange beings that pass through the world of darkness to the expected bright world of life. This is also a place for those who have lost Paradise: food is not provided here unless one toils for it. The strange pain the narrator suffers unmistakably suggests the mark imprinted on fallen men. Then they are Adam before the Fall and Adam after the Fall as well.²⁰ The narrator thinks of himself as a common runaway sailor, but he is no longer so through Melville's ironic and paradoxical attitude to Adam and Eden. He is some unidentified multiple being that enters a mythical world.

The issue of representing the first month of their stay in the valley is that the situation presented by the narrator is not altogether the same as that which he perceives to be. The narrator carries out the function of separating the overall situation in which he is put, from the conditions under which he believes he is in: the former reflects Melville's vision, though rather obscurely and indirectly, and the latter indicates the narrator's limited vision. Here contradictory images of Typees correspond to these plural views. For example, the narrator says that the exchange of names signifies "ratification of good will and amity" (72) and the behavior of the natives which he sees indicates nothing but the kindness that is true to the agreement. But the narrator remains distressed because he is deeply suspicious of them, saying "Might it not be that beneath these fair appearances the islanders covered some perfidious design, and that their friendly reception of us might only precede some horrible catastrophe?" (76) The strange leg ailment, the mark of fallen man, relates strongly to his mental distress. Whenever he has suspicions, fear and a desire to escape, the condition becomes aggravated.

Appearances indicate that the narrator and the Typees establish a surer footing as time passes. Their apparently intimate relationship is the process of his initiation into their society. Having passed through the deathly wandering in the mountains, he is reborn as a new baby named "Tommo." The Typees treat and care for him as a little child. He says, "Kory-Kory...as if I were an infant, insisted upon feeding me with his own hands" (88). The fact he gives them a false name may be a symbolic act of hiding his real self but the false name serves him as a mask to wear to

signify a different self who enters into a new world. He is carried to a stream and forced to take a bath in the mode of immersing his whole body enjoined by his Typee servant. The rite of baptism is thus taken place. Toby, in contrast, gives his real name and, receiving no special favors, soon disappears from the valley.

The phases of the narrator's second and third months in the valley must be what Melville is most desirous to create. We know through a series of symbolic actions that the narrator's rebirth is almost completed. But this accomplishment is still an external and visual phenomena. Melville depicts a world of people who are all good-will incarnate while the narrator fears it a deceptive expression. In order to become cognizant of the designated state of the people the narrator needs to undergo another process of metamorphosis. It is divesting himself of what the leg-ailment symbolizes: a suspicious mind, curiosity, reason, consciousness and intellectuality. These are characteristics of western minds unknown to the natives. The native physician cannot cure the pain because to the Typees it is caused by "some imaginary demon located in" (80) the calf. It is only through the healing that the narrator can ascend to the original state of man and the society, which is naturally a world beyond the boundary of time.

Gradually I lost all knowledge of the regular recurrence of the days of the week, and sunk insensibly into that kind of apathy which ensues after some violent outbreak of despair. My limb suddenly healed, the swelling went down, the pain subsided, and I had every reason to suppose I should soon completely recover from the affliction that had so long tormented me. (123)

The opening part of chapter 17 is charged with the highest dramatic tension. The narrator finally succeeds in getting to the heart of his adventures: he feels with physical reality what it is to be among the primitive people he has been acquainted with so far only ideologically. Melville ingeniously tells us that whether you think the native noble or ignoble is a matter of your frame of mind. The narrator's fear of cannibalism disappears together with the leg-ailment he has suffered. Viewed "in the altered frame of mind" (126) the little valley surrounded by steep mountains and sea is now turned into a paradise filled with "perpetual hilarity" where innocent, happy people live with "no cares, griefs, troubles, or vexations." It is notable that Melville excludes every vestige that reminds one of anything related to death: the narrator does not see a funeral, finds no burial ground and, though he sees only one invalid, says "sickness was almost unknown" (127). This is a place of eternal life. If "the central doctrine of all religion is the denial that death implies the automatic annihilation of the individual self" as Edmund Leach tells

us,²¹ Melville's Typee is a mythical and sacred world where mortality is totally banished, a world contrastive to the secular present historical time to which the narrator belongs.

The narrator's observations of the Typees during the days after he met Marnoo are characterized by the inborn nature of primitive man in comparison with the current state of civilized western countries. "Everything went on in the valley with a harmony and smoothness unparalleled, I will venture to assert, in the most select, refined, and pious associations of mortals in Christendom" (200), he says and continues that the Typees are governed "by an inherent principle of honesty and charity towards each other" which are the common-law of their society. He insists that the human race all over the world is by nature given the "perception of what is *just* and *noble*" (201), and that this is the basic attitude in their associations with each other in Typee. This means that since virtues and benevolence are inborn characteristics of man, they are shown naturally by the primitive people. So that if civilized people fail to show these virtues, that is the evidence of their degeneration. The point to note is that the narrator is most impressed by the unanimity of feeling the Typees display on every occasion. "With them there hardly appeared to be any difference of opinion upon any subject whatever," he claims (203). Class differences are hard to be noticed here. It is only after the Feast of Calabashes that the narrator discovers that "noble savage Mehevi" (189) is the chief of chiefs.

In depicting idealized Typee life, Melville could find in the literary tradition models and examples in which a simple society is highlighted as a utopia.²² Melville's narrator, however, steps further into the mythical world. He is not a mere romancer as his predecessors were, but he is a direct experiencer as well. His sympathies with the natives and their life are most affectionately and explicitly expressed in the scene of his visit to the mausoleum for a deceased warrior chief. An effigy of the chief is seated in the stern of a beautifully decorated canoe which is raised on a frame. The effigy in a robe of brown tappa reveals only a wooden head and hands which are holding paddles in the act of rowing. The narrator learns that the chief is paddling his way to the Polynesian heaven.

Whenever in the course of my rambles through the valley I happened to be near the chief's mausoleum, I always turned aside to visit it. The place had a peculiar charm for me; I hardly know why; but so it was. As I leaned over the railing and gazed upon the strange effigy and watched the play of the feathery head-dress, stirred by the same breeze which in low tones breathed amidst the lofty palm-trees, I loved to yield myself up to the fanciful superstition of the islanders, and could almost believe that the grim warrior was bound heavenward. In this mood when I turned to depart, I bade him

“God speed, and a pleasant voyage.” Aye, paddle away, brave chieftain, to the land of spirits! *To the material eye* thou makest but little progress; but with *the eye of faith*, I see thy canoe cleaving the bright waves, which die away on those dimly looming shores of Paradise. (173, emphasis added)

He shows in his imagination remarkable conformity in looking at the effigy with “the eyes of faith” to prove that he, a civilized man, still retains and shares the “immortal spirit” (173) the primitives have. Melville seems to suggest if one sees Typees and their society with “the eye of faith” one can identify them as the prehistoric primitive people that Rousseau vehemently admired. The narrator’s adventure to a mythical world thus reaches the climax in his sense of identity in the happy valley which innocent, noble savages inhabit.

The narrator’s suggestion of two ways of looking at things also explains his descriptions of Typean religious practices. With his “material eyes” he makes careful observations of their religious customs which he says he witnesses almost every day and concludes that the “thoughtless inhabitants” are not at all serious about their religious affairs and that their proceedings of rites look like “a parcel of children playing with dolls and baby houses” (176). That the natives are childish, thoughtless and ignorant is the interpretation made from his faith, a strong belief that the Polynesians are the nearest-model of the original or infant state of man. But Melville’s artistic execution conflicts with history. The meaning of the childish religious rites eludes the narrator, for he says in irritation, “I saw everything, but could comprehend nothing” (177). His use of symbolism loses its implications here by suggesting he is not fully in control of what he is relating.²³

Every adventure comes to an end. The narrator’s return to the present state of affairs is a matter of course. Suffice it to say that all he needs is to resume his “material eye” in every way and dismiss the “eye of faith” from his mind. A new danger prompts him to face the state he finds himself in. The native practitioner of tattooing shows his interest in working on the narrator’s face and becomes persistent in demonstrating his artistic skill. “This incident opened my eyes,” the narrator says. “I now felt convinced that in some luckless hour I should be disfigured in such a manner as never more to have the *face* to return to my countrymen” (219). The lost sense of time is recovered. He recognizes the time that has passed by. “I had now been three months in their valley, as nearly as I could estimate” (231), he says. He again longs to leave the valley and his fear of cannibalism returns together with the leg-ailment. It becomes clear that cannibalism is a symbol of the fear of death embraced by Adam only after the Fall.²⁴

During the last month of his stay the Typees are no longer innocent and noble but poor and

shabby natives who seem to be practicing ugly vices. He witnesses three human heads in a package, one of which is that of a white man, and by chance he sees a dismembered skeleton of someone who he suggests is a recent victim of a cannibalistic rite. The following narrow escape is possible due to the fact that, when he manages to get to the forbidden shore, differences of opinion arise among the natives and they fall to quarreling. The final act for the narrator to ensure his escape is to dash the boat-hook at the throat of a native chief. The narrator behaves like one who displays "civilized barbarity" (125) which he had formerly been sharply critical of. He is now once more a mere common sailor.

The mixed images of the natives and the narrator's corresponding ambivalent feelings toward the Typee people are elaborated as the story develops and yet they are kept unreconciled to the end. We know that the contradictory images are caused by his alternating frames of mind, and the images themselves are the reflections of the western philosophy of ideas. Melville's art resides in his quest of finding a path down to the depths to have a glimpse of natural goodness and the nobility of man, morally and aesthetically the best state of mankind, and giving it a reality.

The narrator's journey is both physical and ideological. Geographically and culturally the Typee valley is isolated and preserved from the outside world. The barriers between them serve as protection against the destructive invasion of current western civilization as well as from its neighboring valleys, which are already eroded by its influence, showing the proof of this in the deterioration of the inhabitants' physical welfare. Ironically, the isolation of Typee is brought about by the rumors that the natives are the most vicious and ferocious savage whose very name is proof enough. For the narrator to descend to the bottom of the valley and to escape from there by way of the sea obviously requires risking his own life. His journey is the process of undertaking the roles allotted him: a common sailor, a mythical being in the mountains, an initiated novice in the valley and a common sailor again.

The narrator is rescued from the primitive valley and restored to his present self just as Ishmael is picked up after the turmoil of a sea battle to recount the whole story. The tattooed white man in *Omoo*, Lem Hardy, might have been his possible fate if he had "a musket and a bag of ammunition" and lost his face by having it permanently marked with designs from ear to ear.²⁵ The narrator, however, pursues chances to escape and at the first prospect of safety he falls back "fainting into the arms of Karakoe" (252). His unconscious return to his own world is highly suggestive that his adventure might have taken place in a dream. The Typee life of noble savages transcends the narrator's time and space. Such worlds are not a place to stay but a

place to visit periodically or metaphorically. Now that he has come back to his own self, he may set out on another journey, which we know he does in the next book.

Typee is Melville's first experimental voyage as a writer. It is a successful one in terms of its popular acceptance by his contemporary readers. They accepted the contradictory images of the Typees: opinions differ and ambivalent perspectives are the proof of the objective mind of the author.²⁶ If Melville relies on this literary tradition of his time, he consciously incorporates it into his art of fiction in sober seriousness, for here we can see the genesis of his ambiguous and complex attitude toward the subjects, which stays with him throughout his career as a writer. Melville gives us the nature of the Typees in contradictory forms, though the eyewitness is one and the same character. Melville finds this art of writing to be an effective method of showing how cultural ideas define and limit both the knowledge and proper perspectives of the objects observed. The complex interplay of objects and subjects is to be represented in a more dramatic and compact form later in *Moby Dick*, in the diverse interpretations, made by the members of the Pequod, of the figures and descriptions on a doubloon.²⁷ Melville is harsh on Christian civilization but ironically he makes symbolical use of Christian mythology for the very creation of the book as well as the characterization of the narrator. The use of symbolism may be confusing in some parts, but Melville is always conscious of the thematic construct ordering most of his materials in the writing of his first novel.

Notes

- 1 William Ellery Sedgwick says in his *Herman Melville: The Tragedy of Mind* (1944; rpt. New York: Russell & Russell, 1962), 20, "The narrative climax is deeply at odds with great parts of the book."
- 2 Leon Howard, "Historical Note" to Herman Melville, *Typee: A Peep at Polynesian Life*, eds. Harrison Hayward, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanston and Chicago: Northwestern Univ. Press and the Newberry Library, 1968), 279. For the skepticism of reviewers in London, see Hershel Parker, *Herman Melville: A Biography Volume 1, 1819-1851* (Baltimore: The Johns Hopkins Univ. Press, 1996), 399-401.
- 3 E. S. Craighill Handy, *The Native Culture in the Marquesas*, Bernice P. Bishop Museum Bulletin 9, Bayard Dominick Expedition Publication Number 9 (Honolulu: The Museum, 1923, New York: Kraus Reprint Co., 1971), 90, 101, 105, 121 and et al. Melville is cited along with Krusenstern, Porter, Langsdorff, Stewart and other travelogues.

- 4 D. H. Lawrence, "Herman Melville's *Typee* and *Omoo*," in *Studies of Classic American Literature* (1920; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1971), 139-52.
- 5 For the interpretations of the narrator on this line, see Richard Ruland, "Melville and the Fortunate Fall: *Typee* as Eden," *Nineteenth Century Fiction*, 23: 3 (1968), 312-23; Sedgwick, 19-36; Richard Chase, *Herman Melville: A Critical Study* (1949; rpt. New York: Hafner, 1971), 9-15; Newton Arvin, *Herman Melville* (1950; rpt. Westport: Greenwood Press, 1972), 77-88; Milton R. Stern, *The fine Hammered Steel of Herman Melville* (Urbana: Univ. of Illinois Press, 1957), 29-65; Faith Pullin, "Melville's *Typee*: The Failure of Eden," in *New Perspective on Melville*, ed. Faith Pullin (Edinburgh: Univ. Press, 1978), 1-28; John Wenke, "Melville's *Typee*: A Tale of Two Worlds," in *Critical Essays on Herman Melville's Typee*, ed. Milton Stern (Boston: G. K. Hall & Co., 1982), 250-58. Milton Stern writes most extensively.
- 6 John Samson, "The Dynamics of History and Fiction in Melville's *Typee*," *American Quarterly*, 36(1984), 272-90.
- 7 "Historical Note," 343-44.
- 8 Charles Anderson in his *Melville in the South Seas* (New York; Columbia Univ. Press, 1939) provides biographical and ethnographic contexts in *Typee*. He examines in detail Melville's use of other travel books especially that of David Porter although the narrator says he has not met with this book. T. Walter Herbert, Jr. depicts three perspectives shown by representative Americans who faced Polynesian natives in 19th century in his *Marquesan Encounters: Melville and the Meaning of Civilization* (Cambridge; Harvard Univ. Press, 1980). For a short summary of the history of philosophy behind sailors and missionaries and their perceptual conflict reflected upon the narrator, see Samson.
- 9 See Herbert, 51-77, 78-118, and Strauss, 158,159.
- 10 I owe the history and theory of primitivism to A. O. Lovejoy, "Forward" to Louis Whitney's *Primitivism and the Idea of Progress* (Baltimore: Johns Hopkins Press, 1934), xi-xx.
- 11 W. Patrick Strauss, *Americans in Polynesia* (East Lansing: Michigan State Univ., 1963), 148-69.
- 12 *Ibid.* 48.
- 13 William Oland Bourne, "Typee: The Traducers of Mission" in *Critical Essays on Herman Melville's Typee*, 46.
- 14 See Herbert, 76 and Bourne, 50.
- 15 Herman Melville, *Typee: A Peep at Polynesian Life*, Vol. , *The Writings of Herman*

- Melville*, eds. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle, Northwestern-Newberry Edition (Evanston, Ill.: Northwestern University Press, 1968), xiii. Further references are made parenthetically in the text.
- 16 See Paul Witherington "The art of Melville's Art," *Arizona Quarterly* 26, 1970, 136-50. Witherington suggests (139-40) six major phases, segmentation of which is very different from the one I put forward here.
- 17 Charles Roberts Anderson, "Melville's South Sea Romance," *Eigo Seinen*, 115 (Tokyo: Kenkyusha, 1969), 481.
- 18 See Merton M. Seats, Jr., *Melville's Reading* (Columbia: Univ. of South Carolina Press, 1988), 39, 171. Among the books he bought in late 1847 and 1848 is Dante Alighieri's *The Vision: or Hell, Purgatory and Paradise* but it is not clear if Melville read Dante before 1947.
- 19 Anon., *Historical Account of the Circumnavigation of the Globe and the Progress of Discovery* (Edinburgh: Oliver and Boyd, 1836, rpt., London and Edinburgh: Thomas Nelson, Paternoster Row, 1849). I refer to this book as *Circumnavigation* for further references. This is also one of the books mentioned in *Typee* and exceptional attention is paid to it in the footnote in chapter 25. The historical accounts of the nautical enterprises by the European navigations in this book range from Ferdinand Magellan in the early sixteenth century to Captain James Cook's third voyage in the latter half of eighteenth century. These navigations were carried out under the auspices of the then monarchs that had territorial ambitions outside of their countries. The perilous expeditions around the globe were projects of imperialist European nation-states, like Portuguese, Spain, Holland, Belgium, Britain, France and Germany and the practices of colonization were done by explorers especially in the South Seas after Magellan found a way there on his expedition of 1519. Most cruises lasted from two to three years and the recorded annals were made public on their return home. Referring these documents and explaining political and historical backgrounds the author of the book gives an outline of each expedition, sums up impressive and memorable events and thus reproduces the cruises in chronological order in plain language and in a style that sustains the readers' interest.
- 20 CF. Witherington, 143-4; Samson, 284.
- 21 Edmund Leach, *Culture and Communication: The Logic by which Symbols Are Connected* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1976), 71.
- 22 See Thomas J. Scorza, "Tragedy in the State of Nature: Melville's *Typee*," *Interpretation*, 6, no. 1 (January, 1979), rpt. in *Critical Essays on Herman Melville's Typee*, 233-37. Scorza takes up Socrates' description in *Republic*, Plato's *Laws*, Diderot's

Supplement to Bougainville's Voyage and special attention is paid to Montaigne's essay "Of Cannibals," Gonzalo's utopian plan in Shakespeare's *The Tempest* and Rousseau's *First and Second Discourses*.

- 23 This is also Melville's excuse for the biased and fictional understanding of a people through certain ideological frames of mind though ironically his excuse gives additional color of ambiguity to the novel. T. Walter Herbert for the first time poses the question by saying, "What I will not be able to provide is a comparative understanding of what it meant to be Marquesan...But the opportunity to create such an understanding has almost surely been lost." (*Marquesan Encounters*, 19) Tony Horwitz's *Blue Latitudes: Boldly Going Where Captain Cook Has Gone Before* (New York: Picador, 2002) is a record of recapturing the adventures of James Cook which took place two hundred years ago. At many places Cook visited Horwitz learns negative impressions of Cook which people passed down to posterity.
- 24 Samuel Otter in his *Melville's Anatomies* (Berkeley: Univ. of California Press, 1999) introduces the literary narratives of "theatricality" of cannibalism, some of which are the sources Melville relies upon. Otter claims that the narrator's discovery of cannibalistic rites is not convincing and says "the emphasis on cannibalism at the end of *Typee* diverts attention from the deeper threat" (19) of tattooing.
- 25 Herman Melville, *Omoa*, eds. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle, Northwestern-Newberry Edition (Evanston, Ill.: Northwestern University Press, 1968), 27.
- 26 See Sheila Post-Lauria's excellent analysis of contemporary popular narrative forms and multiplicity of readerships in *Correspondent Colorings: Melville in the Marketplace* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1996), 27-46.
- 27 Herman Melville, *Moby Dick or The Whale*, eds. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle, Northwestern-Newberry Edition (Evanston, Ill.: Northwestern University Press, 1988), 430-35.

北見工業大学論文集「人間科学研究」投稿等に関する内規

制 定 平成16年6月24日

一部改正 平成17年12月13日

附属図書館委員会

- 第1条 北見工業大学（以下「本学」という。）において刊行する論文集「人間科学研究」（以下「論文集」という。）への投稿、審査及び編集については、別に定めるもののほか、この内規の定めるところによる。
- 第2条 論文集は、CD-ROMによる年1回の刊行とし、本学ホームページにおいて公開する。
- 第3条 論文集の編集事務は、附属図書館委員会（以下「委員会」という。）が行なう。
- 第4条 論文集の内容は、投稿論文、依頼論文、書評、ノート、資料等とし、委員会が投稿論文、依頼論文、その他に区分して掲載する。
- 第5条 論文集に投稿できる者は、本学教員及び教務職員並びに附属図書館委員会が認めた者とする。
- 第6条 投稿論文は未発表のものであること。ただし、既に口頭で発表し、その旨を明記してある場合は審査の対象とする。
- 第7条 投稿論文の掲載可否は、委員会が依頼する学外者の査読の結果を踏まえ、委員会が決定する。
- 第8条 投稿論文以外は、委員会が内容を審査し、加筆、削除を求めることができる。
- 第9条 投稿要領は、委員会が別に定める。
- 第10条 投稿論文は、オリジナル及び査読用コピー2部並びに概要説明文1部を図書館委員会へ提出すること。
- 第11条 投稿論文の校正は、査読後を含め、2回執筆者が行なうものとし、2校目の訂正加筆は、植字の誤りにとどめ、内容に関する訂正加筆は認めない。
- 第12条 投稿論文の経費は、CD-ROMの原盤作成経費を除き受益者負担とする。
- 第13条 論文集に掲載された著作物の著作権は、委員会に帰属する。
- 第14条 掲載論文等の執筆者は、営利を目的とせず、かつ、その複製物の提供を受ける者から料金を受けない場合には、自著の掲載論文等を委員会の許諾なしに複製し、印刷 媒体・電子媒体等で配布・公開することができる。その場合は、論文集の誌名、巻号、発行年等の出典及び著作権者名を明記すること。
- 2 掲載論文等の執筆者は、自著の掲載論文等の全部又は一部を原文のまま又は一部改変して他の著作物に転載することができる。その場合は、論文集の誌名、巻号、発行年等の出典及び著作権者名を明記すると共に事前に文書で委員会に届け出ること。

『人間科学研究』投稿要領

制 定 平成 16 年 6 月 24 日

一部改正 平成 17 年 12 月 13 日

人間科学研究編集委員会

1. 投稿方法

投稿は原則として、MS-WORD・一太郎・OASYS等ワープロの電子ファイル（フロッピーディスク等）で入稿する。書院・RUPO等のワープロ専用機の場合はテキストファイルに変換して、プリントアウト原稿を添えて入稿する。

2. 原稿枚数の制限

原稿はA4用紙縦書きで、40行×25字で作成する。枚数制限は本文及び注を含めて20枚。ただし、枚数を越える原稿も執筆者負担費用を増額することにより、受け入れる。欧文原稿の場合、ダブルスペース25行で10,000語とする。

3. アブストラクト（要旨）

論文は、冒頭に200語以内の英文のアブストラクト（要旨）を付けること。

4. 電子ファイルの名前は、内容がわかりやすい題にすること。人間科学研究・原稿などのネーミングは、重複する可能性があるのを避けること。執筆者の名前を冠することが望ましい。

5. 図・表・写真等はなるべく原稿の中に取り込むこと。不具合が生じる心配がある場合、編集委員会にあらかじめ相談すること。

6. 文字の体裁に冠して

a. 段落は全角1字空けで始めて、改行記号で終わること。オートマージン（右端揃え機能）以外には、自分で文中にスペースを挿入しないこと。オートハイフネーション（行末ハイフン）以外のハイフンは付けないこと。

b. 英数字・記号は半角文字。

c. 脚注・原稿未注は、いずれでもかまわない。

7. 誌面はA5版となる。

論文集「人間科学研究」査読要領

制 定 平成16年8月3日
人間科学研究編集委員会

当委員会は投稿論文の掲載審査を2名の査読者の判定を基に行いません。査読者にはフルペーパー査読を依頼し、掲載可否の判定と講評を提出していただき、当委員会の判断資料とします。また、査読者は、論理的・記述的曖昧さをなくすために、表現等の修正を「修正意見」として提出していただきます。

掲載可否の判定は、「可」又は「否」で表現していただきます。なお、その判定に至った理由を別紙「人間科学研究 論文査読票」により提出していただきます。

査読の方法

評価

査読に当たり、投稿論文がその分野において、いかなる位置づけにあるか、新たな観点から考察された内容を含んでいるか、等の点について以下の項目に照らして客観的に評価してください。

- 1 新規性：内容が既知のことから容易に導き得るものではないこと。
 - a) 主題、内容、手法に独創性がある
 - b) 学界、社会に重要な問題を提起している
 - c) 時宜を得た主題に関して、新しい知見と見解を提示している
- 2 完成度：内容が読者に理解できるように簡潔、明瞭、かつ平易に記述されていること。

この場合、次のような点についても評価してください。

 - a) 全体の構成が適切である
 - b) 目的と結果が明確である
 - c) 既往の研究との関連性が明確である
 - d) 文章表現は適切である
 - e) 全体的に冗長になっていないか
- 3 信頼度：内容に重大な誤りがなく、また、読者から見て信用のおけるものであること。

- a) 重要な文献がもれなく引用され、公平に評価されているか
- b) 従来からの研究成果との比較や評価がなされ、適正な結論が導かれているか

判定

論文掲載の最終判断は、編集委員会において行ないますが、査読論文が水準以上であれば掲載「可」とし、掲載するほどの内容を含まないと考える場合、および掲載すべきではない場合は「否」としてください。なお、「否」とする場合は、以下の項目で該当するものを選び査読票に示すと共に理由を具体的に記述してください。

誤り

- a) 理論又は考えのプロセスに客観的・本質的な誤りがある
- b) 資料整理に誤りがある
- c) 明らかに不相応な理論を当てはめて論文が構成されている
- d) 都合のよい資料・文献のみを利用して議論が進められ、明らかに公正でない記述により論文が構成されている
- e) 修正を要する根本的な指摘事項をあまりにも多く含んでいる

既発表

- a) 明らかに既発表とみなされる
- b) 独立した論文と認めがたい
- c) 他人の研究成果をあたかも本人のもののごとく記述して論文が構成されている

レベルが低い

- a) 通説が述べられているだけで、新しい知見がまったくない
- b) 多少の有用な資料は含んでいても論文にするほどの価値がまったく見当たらない
- c) 論文するには明らかに研究がその水準まで進展していない
- d) 着想が悪く、当然の結果しか得られていない
- e) 研究内容が単に他の分野で行なわれている方法の模倣で、まったく意味を持たない

修正意見

編集委員会は修正意見を著者に伝え、その回答により掲載の判定を行います。また再査読が必要と判断された場合は再査読を依頼致します。

査読者一覧

天野 勝弘	飯吉 光夫	伊坂 忠夫
伊藤 知義	井上 和子	上西 哲雄
大江泰一郎	大久保健治	太田 耕人
岡本 靖正	小川 芳樹	勝山 貴之
川村 二郎	小森田秋夫	篠田 優
島 越郎	菅原 勉	高橋 美佳
竹森 正孝	谷 和明	時崎 久夫
時実 早苗	友末 亮三	長田 謙一
西山 哲成	平子 友長	藤平 育子
溝越 彰	三好 暢博	山田 昭廣
山本 真司	山本 憲志	渡辺 憲正
A. B. Spevakovski	Alfred F. Majewicz	Juha A. Janhunen

人間科学研究編集委員会

委員長	附属図書館長	大島俊之 (9476)	
委員	助教授	柴野純一 (9241)	機械システム工学科
"	教授	吉田公策 (9265)	電気電子工学科
"	教授	山田浩嗣 (9339)	情報システム工学科
"	助教授	星雅之 (9403)	化学システム工学科
"	助教授	川村みどり (9451)	機能材料工学科
"	助教授	亀田貴雄 (9506)	土木開発工学科
"	教授	平野温美 (9543)	共通講座

平成 18 年 3 月 20 日 発行

編集兼発行者 国立大学法人北見工業大学

090・8507 北見市公園町 165 番地

T E L (0157) 26・9177
